
科学な異世界記録

佐藤 和樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

科学な異世界記録

【Nコード】

N3083N

【作者名】

佐藤 和樹

【あらすじ】

自称スーパー科学者というじいさんと共に異世界へ行くことになった青年、白河輝彦。しかし、いざ行ってみたら異世界は魔王やら秘密結社やらに狙われていて……！？

大切な異世界の仲間たちを守るため、弱気な青年がぶっ飛んだ敵と戦う！

ブローグ

ブローグ

闇の堆積した、いずこにあるとも知れぬ部屋。

その中心に一人の男が座っていた。つやのない銀髪、いや白髪で室内の闇に溶ける黒い服を身につけている。その顔は高い筋の通った鼻と大きな眼が特徴的で大変整っていた。

だが、乾燥してかさついた肌と獣のような眼光によって男の顔はその美しさを根こそぎ奪い取られていた。

そんな男は木目の浮いた光沢のある机の上に紙の束を広げ、ウンウン唸りながら目を通していた。

「ほう……これは」

男の目がある資料の上で止まる。男はその資料を手にとると食い入るように読み漁り始めた。

「はは、素晴らしい、これこそ私の求めていた結果だ」

男は資料を机の上に放ると、笑い始めた。狂気に染まった声が室内の澱んだ空気を揺るがせる。

「これが成功すれば私は至高の存在になれる！ 失ったものを再びこの手に取り戻すのだ！ もう一度、もう一度あの日に戻る！」

男は立ち上がり、拳を突き上げる。その快哉の叫びは深い闇に吸い込まれていった。

今、何かの歯車が回り始めた。

第一話 旅立ち（前書き）

電波が飛んで来て書きました。

駄作ですが読んで下さるとありがたいです。

第一話 旅立ち

第一話 旅立ち

僕は解雇された。

もともと小さな運送会社で働いていたがリストラされたのだ。

二十歳にもなって実家の世話になるのも気が引けて、夜の街を歩く。

「異世界調査の人員募集中？ 秋葉科学研究所？ 本当かなあ」

僕はビルの壁に張られたおかし過ぎるチラシに目を止めた。目を疑いたくなる内容だ。ありえない。でも貴重な求人広告だ。今を逃したら職にありつけないかもしれない。とりあえず僕はチラシに書かれていた住所に向かうことにした。

- - - - -

チラシの住所に行くと古い洋館が建っていた。大正とかそういう時代の建物といった感じだ。

「すいませーん。チラシ見て来ましたー」

呼び鈴を鳴らすと中から白髪の老人が出て来た。もじやもじや頭で背は低め。目つきが鋭く気難しそうだ。

「このスーパー科学者秋葉文明になんのようなのだ？」

老人は実に不機嫌そうな顔をした。僕は何も悪いことしてない

のにな。というか自分で自分をスーパーって言ったよこの人。ある意味尊敬出来そうだ。

「求人広告見て来ました。ここが秋葉研究所ですよ」

「おお、求人広告を見て来たのか。てつきり役所の人間がわしに苦情を言いに来たのかと思ってな。すまんすまん」

秋葉さんは頭をかくと、僕を研究所の中に招き入れた。
研究所の中は外観通りレトロな感じで、その中に未来的なデザインの研究機材らしきものが置かれている。

「さっそく君に仕事の説明をしよう。まず君は異世界を信じるかね」

居間のような部屋のソファーに腰かけた秋葉さんが、うれしそうに話かけて来た。ずいぶんせっかちなようだ。

「一応、まあ」

信じているわけではなかったが当たり障りのない返事をして
おいた。

「そうか！　今まで誰も信じてくれなかったからな！　感動した！」

僕が秋葉さんのテンションに圧倒されている間に、秋葉さんは機関銃のように話続けた。

「信じているなら話は早い。君の仕事はわしと共に異世界の調査をすることだ。君はこの間の電波障害のことは覚えておるかな？」

わしはあれが異世界からの干渉によるものだと考えた！」

なんという珍説。太陽活動が原因ではなかったのか。

「そしてわしは異世界への入口を作ること成功したあ！」

拳を振り上げ秋葉さんはシャウトする。耳に響いて大変だ。

「説明よし！ それでは調査に出かけるぞ！」

「え、待って下さい秋葉さん！」

秋葉さんはいきなり部屋から飛び出して行こうとした。僕は慌てて止める。

「秋葉さんではない！博士と呼ぶんだ助手A！」

「僕には白河 輝彦って名前があります！ってそういう問題じゃない！」

秋葉さん、訂正、博士は怪しい階段を下り地下へと向かった。僕は全速力でそれを追う。

「ふふふ、これがわしの開発したスーパー異世界トリップくんだ。これは量子テレポートの理論を応用したもので……」

博士は大きな装置の前で立ち止まり、難しい説明を始めた。僕にはよくわからない。暇なので装置の観察をすることにする。装置は銀色のリングのような形のものと同角い箱のような形のもの。がたくさんのコードで繋がっている。大きさはリングが大人一人余裕で

通れるくらいで箱の方は大きめの筆筒くらいだろうか。

「……というのがこの装置の説明だ。理解できたか？」

博士が説明を終えたようで僕に話を振ってきた。

「ええ、なんとか」

「では出発するぞ！」

「ちよつとタンマ！ 準備しないで良いんですか！？」

博士は小さな巾着袋を自慢げに取り出した。

「ははは！ 荷物ならこの無限巾着に入っておるわ！ では次元の果てへ、さあ行くぞ！」

博士は装置につけられていた赤いボタンを老人とは思えぬ気合とともに押した。

装置が轟音を立てて建物が揺れ始めるやがてリングの内側が七色にきらめいた。すると視界が白くなり、僕の意識は飛んだ。

「大丈夫か。おい！」

僕は博士に起こされた。辺りをゆっくり見回す。

大人が抱えられそうもないほどの巨木の群れにひんやり心地好い清浄な空気。本当に僕は異世界に来てしまったようだ……。

なんてことだ。せめて友人たちに挨拶ぐらいしたかった。

もつとも信じてくれなかっただろうが。

「ふむ、気がついたか。それにしても深い森だな。街へ行きたいのだが……近くに誰もおらんようだ。仕方ない、このレーダーで探そうかの」

博士はパラボラアンテナのような形のレーダーを取り出した。

おかしいな。僕はそう思った。今さっき、木の影に女の人を見たような気がしたのだ。僕はもう一度辺りを良く見回す。いたいた、民族衣装のような服を着た女の人だ。

「博士、あっちに人がいますよ。あの人に街までの道を聞いたらどうですか？」

博士は僕の指差した方角を見た。博士は怪訝な顔をする。

「なんじゃ、誰もおらんではないか」

おかしい、確かにいるではないか。博士は老眼なのだろうか。それにしても限度がある。

女の方はどんどん接近してきた。綺麗な人だ。目鼻立ちがはっきりしていて風を孕んだ黄金色の髪がすばらしい。体型もメリハリがきいていて理想的なバランスだ。

「博士！ 目の前にいるじゃないですか！」

女の方はついに博士の目の前まで来た。それにも関わらず博士はレーダーを手に唸っている。まさかあの女の方は幽霊なのか。嫌な考えが頭を過ぎったとき、彼女が言葉を発した。

「私が見えるのか？」

それがこの世界で初めての出会いだった。

第一話 旅立ち（後書き）

感想・評価をお願いします！

第二話 精霊さんあらわる！（前書き）

タイトル通りの内容です。

第二話 精霊さんあらわる！

第二話 精霊さんあらわる！

僕は怪奇現象に遭遇していた。目の前に女の人がいるのだが、僕以外には彼女が見えないようなのだ。

「あなたなんですか！」

僕はどうにか声を搾り出した。その声は恐怖で震えてしまっている。

「私は精霊だ。それにしてもお前、私が見えるのか？」

精霊？　なんてファンタジーな存在だ。異世界に来たとはいえこんなに早く出会うとは。

「見えますよ。博士には見えないようですけど」

「やっぱり気のせいではなかったか。見える人間に会うのは久しぶりだ。うれしいぞ」

精霊さんは嬉しそうに笑った。僕も釣られて笑う。

ここで博士が僕の様子がおかしいことに気づいた。

「どうしたのだ？　さてはその辺の笑い苺でも食べたか？」

精霊さんの見えない博士は不審者でも見るような目をした。

「いや、精霊さんと話しているんですよ。博士には見えないようですけどね」

博士は極限まで目を見開き僕を見つめた。

「なんだと……そんな興味深いものが……。見せろ、見せるんだ！わしの脳細胞が研究対象をよこせと叫んでおるう！」

博士は血走った目で僕を押し倒した。必死にもがくが博士の力は信じられないほど強い。
死ぬ！ 死んでしまう！

「な、なあそちらの御仁は私が見たくて騒いでいるのか？」

「そうですよ！ なんとかしてー！」

精霊さんは顎に手を当てて何やら考え始めた。早く、早くなんとかして！ 意識がなくなりそうだ！

「仕方ないな、放置して置いたら殺されそうだし……」

精霊さんはぶつぶつとつぶやくとまばゆい光を放った。光が収まると博士は鼻息を荒くした。

「おお、素晴らしい！ さすが異世界、精霊が実在するとはな！」

精霊さんが見えるようになったようだ。博士はさっそく恍惚とした顔をして精霊さんを見る。

「すまないが、もうそろそろ元に戻っていいか？ 実体化は力を

使うのだ」

しばらくして精霊さんは申し訳なさそうに博士に切り出した。
すでに機材を巾着から取り出して調べる気マンマンだった博士は顔を真っ青にする。

「そんな、あともう少しなんとかならんのか！」

博士に懇願された精霊さんは急に僕の方を向いた。

「君が私と契約してくれるならあるいは……」

そんなこといきなり言われても……。

困った僕は博士の方を見てアイコンタクトで助けを求める。

「契約するのだ。しなかったら人間核燃料として原子炉に入ってもらう」

博士はにこやかに言った。光線が出せそうな目をしていた。

「精霊さん！　ぜひ契約しましょう！」

「そうかやってくれるか！」

精霊さんは指を噛んだ。赤い血が少しずつ出てくる。

「君も早く血をだすんだ」

痛いのは嫌だが命には代えられない。僕は指を噛み血を出した。

「私の血を吸ってくれ」

精霊さんの血を吸うと少し甘かった。僕が血を吸い終わると、精霊さんは僕の指を見つめる。指を差し出して欲しいようだ。僕が指を差し出すと、彼女は血をおいしそうに吸った。

この人、実は吸血鬼じゃないのか。

「あとは私に名前をつけてくれれば契約完了だ。良い名前を期待するぞ」

名前ねえ……。神話とか読まないから精霊の名前なんて知らないなあ。どうしよう。期待を込めた目で見てくる彼女に変な名前つけたくないし。僕は脳内辞典を全力で探した。

「スフィアなんてどうだろう？」

スフィアというのはゲームの登場人物だ。僕の脳にある名前のストックなんてこんなものである。

「スフィアか。悪くないな。良いだろう、契約完了だ」

スフィアはほえんだ。僕はホッとため息をつく。

「よしよし、上手くいったようだな。えらいぞ白河君」

博士は手をパチパチと叩いて僕とがっしり握手をした。

「さて、スフィア君だったかの。街までの行き方を知っておるか？ わしらは街へ行きたいのだが」

「待つて待つて！ 契約しましたけど副作用とかないんですか？
すごく心配ですよ」

僕は心配だったので我慢できずに聞いた。スフィアは自信ありげに胸を張る。大きな胸が強調された。青少年には刺激的すぎる姿だ。

「副作用なんてとんでもない！ 精霊との契約は人間にとっていいことばかりだぞ」

「例えばどんなことですか？」

「魔力が上がったり、身体能力が上がったりするな。あと精霊魔法を使えるようになるぞ」

やっぱりあったか魔法。どこまでもファンタジーなんだな。

「あと一番重要なのは……」

スフィアが僕にしな垂れかかって来た。大きな膨らみが当たり、僕は顔を赤くする。

「私が君のものになっちゃうことだぞ。これからはいつも私と一緒にだな」

何ですと……。かわいらしくしかもサラリととんでもないことを言っただよこの精霊さん。

「スフィアが僕のものになるってどういうことなんだー！ それにいつも一緒なんて……。ありえませーん！」

「ありえないってどういうことだ？ 私はそんなに魅力ないのか？」

スフィアは涙目で僕を見つめる。その目つきはずるいぞ。

「そういう訳ではないですけど……。スフィアさんの方は良いんですか？」

「見える人間との契約は名誉なことだからな。私はまったく構わないぞ」

スフィアは僕に腕を絡ませて来た。さらに居心地良さそうに抱きついて来る。正直血圧が上がりすぎてやばいです。

「わしも良いぞ。研究対象が近くにいてくれるのはありがたい」

博士！ 一応僕はあなたの助手って扱いなんですよ！ 助手の危機を助けて下さいよ！

「さて決まったな。さっき街の場所を聞いたよな。もう日が暮れそうだ、続きは街についてからにしよう」

スフィアがその場を仕切って街へと歩き始めた。

僕と博士もすぐに後をついて行く。こうして僕らは街へと向かった。

第二話 精霊さんあらわる！（後書き）

作業がはかどることはかどること。こういう話は作者大好きです。
ぜひ感想よろしくお願いします。

第三話 街に着きました（前書き）

すいません！主人公が強くなるのはもう少し後になります

第三話 街に着きました

第三話 街に着きました

僕は街の前まで来ていた。森の近くの草原にある街で、周囲を大人の背丈より高い塀で囲まれている。

「あれがこの辺りで一番大きな街、リンドンだ」

「まさにファンタジー！ 素晴らしいぞ！」

博士は顔を真っ赤にして心臓に悪そうなほど興奮している。

そういう僕もテンション上がっているけれど。

スフィアはお上りさんのような僕らに苦笑しながらも、街の入口のところまで案内してくれた。

「ここが街の入口だ。門番に顔を見せて犯罪人かどうか調べてもらえば通れるぞ」

スフィアは門の横にいる大柄な門番の男を見て言った。

「精霊なのにずいぶん詳しいですね。

何かあったんですか？」

「いや、暇だから時々街を覗くんだ。人間の街は退屈しないからな」

この世界で犯罪なんて犯しているはずのない僕らは無事に門を通り抜けて街の中に入った。街には二階建てぐらいの石造りの建物が建ち並び、道路には石が敷き詰められている。もう夕方なのだが

人通りは多く、中には酔っ払いのような人もいた。

「うおおっ！ 中世の町並みそのままではないか。」

博士、叫ばないで下さい。周囲の人の視線が冷たいです。異世界に来て早々、変質者扱いされたくありません。

「さっきからあの御仁は叫んでばかりだがご主人様たちはよっぽど田舎からきたのか？」

「なんというか、うーん……。そのうち話しますからとりあえずご主人様はやめてください。白河で良いです」

そのうちとは言ったが話すべきだろうか。異世界なんて現実的でないしなあ……。

「そのうちと言わず今教えてやれば良いだろう。スフィア君、わたしはわしのスーパーな科学力で異世界からきたんだ」

博士？ いきなり爆弾発言はやめて下さい！ スフィアだつていきなりすることに引いてますよ……。あれ、どうしてスフィア目を輝かせているの？

「すごい！ 異世界から来るなんてあなたは賢者なんですね！」
スフィア適応力高いんですね。博士のテンションについて行ってますよ……。

「ははは！ わしは知能指数四桁だからな！ 尊敬したまえ」

あの、知能指数四桁って人間じゃないと思いますよ？

「知能指数ってよくわからないがすごいんだな！」

スフィア、博士をのせたらダメですよ。何をするかわからないんだから。

「そうだろそうだろ。よし、わしのすごさを分かせてやろう」

博士は怪しげな銃みたいな物体を取り出した。博士の目が不気味に光る。

「特別にわしが最近開発したこの波動銃の威力を見せてやる！」

博士は波動銃の部品をいじった。銃口に光が集まってくる。銃が澄んだ金属音を発し始めた。やばい気配がする！

「博士！ やめて下さい！ そんなやばそうな武器使わないで下さい！」

「そ、そうだな。すごさは十分わかったから使わなくて良い！」

「なんだ、つまらん」

博士は残念そうに波動銃を巾着にしまった。世界の危機は救われたようだ。

「あ、危なかった。とにかく宿へ行って今日のところは休みませんか？」

早く落ち着けるところに博士を連れて行かないと危険だ！
危険すぎる！

「それもそうだな。宿を探すとするか」

博士は納得したようで、僕は宿を探すことになった。

僕はベッドのマークの看板のかけられた大きな建物の前に着いた。

「そう言えばお金どうするんですか？ 円しか持って無いんですけど」

僕はここに来てお金が無いことに気がついた。スフィアも困った顔をする。

「私もすまないが金は持って無いなあ……」

「大丈夫だ。わしが貴金属を一通り持っておる。どれか価値があるだろうて」

博士は巾着から大量の金や銀を取り出して見せると宿屋のドアを開けて入って行った。

僕とスフィアもついて行く。

「いらっしやい。一泊一万ルーツだよ」

髭を生やしたおじさんが愛想よく挨拶してきた。ルーツと言うの

は通貨単位らしい。

「これで足りるか」

宿屋のおじさんは大量の財宝を前にして目を丸くした。

「こ、こんなにいらねえよ！　ちよつと待つてな」

おじさんはカウンターの奥から天秤ばかりを持ってきた。そして金塊をわずかに削り、重さをはかる。

「こんだけで十分だ。じいさん、悪いことは言わねえから両替屋でルーツに換金してもらうんだ。そんで銀行に少しあずけるといい。このままだと無用心すぎるぜ」

「ふむ、ありがとう。そうするぞ」

「部屋は二階の左はじだぞ」

親切な宿屋のおじさんに感謝しつつ、僕は階段を登った。部屋の内装は質素だったが、家具はしっかりと作りになっていて、ベッドはきちんと三つある。うん……？

「スフィアさんと僕たち同じ部屋じゃまずいですよ！　別に部屋取って来ます！」

「いいじゃないか。私の覗いた冒険者たちはだいたい男女一緒に泊まっていたぞ。それに私と白河の仲じゃないか」

スフィアは部屋のドアをしつかりと塞いで動こうとしない。し

ようがないな。

「着替える時はちゃんと言ってくださいよ。窓の方をむきますから」

「照れなくてもいいのに」

スフィアは一緒にいられるとわかって安心したのかベッドに腰を下ろした。僕も腰を下ろす。

やれやれ、やっと落ち着いた。

「さて、落ち着いたことだし、質問良いかの？」

博士が待つてましたと言わんばかりの口調でスフィアに尋ねる。

「ああ、私の知っていることはさほどないが、できるだけ答えよう」

「まずこの世界とこの国の基本的なことを教えてくれんか？」

「まずこの世界の名前はルーセリアと言って、約三億人の人間とその他たくさん種族が住んでいる」

その他ってエルフとかなのかな。会ってみたいものだ。

「ほうほう、続けてくれ」

「この国の名前はハイランド王国。大陸にたくさんある人間の国の一つだな。私は他の国に行ったことがないからよくわからないが商業で栄えているらしい」

王国だったんだなこの国。ということは王様がいるわけか。ど

ういう人なんだろうか。

「私は人間ではないからこれぐらいしか知らないな」

スフィアは意外というか当然というかほとんど世間について知らないらしい。

「かまわんぞ。他は自分の手で調べるからな。ところで先程から思っ
ておったのだが、どうして言葉が通じるのだ？」

そう言えばそうだ。今までどうして言葉が通じたんだろう？
異世界パワーのおかげなのか？

「それは私の加護のおかげだな。契約してよかっただろう白河？」

スフィアがいきなり僕を押し倒す。
やめて、理性が飛ぶから！

「わしは空気が読める男だから下の酒場に行ってくるぞ」

変なところで空気読まないで！ 普段は読まなくせに！

「ふふ、夜は長いぞ」

スフィア落ち着いて！ 抱きしめないで！

こうして異世界で最初の夜は更けていった。

第三話 街に着きました（後書き）

感想・評価をお願いします！

第四話 魔力が最強ですと……！（前書き）

やりすぎたかも……。

第四話 魔力が最強ですと……！

第四話 魔力が最強ですと……！

翌日、僕らはこれからどうするのかを宿屋で話し合っていた。

「冒険者になるべきだと私は思うな。白河たちはこの世界のことを知りたいのだろう？　だったら冒険者が一番だ」

スフィアが昼近いのにまだ眠そうな顔をして言う。こころなしか僕への目がきつい。求めに応じなかったからってひどい。

「冒険者か。良いのう。わくわくするのう。白河君、スフィア君、さっそく冒険者になるのだ！」

博士は元気に叫ぶと巾着から新しい白衣を取り出して着た。白衣は博士の正装らしい。まずいぞ、このままでは冒険者なんて危険極まりない職業にされてしまう。

「あの、博士、スフィアはともかく一般人の僕が冒険者になるのは厳しいと思うのですが？」

僕の進言に博士は不適な笑みを持って答えた。

「なにをへタレておるのだ！　男なら戦いや冒険にロマンを感じるはずだぞ！」

さすがに博士だ。人の意見はほとんど聞かない。この人と出会ってから一日ぐらいしか経ってないが、行動パターンが読めてきた

ぞ。

博士はその後宿屋のおじさんから冒険者になる方法を聞き出し、宿屋を飛び出して行った。

「見る、ここが冒険組合だ！」

博士はある建物の前で立ち止まった。

こじんまりとしていて、ヨーロッパの田舎の役場といった雰囲気建物だ。僕はヨーロッパに行ったことないけど。

博士は建物の扉を勢いよく押し開け、中に威風堂々が入っていた。僕とスフィアも後が続く。

中では木製のカウンターに受付の人が座っていて、待合席のようなスペースにガタイの良い男たちがたむろしていた。

「いらつしやいませ。何かご用ですか？」

受付の人が僕らに声を掛けてきた。赤い制服のよく似合う人だ。加えて目が大きくて全体的にかわいらしい。

「新しく冒険者としてこの二人を登録して欲しいのだが」

博士は僕とスフィアの方を示した。自分はならないらしい。ずるいぞ博士。

「わかりました。ではまずこの書類に必要事項を書いて下さい」

受付の人は書類を差し出して来た。困ったな、読めないぞ。スフィアを近くに引き寄せ耳打ちする。

「スフィア、代筆してくれないかな。字が書けないんだ」

「私も人間の文字は不得手でな。精霊文字なら書けるのだが……。
すまないな」

精霊さんたち人間のことにもっと興味を持とうよ。

どうしよう、受付の人に素直に字が書けないと言つべきなのか。

「もしかして、あなたたち字が書けないんですか？」

ペンが動いていないことに気がついた受付の人が話し掛けて来た。僕とスフィアは恥ずかしげに小さく頷く。

「やっぱり。そういう人結構いるんですよ。最初から言ってくれればいいのに」

受付の人は笑いながら書類とペンを自分の手元に引き寄せた。

「名前と年齢、出身地を言つて下さい」

出身地なんてどうすればいいんだ？ 日本なんて言えないぞ。

「名前はスフィア、歳は十八、出身地はニカラ村だ」

「結構です。そちらの方もどうぞ」

スフィアはよどみなく答えた。どうしてそんなにすらすらと答えられるんだ。

参考にしようと思った僕は受付の人に少し時間をもらつとスフィアに話を聞いた。

「どうして精霊のスフィアが質問に答えられるんだ？」

「名前以外は全部出まかせだからな。なに、英雄クラスの活躍をしている者でも出身がよくわからないのがいるとさえ聞いたことがある。大丈夫だろう」

そうするしかないな。僕は受付の人に出まかせを言うことにした。

「用はすみしましたか？」

「まあ、なんとか」

「では改めて。名前、年齢、出身地を答えて下さい」

「名前は白河、歳は二十歳、出身地はウルト村です」

受付の人は適当な地名を言ったにもかかわらず、疑問は感じなかったようだ。すぐに大きな水晶球を取って来る。

「次は能力の測定です。この水晶に触って下さい」

スフィアが水晶に触れた。水晶に文字が浮かび上がり、さらにどんどん変化していく。

「筋力百二十、魔力三百、知力百八十！　すごい！　一般の平均を大きく上回ってますよ！　これなら期待できます」

受付の人が満面の笑みでスフィア見つめる。スフィアは恥ずかしそうに顔を赤らめると僕を見てきた。測定しろと言いたいようだ。

僕はおっかなびつくり水晶に触れた。

「筋力八十、魔力測定不能？」

受付の人は顔を歪めると水晶を引っ込め、また新しい水晶を持って来た。先程の物よりも一回り大きい。

「すみません。さっきの水晶、調子が悪い見たいでして。これに触ってもらえますか？」

僕はもう一度水晶に触れた。受付の人は水晶に浮かんだ数値を見て顔をまた歪めた。

「これもだめなの！ 困ったなあ。少し待ってて下さいね、すぐに戻りますから」

受付の人はカウンターの奥へと向かった。奥からガタゴト物音がしてくる。

やがて彼女は体の半分ほどもある水晶球を額から汗を吹き出しながら持って来た。そしてカウンターのの上に置く。カウンターが嫌な音を立てた。

「はあ、はあ、これで測定しましょう。これでもだめだったら今日のところはあきらめて下さいね」

僕は測定できますようにと祈るような気持ちで水晶に触れた。

「筋力八十、魔力一万二千、知力百十……魔力一万二千ですってえ！」

受付の人はカウンターに身を乗り出し僕を殺人的な目で睨んできた。

「あなた人間ですか！ 冗談は顔だけにして下さいよ！ ふざけ過ぎです！ 魔力一万二千なんてどこかの神さまですか。はっきりしなさい！」

そんなに睨まないでこっちもよくわからないんだから。

僕はスフィアに助けを求めようとしたがウインクで返された。助ける気なしですか。

「落ち着いて下さいよ！ 僕は人間ですから。神とかじゃありませんよ」

僕は受付の人を落ち着かせようと肩を抑えつけた。これがいけなかった

「さわらないで！ なんか悪いことするつもりですね！ ああ、お父さん、お母さん、先立つことをお許し下さい……」

受付の人は意識を失ってしまった。

僕らの冒険者としての初仕事は冒険組合職員の看病をすることになった。

第四話 魔力が最強ですと……！（後書き）

感想・評価お願いします！

第五話 クエストの準備は万全ですか？（前書き）

携帯が不調なのでミスがないか心配です。

第五話 クエストの準備は万全ですか？

第五話 クエストの準備は万全ですか？

僕は猛烈に謝られていた。

「すみません！ 気絶するなんて。本当に迷惑を掛けてしまいました」

赤い制服の少女が頭を何回も下げる。 そこまで迷惑を掛けられたつもりはないんだけどなあ。

「いいよ、別に時間はあつたし。それより登録はできるのかな？」

「もちろんです。手続きはカウンターでしますのでついて来て下さい」

少女はすぐに横になっているソファから降りて受付のカウンターへと向かった。僕らも後を追う。

「リーナちゃん大丈夫だったかい？」

少女、リーナがカウンターに戻ると待合席にいた冒険者たちからささず声を掛けられた。結構人気があるようだ。

「書類上のことは先程までにできてましたので冒険者証を発行しますね」

リーナは茶色い薄いカードのような冒険者証を取り出して、ペ
ンで僕らの名前らしき文字を記入した。

「発行完了です。はいどうぞ」

リーナから手渡された冒険者証は滑らかなプラスチックに近い
質感だった。魔法的な素材でできているのだろうか。

しばらく眺めているとリーナは頭を下げて僕らに改めて挨拶し
てきた。

「冒険者登録おめでとうございます。これから新しく冒険者となら
れた二人に冒険組合について説明いたします。時間の方は大丈夫で
すか？」

時間がかかるのだろうか。長い説明は嫌だな、覚える自信がな
い。

「大丈夫ですよ。マニュアルで言うように指示されてますけどそん
なに時間かかるような説明じゃないですから」

いつの間にかさきほどまでと同じ雰囲気に戻ったリーナが僕の
表情の変化に気づいたようでささやく。

「それではさっそく説明をします。まず冒険者の仕事は主に二種類
あります。魔物の討伐と荷物の配達です。これらの依頼の依頼料で
生計を立てるわけです」

リーナは男たちのいる方を指差した。男たちの奥の壁いっぱい
に紙が何枚も貼られている。あれが掲示板のようだ。

「依頼の受け方は、あそこの掲示板で依頼の書いてある用紙を見つけて、それを受付の私に提出すれば受けられます。依頼完了後の依頼料の支払いなどは組合を通じて後日おこなわれます。ここまでで分からなかったことはありますか？」

「大丈夫です。スフィアは？」

スフィアは少し頬を膨らませた。

「大丈夫に決まってるじゃないか。私の理解力をなめないでくれ」

僕がスフィアに謝るとリーナはつかれたような顔をして説明を再開した。

「仲良しですね、私もいつか……。説明再開しますよ。続いては冒険者のランクについてです。冒険者にはF～Sまでのランクがあります。このランクが上がるとより強い魔物の討伐依頼が受けられ、より危険な地域に配達できたりします。またランクが高いと個人指定の依頼が来たりもします。このランクを上げるためには依頼数を規定までこなすか、ランクの高い魔物を倒すことで上げることが出来ます。個人的には二人の場合魔物を倒してくるのが手っ取り早いと思いますね」

リーナは僕らの顔を見回した。分からなかったことはないか、ということらしい。僕は無言で頷く。スフィアも同じようにした。

「説明は以上です。お疲れ様でした」

説明が終わったので僕らはさっそく掲示板へと向かう。それをリーナが止めた。

「待つて下さい。二人ともその格好で依頼を受けるつもりですか？」

僕は自分の服を確認した。ジーパンにＴシャツだ。スフィアの方も昨日と変わらぬ白い民族衣装風の服。あ、やばい……。

「やっぱりそうだったんですね。ダメですよ、初心者は軽装で出かけて怪我することが多いんですから。組合から出て右へ行ったところにカール商店と言う店があります。そこなら装備一式に薬なんかも売ってます。ですからそこで必要な用意を揃えてからもう一度来て下さい！」

リーナの力説に従い僕らはカール商店に向かうことにした。組合の入口のところで博士が僕らに合流する。

「冒険者にはなれたか？」

「はい、なれましたよ」

「そうかならよかった。わしの方の調査も順調だしの。今からさっそく依頼に行くのか？」

博士は機嫌が良いようで口調が軽い。冒険者の方にさっきレィダーらしきものを向けているのを受付から見たがそれが調査だったようだ。

「いいや、今から装備を買いに行くのだ。初めての装備はお揃いでしょうな」

スフィアが僕の代わりに博士の質問に答えて、僕に手を絡める。

博士は変な顔をした。

「装備を買いに行く？ 鎧ならわしが持っておるし武器もあるぞ」

博士は無限巾着からブレスレットを取り出して右腕に装着した。
ブレスレットがカチツと音を立てる。

「変身！ とうう！」

博士は雄叫びを上げ、拳を天に突き上げる！ 博士の体をまばゆい光が覆う。眩しさに僕は目を閉じる。目を開くと博士は大変身を遂げていた。漆黒の輝く装甲は滑らかな流線型のフォルムを造りだし、動くときに嫌な金属音すら立てない。機能美の到達点のような姿だ。

「ふふ、これがわしのスーパーコンバットスーツだ！」

「かつこいい！ 是非とも譲ってくれ！」

スフィアが感動した目つきで博士に頼んだ。確にかつこいい。でも制作者は博士だ。なにかある。

「待った。博士そのスーツの性能ってどれくらいあるんですか？」

「音速以上のスピードと百階建てのビルをこなごなにすることを可能とする身体強化機能、さらに超新星爆発にも耐える防御能力があるぞ！」

なんだろうその性能。突っ込む気力すら削がれてしまう。

「博士、そんな性能じゃあ使えませんよ」

「むむ、足りないと言っか。まったく贅沢な奴だ。とりあえず改造するとするか」

博士は盛大に勘違いをすると改造するので待っておれ、と言って宿屋へ帰って行った。

最大の脅威を撃退することに成功した僕はカール商店に到着した。

第五話 クエストの準備は万全ですか？（後書き）

感想・評価お願いします！

第六話 街道を防衛せよ！（前書き）

まだ戦わない……。次回には戦います！

第六話 街道を防衛せよ！

第六話 街道を防衛せよ！

僕はスフィアに爆笑されていた。

「金も持たずに店に行くなんて白河は天然だな！」

金のことを忘れていたのだ。カール商店の店先でそのことに気づいた僕は、博士から金塊をわけてもらい今銀行へ向かっている。

「ここが銀行かな」

金貨のマークの描かれた看板の掛けられた角ばった大きな建物だ。ここが銀行と両替商の入った建物だろう。

僕はガラスのはめ込まれた扉を開けて中に入る。

「国営銀行です。なんのご用でしょう？」

愛想の良いスーツの行員が擦り寄って来た。

「両替はどこかな？」

行員は顔をしかめたがすぐに営業スマイルに戻る。

「両替はあちらです。両替後は是非とも我が国営銀行にどうぞ」

僕は行員に指示された窓口に向かった。窓口にはおばあさんが

座っていた。眼鏡を掛けていてかぎ鼻だ。

「すみません。これの両替をお願いします」

おばあさんは眼鏡をクイツと上げて天秤を出した。

「これなら六十万七千ルーツになるね。金貨十二枚と銀貨七枚だよ」

おばあさんは金貨と銀貨を袋に入れてくれた。六十万ルーツってどれくらいだろうか。宿屋が一泊二食付きで一万ルーツだからルーツは一円と同じくらいなのか？

「結構あるな。これなら良い装備が買えそうだな」

金に疎そうなスフィアはのんきに言った。そうかなあ、ファンタジーの武器とか防具って馬鹿みたいに高いイメージあるけどな。

僕は行員の熱心すぎる勧誘を振り切り、全額を持って行くことにした。

カール商店の店先。先程、ここで恥ずかしい思いをしたが、もうしない。

僕は両開きのドアを勢いよく開けた。

「こんにちは、お客さんかい？」

髭で色黒なおじさんが調子よく僕に話し掛ける。

「冒険者になったばかりなんですが、必要な物を買いに来ました」

包み隠さず正直に何も知らない初心者だと話した僕におじさんは大笑いした。

「おもしれえな。たいていの奴は見栄張るのに素直に初心者だつて言うとは……。気に入ったぜ。任せてくれ、初心者用の装備一式と薬みんなまとめて売ってやる」

おじさんは商品が雑多に陳列された店内をせわしく動き回った。やがてたくさんの商品を抱えて戻ってくる。

「ほれ、お前さんと連れの姉ちゃんの二人分の装備だ。ちょっと着てみてくんねえか？ サイズを確かめたいんだ」

僕はおじさんの差し出した革の鎧を着てみた。さすがにプロだけあってサイズはピッタリだった。

「スフィアはサイズ合ってる？」

スフィアは膨らみすぎた胸元を指差した。

「少しきついな。だがまあ許容範囲だな」

おじさんは革の鎧のサイズが大丈夫だったことを確認すると、薬箱を見せてきた。

「この中には薬草、毒消し、麻痺直しが五つずつ入ってる。冒険する上で一番基本的な薬類だな」

おじさんは薬をこっちに寄越すと、壁に掛けてあった赤銅色の

剣を持って来た。

「これがうちで一番安い剣だ。他のはまだお前たちには早いな」

僕は剣を持ってみた。銅製でかなり重い。これを振るのはかなりの重労働だろう。

ふと隣を見るとスフィアが剣を軽々振り回していた。精霊さんは体の構造がおかしいと思います！

「気に入ったようだな。代金は全部で五十万ルーツだ」

僕はふくろから金貨を十枚取り出した。

「ありがとよ！ これからも安くしとくからカール商店をよろしくな！」

おじさんの気持ちの良い挨拶に送られて店を出た。その足で冒険組合に向かう。

「いよいよ仕事だな。白河は心配しなくて良いぞ。私がしっかり守るからな」

男として女に守られるのはどうだろうと思ったが、スフィアの方が強いから仕方ないのか？

「いらっしやい。あ、遅かったわね」

リーナが僕らに気づいて顔を赤くした。遅かったから怒ったらしい。

「ごめん、お金を用意することを忘れてて」

「抜けてるわね。戻って来るのがあんまり遅かったから依頼は私が確保しといたよ」

「ありがとう。これがその依頼用紙？」

カウンターに置かれた用紙にスフィアが目を通す。

「かい、いの、……」

文字がよく読めないようだ。博士に頼んで翻訳機でも作ってもらおうかな。でもなあ、きつと作れることは作れるだろうけど……。

「私が読めますよ。アーク街道に角猪が出没中！ 撃退してくれれば一万ルーツ支払います、て書いてあるわ」

自慢げにリーナが胸を張る。スフィアが唇を噛んだ。

「受けますか？ 割りの良い依頼だと思いますが」

リーナは怒り心頭のスフィアを無視して僕に尋ねる。

「ほかには？」

「特にないですよ。時間が遅いですから」

なら特に断ることはないな。受けますか。

「わかった受けるよ」

「わかりました！ 依頼頑張ってくださいね」

こうして僕らは街道を守るべく角猪に戦いを挑むのだった。

第六話 街道を防衛せよ！（後書き）

感想・評価をお願いします！

第七話 猪を狩れ！（前書き）

初めての依頼です。

第七話 猪を狩れ！

第七話 猪を狩れ！

リンドンから王都ルミウスまで続くアーク街道を僕は地図を片手に歩いていった。

街道を荒らす角猪と言う魔物を倒すためだ。

「リーナさんに貰った地図だとこのあたりに良く出没する見たいです」

地図に書かれた×印の場所に到着したところで僕は足を止めた。辺りは一面の草原でリンドンの街が小さく見える。

「結構歩いたな。角猪が出るまで一休みしようか」

スフィアは座り込むと、リュックから水筒を出した。ちなみに水筒やリュックなどは金塊を博士にわけて貰ったときに、ついでに貸してもらったものだ。

「角猪が良く出没するのは夕方らしいですから、もうそろそろ出てくるはずですね」

太陽はすでにかなり傾いていた。夕方と言って良い時間だろう。

「あれかな？」

スフィアが草原の向こうから迫ってくる影に気づいた。僕はスフィアが指差す方を向く。茶色で角の生えた猪の姿がいくつか見え

た。あれが角猪だろう。実に名前どおりのわかりやすい姿だ。

「奴らは基本的に突進しかしない。だがその威力はすごいぞ！油断するな！」

スフィアは僕に注意をすると角猪の群れに切りかかっていった。スフィアは猪の突進を舞うようにかわし、体の横に素早く切り付ける。角猪は血しぶきを上げて倒れる。そうして角猪の数はみるみる減っていった。僕も負けてはいられない。

僕も角猪に戦いを挑んだ。速い突進が僕に向かってくる。僕はぎりぎりでかわすとスフィアと同じように切り付ける。角猪の体から血が噴き出した。角猪の体は慣性にしたがい勢い良く地面に突っ込む。一頭倒した。余韻に浸る暇もなく、別の角猪が向かって来た。僕はさきほどと同じように、いや、ほんの少し手際よく倒した。

スフィアは僕が二頭倒しているうちに他の角猪をすべて倒していた。素晴らしく強い。強すぎる。スフィアをこれからは怒らせないようにしよう。

その後僕は角猪の死骸に手を合わせた。僕なりのけじめだ。

「故郷の宗教なのか？」

角猪の角を剥ぎ取っていたスフィアが死骸に手を合わせている僕を奇妙な顔で見る。

「そんなところかな。一応お祈りしておきたかったから」

僕はこう言つと角を剥ぎ取る。角を組合に持って行って初めて依頼達成と見なされるのである。

剥ぎ取りを終えるころには辺りはすっかり日が沈んで暗くなっていた。遅くならないうちに街へ急いで帰った方が良さだろう。

僕は戦いで疲れた体にあと少しだけ頑張ってもらうことにした。

「地面が揺れている……」

帰り道でスフィアがつぶやいた。地面が揺れている？　僕は目を閉じて感覚を研ぎ澄ました。小刻みに震えるように地面が揺れている。揺れはだんだんと近づいてきていた。何か、巨大な何かが近づいている！　僕は悪いことが起きそうだと直感した。

「大角猪だ！　どうしてこんな街の近くに！」

スフィアは青ざめた顔をして喉が張り裂けそうなほど叫ぶ。僕には夜の闇で何も見えない。スフィアが呪文らしき言葉を紡ぐ。急に辺りが見えるようになった。辺りを見回すと、なんとトラックぐらいの大きな猪が巨体に似合わぬ速度でこちらに迫って来ていた！　まだかなり距離があるが追いつかれるのももうすぐだろう。

「白河、あいつには剣が効かない！　しかも知恵もある。さっきの奴らがただ大きくなっただけではないぞ！」

説明してくれた後でスフィアは、期待を込めたような目でこっちを見てくる。

なんでだろう

「さあ、白河。今まで出し惜しみしていた魔法を使う時だぞ！」

どうしてそうなるんだ！　僕は魔法なんて使えません！

「あのね、僕は魔法使えません！」

スフィアはなぜか爆笑した。

「またまた！。もったいぶって。使えるんだろっ？ 魔法で大角猪を格好良く倒してくれ」

「だ・か・ら使えません！ 本当の本当に使えません！」

スフィアは笑うのをやめて僕の顔を覗いてきた。

「う、嘘だよな。あんなに魔力あるんだから使え無いなんてありえないよな」

「僕は異世界から来たって知っているでしょうに。向こうじゃ魔法なんて無いんです！」

スフィアはまた余裕のある表情に戻った。

「魔法がないならどうやって生活するんだ。ありえないだろ。やっぱり嘘だったのか」

「あなたはどっかの貴族ですか！ とにかく僕は魔法を使えないんです！」

僕は何年ぶりかと思ったほどの大声を出した。

僕のあまりの剣幕にスフィアは僕の言っていることがようやく本当だと理解した。

「ま、まずいぞ。白河の魔法が無いと大角猪は倒せない！ 逃げろぞ！」

僕らは慌てて逃げ出した。大角猪はすぐ後ろまで迫って来ていた。

大角猪は大地が揺らぐような咆哮を上げて、僕らに突進して来た！

「大丈夫か！」

「なんとか！」

僕は突進をなんとか回避した。スフィアが僕の様子を確認してくる。

大角猪はしばらく進んだところでくると反転し、僕らの行く先を壁のように塞いでしまう。

「どうする？」

「どうするって言われても……」

どうすることも僕にはできない。僕らは大ピンチに陥ってしまった！

第七話 猪を狩れ！（後書き）

感想・評価お願いします！

第八話 何事にも加減が大切です！（前書き）

戦闘描写はうまくできているでしょうか。作者的にはなんとか頑張ったつもりです。

第八話 何事にも加減が大切です！

第八話 何事にも加減が大切です！

大角猪に僕らは追いつめられていた。大角猪の突進は今のところからうじてかわせている。だが、舗装すらろくにされていないこの世界の街道の上での連戦は僕らの足に確実にダメージを蓄積させていた。

大角猪の体力は底無しなのか突進のスピードはまったく衰えない。このままではいつか大角猪にぺしゃんこにされてしまう！

「どうすれば良いんだ！」

絶望的な状況に僕は思わず叫んだ。大角猪を挟んで向こうにいたスフィアが僕の叫びに答えてくれた。

「少々不安だが仕方がない、精霊魔法を使うぞ！」

スフィアが大角猪の咆哮にも負けない大声で叫ぶ。

「白河、私の後に続いて呪文を唱えるんだ！」

「わかった！ 呪文を唱えて！」

スフィアは走りながらとは思えないほど流れるように美しい旋律で呪文を唱えはじめた。

「我は精霊の契約者なり、契約に基づき神秘を行使せん」

戦いの最中で頭に酸素は行っていないはずだが、その呪文は頭に染み込むように入ってきた。

「我は精霊の契約者なり、契約に基づき神秘を行使せん」

スフィアは僕がスフィアに続いて唱えていることを確認すると更に続ける。

「何ものにも染まらぬ空なる力よ、我が敵を貫け！ エナジーアローー！」

僕も声を掠れさせながらもスフィアに続いて唱える。

「はあはあ、な、何ものにも染まらぬ空なる力よ、我が敵を貫け！ エナジーアローー！」

体の中が燃えるように熱くなった。熱した油を注がれたようだ！
死にそうなほど熱いよ！

「慌てるな、体が熱くなったんだな、その熱をこの魔物にぶつけるんだ！ 早く！」

スフィアは僕の方に大角猪が来ないようにいつのまにか囁になつてくれていた。スフィアのためにもなんとかしなければ！

僕は熱を体から出して大角猪にぶつけることをイメージする。体が更に熱くなる。全身の血が沸騰しているようだ。

「うぐあ、がああ」

「頑張れ！ あと少しだ！」

スファイアが精一杯僕を応援してくれる。僕は熱を体から出そうとイメージをより鮮明にしていく。体は際限なく熱くなっていく。構うものか！　ここでやらなければ大角猪に殺されてしまう！

僕が心を決めた時それは現れた。

白く輝く光の玉だ。それは小さかったがどこか圧倒的な存在感があった。

玉は大角猪に向かってゆっくりと飛んで行く。玉は大角猪に触れた。

視界を覆い尽くす光の奔流と猛烈に吹き荒れる爆風。突然発生したそれらが僕に襲い掛かってくる。なすすべもなく僕は空に舞い上がり、地面に叩き付けられ……はしなかった。地面の代わりに何か柔らかいものに叩き付けられたのだ。

「飛び込んで来るなんて、そんなに私のことが好きか？　なんなら今日あたりお相手してもいいんだぞ？」

いつもの軽い調子のスファイアの言葉に状況を理解した僕は慌てて移動する。スファイアが残念そうな顔をしたのは気にしない。

「しかし、すごいことになったな。エナジーアローは敵を貫通するだけで爆発なんてしないのに……」

さっきまで僕らのいた方を見て、スファイアは口を半開きにした。大角猪だったらしい肉の固まりや骨が散乱し、その中心には小さなクレーターまでできている。過剰威力にもほどがある！と、僕も思った。魔法を使ったのは僕なんだけどね……。

しばらくして僕らは大角猪の角を探し出し、街へ持つて行く。街へ着くと門の付近に冒険者らしき人が集まっていた。

「大丈夫でしたか？ さっきお二人が向かった方から爆発音がしたので、みんなで調査しに行くところだったんですよ！」

冒険者たちの中に混じっていたリーナが心配そうな顔をして話し掛けてきた。

自分の魔法のせいでこんなことになるとは……。みなさん心配かけて申し訳ない。

「さっきの爆発は自分の魔法のせいなんだ」

リーナやその周りの冒険者たちは顔を引き攣らせた。そして唐突に笑いはじめる。

「ははは、おめえ、冗談をいっちゃいけねえよ。本当は何があったんだい？」

おじさんが腹を抱えながら僕に聞いてくる。おじさんのまったく僕の発言を信じてなさそうな態度にスフィアが不機嫌に言い返した。

「白河の言ったことは全部本当だ。それ以上笑うな」

おじさんとスフィアは一触即発といった雰囲気になった。頼むからこんなところで厄介ごとを起こさないでくれ！

「たぶん本当ですよ。白河さん魔力一万二千もありますから……」

スフィアは呆れたような感心したような何ともとらえ難い態度を示す。周りにいた冒険者たちはインチキ商品でも見るかのような疑わしげな目をしてこっちを睨む。

「リーナちゃんは嘘つかねえしな。それが本当ならさっきの爆発が自分の魔法だ、ってのにも無理はねえな」

スフィアとすでに口喧嘩を始めていたおじさんも、胡散臭そうではあったが納得したようだ。スフィアが離れていくおじさんを見て、僕に胸を張った。あなたがおじさんを納得させた訳ではないですよ！

「でもどうしてあんな魔法を使ったの？ 角猪相手にあれはないですよ？」

冒険者たちが帰って行ったところでリーナが疑問を呈した。

「大角猪が出たんだ。あんなのが出るなんて聞いてないぞ！」

スフィアが怒ってリーナに詰め寄る。リーナは顔を青くした。

「大角猪！ Bランクの魔物じゃないですか！ どうしてそんなのが街の近くに……。ひょっとしてダータル帝国の言ってる魔王復活って言うのもまんざら嘘じゃないのかな？」

「今、魔王って言わなかった！？」

「え、確かに言いましたよ。冒険者や商人の間では有名ですから」

魔王までいるのか。お約束とは言えそんなやばい存在いらないよ！ 僕の顔色は青くと言うより白くなった。

「ああ、もしかして魔王のことが心配になりました？ 大丈夫で

すよ。ダータル帝国のことですからまた魔族たちに戦争吹っかけた
だけでしょ、それに勇者とか言うのも召喚されたようですよ。
だから心配しないで大丈夫です！」

まさか勇者までとは。ダータル帝国やるな。だけど召喚つてど
こからだろう？ 地球からかな。だとしたら帰れなくて困ってる
かもしれない。博士に頼んで勇者を連れて帰れるように頼もうか。
というか博士に勇者とか魔王とか話したら自分で魔王の城に特攻し
そうだな。あの人ならやりかねん。

「どうしたんだ？ 急に笑い始めたりなんかして。おかしいぞ」

スフィアが変な顔をしてこっちを見てくる。いかんいかん、博士
が魔王を巨大口ボで倒す場面を想像していたら笑ってしまっていた
らしい。

「怖がったり笑ったり変ですね。夜も更けて来ましたし、白河さん
もおかしいみたいですから、続きは明日にしましょう」

リーナの宣言で今日のところはお開きになった。なので僕らは
宿屋へと帰って行く。こうしてこの日の夜は更けて行った。

第八話 何事にも加減が大切です！（後書き）

感想・評価をお願いします！

第九話 勇者一行に加われ！（前書き）

とにかく急展開です。

第九話 勇者一行に加われ！

第九話 勇者一行に加われ！

「勇者も魔王もすでに知っているぞ」

翌日、博士に依頼中とそのあとのことを話すと想定外の返事が返ってきた。

「どうして知っているんですか？ 僕らも昨日知ったばかりなのに」

「宿屋にダータル帝国から来たとか言う商人がいてな、そいつから聞いたのだ」

博士にしては普通の方法で知ったようだ。人の頭の中を勝手に覗いたとかではなくて良かった。

「そのとき、ついでに面白いことも聞いたぞ」

博士は少しもつたいぶって間を開けた。スフィアが興味津々という顔をしてベッドから身を乗り出す。博士の言う面白いことなんてきつとろくでもないことだと僕は思っただけど……。

「実はな、三ヶ月後に開かれる武道会で優勝すれば、なんと勇者一行に加われるらしい！」

博士は僕らの顔を見据える。だいたい博士の言いたいことは想像できた。

「僕らが参加してどっちかが優勝しろって言いたいんですよ……」

「ああそつだ。良くわかつたな。さすがはわしの助手だ！」

やっぱりそうか！すまない、スフィア頼む！　君に任せた！
僕はスフィアを期待の眼差しで見つめた。

「うーん、たぶんなのだが精霊の私は武道会には参加できないぞ。
精霊族だからな。白河、一人で戦ってくれ！　私は観客席から応援するからな！」

た、頼みの綱のスフィアが！　どうするのさ！

真つ白になっていく僕のことを無視していた博士が、ふと腕時計を見てつぶやいた。

「そう言えばお前たち、組合に呼ばれてるのではなかったか？」

スフィアが慌ててすでに真つ白になっていた僕を引きずって組合に行こうとした。そこへ博士が何か投げてくる。それは小さな箱だった。開けると中にはコンタクトが入っている。

「それを付ければどんな文字も読めて書けるようになるはずだ。大事にするのだぞ」

博士、ありがとう！　僕は博士に初めて感謝の気持ちを抱いた。

僕は感動しながら組合へと向かった。

組合に着くとリーナはすでに待ちくたびれたのか怒っていた。

「遅いです！　せつかく良いお知らせがあるのですから、早く来てくださいよ」

「ごめん、時間のことを忘れてたよ。それで良いお知らせって何かな？」

リーナは一瞬呆れたような顔をしたが、すぐに笑顔になってお知らせの内容を話してくれた。

「驚かないでくださいね、お二人は今日付けでＣランクになることが決まりました！」

リーナは満面の笑みを浮かべているが、世間にうとい僕らにはいまいちピンとこない。僕とスフィアは微妙な愛想笑いをした。

「お二人とも反応がおかしいですよ！ＦからＣなんて私でも初めて見たぐらいの大出世なんですからもっと反応してください！」

リーナは頬を膨らませながら、奥から小さめの麻袋を一つ持ってきた。

「組合からなんと報奨金まででています！　三十万ルーツです！」

今度こそ僕は驚いた。三十万ルーツと言ったら一ヶ月くらい生活できる額じゃないか。ずいぶんたくさん払ってくれたものだ。

「白河さん、今度は良い反応でしたね。もしかしてお金に弱いんで

すかー？」

リーナはからかうように言ってきた。お金が好きなのは否定しないけど守銭奴ではないぞ！

「白河さん面白いです……。さて、用事は以上です。ついでに何か依頼を受けていきます？」

さきほどから黙っていたスフィアがここで急に口を開いた。

「なあ、こちらから頼みたいことがあるのだが良いか？」

リーナは変な顔をしながらもスフィアの質問に答える。

「別に良いですけど、どんなご用件ですか？」

「実は、魔法使いを一人探してくれないか？ 白河を弟子入りさせてくれる魔法使いを」

リーナはいよいよ疑わしげな顔になった。

「どうして白河さんが弟子入りする必要があるのですか？」

スフィアは突然泣きまねを始めた。かなり下手くそだ。でもリーナはわからないようで、慌て始める。

「どうしたんですか！ 私でよかったですらなんでも話してください！」

スフィアは芝居がかった口調で話し始めた。

「白河は深い事情があつて昨日初めて魔法を使つたのだ。そして初級の呪文が暴走してあんなことに……。私が教えてやれば良いのだが私にも事情があつてな……」

「わかりました！ 白河さんのために最高の魔法使いを探して見せます！」

リーナはすっかりスフィアにのせられてカウンターの奥に飛んで行つた。僕は勝手に話を進めたスフィアを自分のそばに寄せる。

「なんで僕が弟子入りするのさ。スフィアが魔法について教えてくれれば良いのに」

スフィアは申し訳なさそうに僕につぶやく。

「私は精霊族でも落ちこぼれで……。精霊魔法は結構使えるのだが普通の魔法はあまり得意でないんだ。それに人間の白河は人間の魔法使いに教えてもらった方が良いかもしれないからな」

スフィアの目は真剣そのものだった。僕はその目を見てあきらめた。

ちょうどその時リーナが戻ってきた。

「白河さん、すごいですよ！ Sランクの魔法使いがこの近くにいました！ 最近は活動してないようで、私も会ったことないですけど確かに住んです！ 会って見たらどうですか？」

リーナが興奮した様子で僕に話しかけてきた。僕はスフィアの方を見る。

「早速行ってみると良い。博士には私が行っておこう……。これでしばらくお別れだな。修行頑張るんだぞ」

スフィアは組合から出て行こうとしたが、こっちに戻ってきた。そして僕の口に……。

「しばらく会えないかもしれないからな。あと、私はいつでも白河のこと考えてるぞ。だから修行中に浮気なんてするなよ!」

スフィアはそう言い残して去って行った。顔を真っ赤にした僕は、スフィアにもう会えない訳でもないのに少し寂しかった。

第九話 勇者一行に加われ！（後書き）

感想・評価をお願いします！

第十話 最強魔法使いに弟子入り？（前書き）

新キャラが二人も登場します！

第十話 最強魔法使いに弟子入り？

第十話 最強魔法使いに弟子入り？

僕はリーナさんに教えてもらった魔法使い、チェリスさんの家へと向かっていた。

「この森の奥か……」

僕の目の前には鬱蒼と茂る森が広がっていた。いかにも魔法使いが好みそうな感じの不気味な森だ。チェリスさんって人を襲う魔女とかじゃないよね？僕は不安に感じながらも森の中に入ってしまった。

しばらく進んだところで後ろから足音がしてきた。僕は荷物を降ろして、剣を構える。足音はだんだんと近づいてきた。冷や汗が流れる。

「あなた誰？」

後ろから現れたのは小柄な少女だった。流れる銀色の髪に、雪のような白く透き通る肌、涼しげな青い瞳が魅力的な少女だ。彼女は黒いローブを着て大きなリュックを背負っている。

「僕は白河、この先に住んでいるチェリスさんのところに行こうとしているんだ。弟子入りしようと思ってね」

「私と同じ。一緒に行く？」

少女は良く澄んだ鈴のような声で聞いて来た。嬉しそうな声とは裏腹に、顔はあまり変化していない。表情の乏しい少女だな、と思った。だが、その表情の乏しさが少女の神秘性を増しているようにも思う。

「良いよ。一緒に行こうか」

僕が荷物を再び背負うと少女がくつついて来た。

「私の名前はナル。よろしく」

スフィア、これは浮気じゃないからな！
僕は心の中でスフィアに断りを入れると歩き始めた。

僕はナルと話をしながら森の奥へと進んでいた。

「そういえば、チェリスさんってどんな魔法使いなのかな。僕はSランクの魔法使いだってことぐらいしか知らないけど……。ナルは知ってる？」

ナルは僕の質問に微妙に間を空けた後、答えてくれた。

「弟子入りするのに……。私が少し教えてあげる」

ナルは若干呆れたように話し始めた。

「百年前、ブラックドラゴンがこの大陸で暴れていたの。そのブラツクドラゴンは特別な個体でね、英雄と呼ばれる人が何人も挑んだ

けど倒せなくて、ついに討伐不可能とまで言われていたの。そのころ冒険者として活躍していたチェリス様はブラックドラゴンに戦いを挑んだわ。そしてブラックドラゴンを最強魔法で一撃で倒してしまったの！ その後、古代魔法に傾倒したチェリス様はその研究をするために、今はこの森に家を建てて暮らしているそうなの。かれこれ五十年は森から出ていないらしいわ。その間にみんなに忘れられてしまったの。だから今では知る人ぞ知る伝説の人よ」

ドラゴンを一撃とは……！ あれ、でも百年前って言うことは死んでいるんじゃないか？

「百年前ドラゴンを倒したなら今は百歳超えてるよね？ 死んでいるんじゃないのかな？」

「チェリス様はブラックドラゴンを倒した時にその血を全身に浴びたらしいの。ドラゴンの血には老化を遅らせる効果があるわ。だから生きてるはずなの」

ナルはチェリスが生きてることに自信があるようだ。僕としても死んでいたら困るのだけど……。

少々不安になりながらも僕とナルは歩き続けた。

それから三十分ほど歩いたところで視界が開けた。森の中には立派な古い家が見える。ようやく目的地に着いたみたいだ！

家の前にいくと僕はドアをゆっくりと開いた。

「お客さん？ 何十年ぶりかしら」

奇っ怪なオブジェの飾られた玄関の奥から物音がしてきた。そして中から女の人が出て来た。肩まで届く黒髪と意志の強そうな漆黒の瞳の人だ。この人がチェリスさんなのだろうか？ 二十代ぐ

らいにしか見えないぞ。とても百歳超えてるようには見えない。僕が言葉を失っているとナルが僕に代わって質問した。

「あなたがチェリス様なの？」

ナルの問い掛けに女の人は胸を張って答える。胸が揺れたのが気になったのはスフィアには秘密だ。

「いかにも！ 私が世界最強の魔法使い、チェリスよ！」

この人、博士と同じ雰囲気だ！ やばい！

ナルはそんな僕の心の内に気づくことなく話を進める。

「やっぱりなの。私たちはチェリス様のご高名を聞いて、弟子入りを希望して来たの！」

チェリスさんは顎に手を当て、ぶつぶつつぶやきはじめる。

「今は弟子もいないし、この子たち魔力大きいし……。男の方はへんな加護も受けてるみたいね……。うーん……」

チェリスさんはしばらくすると僕らの目を真剣な眼差しで見つめてきた。

「あなたたち、過酷な修行に耐えられる？ 私の修行はきついわよ」

僕とナルはほぼ同じ答えを返した。

「頑張ります！」

「頑張るの！」

僕とナルの答えにチェリスさんは満足そうな顔をした。

「二人とも名前は？」

「白河です」

「ナルです」

チェリスさんは着ていたローブの中からメモ帳を取り出すと二人の名前をメモした。

「よし、今日から二人は私の弟子よ。明日から修行するから頑張るなさい！ あと、私のことはこれから師匠と呼ぶように！」

チェリスさん改め師匠の宣言によって僕とナルの長く厳しい修行が始まったのだった。

第十話 最強魔法使いに弟子入り？（後書き）

感想・評価をお願いします！

第十一話 魔法使いは……体育会系？（前書き）

修行編の始まりです！

第十一話 魔法使いは……体育会系？

第十一話 魔法使いは……体育会系？

僕とナルは翌朝、師匠に呼び出されていた。まだ日が登る前のことだ。なので凄まじい眠気が僕を襲っている。それはナルも同じようであくびを我慢しているのが見て取れた。師匠はそんな僕らの様子とは反対に元気そうだ。

「今から出かけるわよ。修行するのにピッタリの場所にね」

師匠は呪文を唱えて、家に魔法をかけた。家がすうつと見えなくなっていく。完全に見えなくなったところで師匠は僕らを手招きした。

「この円の中から出ないように」

師匠は杖で直径三メートルぐらいの円を書いて僕らを円の中に入れる。そしてさらに杖を使い円の外側に文字らしき物を書き加えていった。

全ての必要な文字を書き加えると師匠も円の中に入り、呪文を唱える。一分もすると文字が光を発し始めた。

「転送魔法！ 始めて見たの！」

ナルが興奮して叫ぶと文字が一段と激しく光る。眩しい！ そう思った瞬間、僕は空に放り出されたような浮遊感に襲われた。

気がつくともどりは森ではなかった。山頂に雪を頂く巨大な山々に向かつて、荒涼とした荒野が辺り一面広がっている。その赤ちゃけた荒野に白い筋が一本通っていた。その先の山の方から煙りが上がっているのが見える。

「エベレス……。世界で一番過酷な地域……」

ナルが意味ありげにつぶやいた。ここがどこか僕は知っているような雰囲気、ナルに尋ねる。

「ここがどこか知ってるの？」

「ええ、ここはエベレス、世界で一番高いマライア山脈のと真ん中よ。良質な鉱石が取れることで有名なの。だけど空気の薄さと魔物の強さから世界で一番過酷な地域と言われているわ」

世界で一番過酷って……すごいな。いきなり世界一とは……。ナルが話を終えると、何かわっかのような形の物体を手にした師匠が今後の説明をはじめめる。

「ナルの言ったように、ここは世界で一番過酷と言われるエベレスよ。今日から三ヶ月、ここで修行するわ。まずこの腕輪をつけなさい」

僕とナルは腕輪を受け取り、腕に装着した。

「ちゃんと着けたわね。それじゃ私に続いて呪文を唱えて。行くわよ！ ファイアボール、ウィンドカッター、アイスランス、ウォーターシールド！」

僕は嫌な予感がしたものの、師匠の後に続いて呪文を唱える。
ナルも眉を僅かに寄せたあと、唱えはじめる。

「ファイアーボール、ウィンドカッター、アイスランス、ウォータ
ーシールド！」

僕とナルが呪文を唱えた。師匠はそれを確認すると、さきほど
見た煙りの方を指差した。

「あの煙りのところに街があるの。そこまで走って行くわ。ただし、
呪文を唱えながらよ。もし途中で呪文を唱えるのをやめたり呪文を
囁んだりしたら……腕輪からすごい電流が流れるからね。それでは
スタート！」

僕とナルは呪文を唱えながら走り出した。走り出した途端に空
気の薄さが体に襲いかかる。しかも、呪文を唱えているので息を整
えることすらできない。シユールな見た目に比べて非常にハードな
訓練だ。尋常でない勢いで体力が奪われていく……。

十分もすると息が上がって、呪文を唱え続けるのがきつくなっ
てきた。息を整えたい、呪文を唱えるのをやめてもすぐに再開すれ
ば大丈夫かな……。そう思ったとき、僕の後方から聞こえていた呪
文を唱える声が瞬間的にはあるが途絶えた。

「はやあああ！」

ナルから小さな体のどこからそんな音量が出るのか疑問なほどの
悲鳴が上がった。こ、こええ！　　唱えなきゃ！

僕はナルのそのまま死にそうなほどの声に恐怖に駆られた。そ
の時、呪文を唱える口は止まらなかったが、足がその場で止まって

しまった。

「こら、止まるなー！走り続けなさい！」

僕よりずっと前方にいた師匠が立ち止まって叫ぶ。僕とナルは疲れた体をおしてヨタヨタと走り出す。

「遅いわね……。予定より遅れてるわ」

師匠は走るのが遅い僕らを見て何事か呪文を唱える。

地面が揺れ始めた。後ろを振り向くと地面がだんだん盛り上がっていく。やがてそれは人型になって歩き始めた。

ゴーレムですか！師匠、あなた僕らを殺す気ですか？

ゴーレムは見上げるような大きさなので歩くのはかなり速い。僕らは体の限界を超えて走る、走る、走る！

「頑張りなさい、あともう少しだから」

師匠は必死に走り続ける僕らの様子にとっても満足そうだった。

「はい、もう呪文唱えるのやめて良いわよ」

街の入口まで着いたところでようやく呪文を唱えることから解放された。荒い呼吸をこれでもかというほどする。

息を荒くして、肩を上下に激しく動かしている僕らを見て師匠がまた呪文を唱えた。

「ふう、はあ、も、もう無理です！」

「無理なの……」

僕とナルはそれぞれもう限界だと師匠に訴える。師匠はそんな僕らの様子にほんのり笑顔になった。

「これ以上なんにもしないわよ、それヒール！」

師匠の杖の先から暖かな光が僕らに降り注ぐ。すると体が温かくなって疲れがいつの間にか抜けていった。

「元気になったようね。なら早速私について来なさい。宿とか確保するわよ」

師匠は街の中に入って行った。なんだろう、初っ端から修行について行ける気がしないよ……。というかこんな標高の高いところでマラソンやってよく死ななかったものだ。異世界パワーなのか？
だとしてもこの先きつときついよなあ……。

僕は先行きに不安を感じながらも師匠の後を追いかけた。

第十一話 魔法使いは……体育会系？（後書き）

感想・評価をお願いします！

第十二話 修行はつらいよ（前書き）

修行編は後二話ぐらい続く予定です。

第十二話 修行はつらいよ

第十二話 修行はつらいよ

エベレスで修行を始めて三週間が経過した。僕は空気の薄さによくやく慣れてきて、魔法も初級のものが一通り使えるようになった。師匠によるとなかなか上達が早いそうだ。

「今日も修行をはじめろわよ。まずはランニング、スタート！」

師匠がいつものように宣言すると僕は走り始めた。師匠がエベレスの街はずれに借りた家を起点に、エベレスの街を一周するコースで走る。最初の内は走るので精一杯だったが、最近では街の人に挨拶する余裕も出てきた。

「おはようございます」

「おはようなの」

「おはようさん、今日もよく走るねえ。頑張れよ」

朝早くから働く職人のおじさんたちに見送られ、坂道だらけの街を僕は走りぬける。

三十分もすると十キロほどの道のりを僕は走り終えた。

「お帰り、だいぶ早くなったわね」

家の前で待っていた師匠は時計を見て嬉しそうに言った。

「師匠、今からまたいつもの集中力を養うための修行ですか？」

僕は師匠にこれからやることを聞く。もつとも返ってくる答えはいつも同じなのだが……。もしかしてを期待したくなるのが人間なんだろうか

「もちろんよ、板を持っていつものところに行くからついて来なさい」

師匠は立て付けの悪い扉をこじ開け、中から座布団ぐらいの板を出して来た。

「あれこわいのに……」

ナルは泣きそうだったが板を持って来る。

ナルが持つて来たのに、男の僕が持つて来ないわけにはいかない。なのでしぶしぶ僕も板を持つて来た。

「それじゃ、行くわよ」

そういつて師匠は街の中心にある工房に向かって歩き始めた。

エベレスは小さな街なので直ぐに工房についた。見上げるように高い煙突を持つ巨大な工房だ。工場と言った方が適切かもしれない。

「おはよう、また煙突借りるわよ」

師匠は工房の中で働いていたおじさんに話し掛ける。作業服のような服を着たおじさんは師匠に怪訝な顔をした。

「借りるのはかまわねえが、見ていてこっちがゾツとする。もう少し何とか何ねえのか？」

師匠はおじさんに至極あっさりと答えた。

「無理ね、優しくしたらこの子たち伸びないもの」

師匠は呆然としたおじさんを放置して煙突の方へと向かって行った。煙突の梯子を上り始めた。

僕らもその煙突の脇にある二つの煙突にそれぞれ上った。煙突のてっぺんは三角錐の形をした赤い屋根が付けられている。僕らは屋根に板を乗せ、その上に座った。

「今から集中力の修行をはじめめるわよ。返事は？」

眼下に広がる景色に身を小さくしながらも、僕らは師匠に返事をする。

「は、はい、師匠」

「はいなの」

師匠は僕らの返事に深く頷くと、杖を振った。光り輝く虫のような物が飛びはじめる。

「今から一時間、いつものようにこの板の上で過ごしてもらっわ。しかも今日から集中力を妨げる虫を使うからそのつもりでね」

長い一時間が始まった。街一番の煙突から広がる景色は白い山々と赤い大地の対比がとても美しい。だが、眼下には小さな人影が

見え、脳に恐怖を訴える。

風が吹いた。板が揺れる。三角錐の細い先端に乗せられた不安定な板が落ちてしまえば、僕らに待っているのは死のみだ。恐怖に血の気が引いていく。さらに風だけでなく、虫が集中を妨げ、板が小刻みに震え始めた。

「集中するの！」

ナルが静かに僕に注意をした。頭が恐怖でいっぱいだった僕は、ナルの注意で意識を再び集中させた。

長い時がまた流れ始めた。神経が研ぎ澄まされて、わずかな空気の流れや地上の人々の話し声すら感じる事ができる。

「一時間たったわ。今日の午前中の修行はおしまい。煙突を下りたらご飯を食べに行くわよ」

そういつて師匠は煙突から飛びおりた。師匠は魔法を使い地上付近で急に速度を落とし、ゆっくりと地上に降り立った。

僕とナルにはそんなことまだできないので梯子を使って地道に降りた。師匠は僕とナルと一緒に地上に下ろすことぐらいできるそうだが、やってはくれない。面倒くさいんだとか……。大丈夫かな、この人？

「こんにちは、いつものよろしく」

僕らは最近通っている食堂についた。鉾山の街らしく、労働者向けの安くてボリュームのある食事を出す大きな食堂だ。食事が出されると同時に僕とナルは勢い良く食事を胃の中に流し込んでいく。

「あんたたち良く食べるなあ……」

店の店長のおじさんが呆れたように僕とナルを見た。皿が二人の脇に山と積まれている。

「白河はわからないでもないけど……。ナル、あなた食べ過ぎじゃない？」

ナルは師匠をじつと睨んだ。目の鋭さが半端じゃない！ にわかに信じがたいほどだ。

「師匠は金を造れるんだからケチなこと言わないの！」

食べ物に対するナルの執着は凄まじかった。師匠もナルの迫力にビビる。

「お嬢ちゃん、よっぽど腹が減ってるんだな。何をやってるんだ？」

ナルは食べ物を口に含んだまましゃべる。

「はぐ、もぐ、大陸最強武道会に参加するために修行中なの」

おじさんの顔が凍りついた。周りにいた客も動きを止める。

「大陸最強武道会だああ！ 正気か？ 化け物しか参加しないあの大会に出場するだとおお！」

店長が店中に聞こえる大音響で叫んだ。そんなに驚くことなのか？

「正気よ。そのために修行させてるんだから」

師匠は冷静に言い放った。店長は顔を引き攣らせている。

「まじかよ……。あの大会は死人が毎年出る上に会場が吹っ飛んだり、無茶苦茶なんだぞ！」

会場が吹っ飛ぶってどれだけ激しいんだよ！ だいたいそんなに強い人たちがいるなら勇者いらないか？

「まあ疑いたければ疑ってれば良いけどね。さあ白河、ナル、いい加減食べ終わってたでしょう？ 早く出るわよ」

師匠と僕は食堂から出て家に向かって歩いた。師匠は家に着くと黒板の前に僕とナルを座らせて、魔法理論について講義を始める。

「昨日は魔力制御とその理論の途中までやったわね。今日はその続きからよ。では始めるわ。えーと……」

座学の時間はゆったりと、つつがなく流れて行く。元の世界の学校のような感じた。

そしてあつという間に日が傾いて夕方になった。

「今日はここまで。ご飯を食べて後はゆっくりしなさい」

今日の修行は終わったようだ。こんな日々が最近ずっと続いている。だが、僕らの修行の日々はまだまだ続いていくのだった。

第十二話 修行はつらいよ（後書き）

感想・評価をお願いします！

第十三話 半端じゃない！ 最強魔法！（前書き）

連日投稿できなかった……。すみません

第十三話 半端じゃない！ 最強魔法！

第十三話 半端じゃない！ 最強魔法！

修行開始から早一ヶ月半が経った。もはやランニングは習慣となった。今日もそのランニングを終えると家に人が訪ねてきていた。冒険組合の赤い制服を着た女性だ。

「この依頼を受けていただけませんか？ 今この街にいるSランクはあなただけなんです！」

女性はかなり切羽詰まった様子で師匠に依頼書を見せていた。何か緊急の高ランク依頼でもあったのだろうか？

「困ったわね、今、私は弟子がいてその修行中なのよ。だからその依頼は……あ、お帰り」

師匠は僕らが帰ってきたことに気がついた。すぐに僕らは師匠に走り寄る。

「何があつたんですか？」

「何があつたの？」

僕とナルは同時に師匠に聞いた。師匠は困ったような顔をして依頼書を僕らに見せてくれた。

依頼書にはスノードラゴン討伐、報酬百万ルーツと書いてあった。ドラゴン討伐！ すごい依頼だ。内容からするとかなり高ラ

ンクの依頼だろうか。

「これどれくらいのランクの依頼なんですか？」

師匠は少し呆れたような顔をした。ナルも両手を上に上げやれやれといった表情になる。

「スノードラゴンは雪山の主と言われる魔物。その討伐なら当然Sランクなの」

ナルが勝ち誇ったように言う。師匠も若干軽蔑したような目で僕を見て、ため息をついた。僕は異世界人だからわからないんです！なんて言えたら良いなと思った。

「あの、それで結局引き受けてはいただけるんですか？」

制服の女性が師匠に再度尋ねる。師匠は僕とナルに視線を向けた。

「白河、ナル、あなたたちランクは？」

冒険者のランクで良いのだろうか？ そう思ったときナルが

師匠に言った。

「私はDランクなの」

やっぱり冒険者のランクなのか。僕は少し自慢げに師匠に言う。

「僕はCランクです」

ナルが悔しそうにこっちを見た。僕は大きく胸を張った。ナルは顔をほんのり赤くして、さらに視線に力を込めてきた。

師匠は僕らの様子を見て額に手を当ててまた、ため息をつく。

「何を低レベルな争いしてるのよ……。まあ良いわ。この子たち連れて行って良いなら依頼を引き受けるわよ。どう？」

女性を考え込む仕種を見ると、師匠に返事をした。

「我々としてはそれでも構いませんが、チェリスさんは大丈夫なんですか？」

師匠は胸を叩き、余裕たっぷりな答えを。

「あなたちゃんと私のこと調べたの？ どうせ、この間組合に行った時に知ったぐらいでしょう？ こう見えても私はドラゴン討伐のエキスパートよ。任せなさい！」

師匠の自信に、女性は心配そうにしながらも帰って行った。

「急いで準備するわよ。目的地は雪山だから、それに応じた準備をしなさい」

こうして僕らは雪山へドラゴン討伐に向かうことになった。

吹雪の吹き荒れる雪山を僕らはゆっくりと歩いていた。

「ほう、かなりの大物ね」

先頭を歩いていた師匠が遠くを指差す。師匠の指差した場所はそこだけ雪がなく、かわりに白い巨体が横たわっていた。周囲の巨岩に比べても圧倒的に大きい体は辺りに積もった雪と同じ色をしていたが、独特の息が詰まるような存在感を放っていた。

「恐い……」

ナルは真つ青な顔をして声を震えさせた。僕は声すら出なかった。ドラゴンとはこんなにも恐ろしい存在なのか。

「これくらいで驚いてちゃだめよ。私の知ってる百年前の大陸最強武道会の出場者は人間だったけどこれくらいの威圧感出してたわよ」

師匠は僕らを下がらせるとドラゴンに向かって行った……。

師匠に気づいたドラゴンは山を揺るがすような咆哮を上げた。

師匠は咆哮を上げたドラゴンに真つ向から突っ込んだ。ドラゴンは師匠を倒すべく鋭い爪を振るう。轟音とともに迫る爪を師匠は空中に跳んでかわし、そのままドラゴンの前足を足場にして空高く舞い上がる。師匠の周りに幾つもの炎の球が発生し、ドラゴンに向けて殺到する。

顔のすぐ目の前からの攻撃にドラゴンはたまらず前足をめちゃくちやに振り回した。当たりの岩などが軒並み吹っ飛ぶ。

「ウインドカッター！」

僕はナルの頭上に飛んできた岩を魔法で細かく切り刻む。するとナルはこっちを見つめてきた。

「ありがとう……」

「お互い様だよ。それよりもあれ、やばいんじゃない……」

僕はドラゴンを指差した。牙と牙の隙間から青く輝く光が漏れている。膨大な魔力がそこに集まっているのは未熟な僕にすら良くわかる。

「ブレス攻撃！」

ナルが叫ぶと、ドラゴンの口から光の球が飛び出した。球は口から出ると一瞬で巨大化して師匠を飲み込むかのように襲い掛かる。まずい！　そう思う瞬間、師匠は球の表面を滑るように動いた。うまくシールドを張って受け流したようだ。

「うわああ！」

ドラゴンのブレスが山にぶつかり山が地震のように揺れた。ナルが僕のコートにしがみついて来る。しかし師匠とドラゴンは地面の揺れなどお構いなしに戦い続ける。

「これで終わりよ」

師匠はブレスの後で口を全開まで開けていたドラゴンに、杖の先から雷をぶつけた。

稲妻が大気を貫きドラゴンの無防備な口の中に命中する。

ドラゴンは空気を爆発させるような叫びを上げた。だがさすがは雪山の主と呼ばれるだけある。なんとドラゴンは改めて口に魔力をため、雷を押し返したのだ。

「なかなか。あれを使いますか」

師匠はドラゴンの底力に軽く驚くと呪文の詠唱を始めた。師匠はほとんどの攻撃魔法を無詠唱で使える。詠唱すると言うことは大魔法を使う合図だ。

「あれはまさか……」

ナルはそういつて地面に伏せた。僕もナルに続いて何が起こるのかわからなかったが伏せた。

「S A G D A N J A D……」

詠唱を続ける師匠の足元が光り、魔法陣が幾つも発生した。それらは師匠の前で重なり合い、金色の神秘の輝きを放つ。周囲からそれらに向かつて魔力が流れ込み始めた。師匠は杖を地面に突き立て、呪文の最後の一文を唱える。

「A D G P G……スペクトル・アタツカアー！」

水の塊のような無色透明な魔力の塊が勢いよく放たれた。それは魔法陣をくぐり抜ける度に色加わり、やがて七色に輝く光の球となる。その七色の光の球は美しい光の軌道を空に描くと、ドラゴンに吸い込まれるかのようにぶつかった。

辺りに途方もない量の光の嵐が襲い掛かった……。

第十三話 半端じゃない！

最強魔法！（後書き）

感想・評価をお願いします！

第十四話 大陸最強武道会迫る！（前書き）

修行編最後です！

第十四話 大陸最強武道会迫る！

第十四話 大陸最強武道会迫る！

「うう、痛たた」

僕は腰をさすりながら起き上がると信じがたい光景が目飛び込んできた。

雲が吹き飛ばされ、太陽が辺りを明るく輝いている。その太陽は師匠の呪文の想像を絶する威力の爪跡を明るく照らしていた。

辺りに積もっていた雪は吹き飛ばされ、巨大なクレーターが出来ていた。ドラゴンも跡形もなく消滅している。さらにドラゴンを吹き飛ばしたただけでは呪文の勢いは止まらなかったらしい。なんと山脈の山々を一直線に貫く丸いトンネルが出来ていた。

「さすが最強魔法スペクトルアタッカー。信じられない威力なの」

十メートルほど後ろまで吹き飛ばされていたナルが啞然とした表情でつぶやく。

「大丈夫かー？」

僕はナルに向かって呼びかけた。ナルは元気そうに手を振ったが腰をさすっていた。

「少し腰を痛めたみたいなの」

僕はナルの元に駆け寄り、肩を貸した。ナルは僕の体に寄り掛かる。う、柔らかい、ナルって意外と……。頭をピンク色の思想が

駆け巡った。

「変なこと考えてる。白河なら構わないけど……」

鋭いナルは僕の鼻の下が伸びたことに気がついたようだ。いかんいかん、気を引き締めなくては。

そうしている間に師匠がいる場所に到着した。

師匠の立っている場所はクレーターに突き出た半島のようになっていた。

「これが最強魔法の威力よ。魔法はこんな大破壊をもたらすこともあるの。今回スペクトルアタッカーを使ったのは魔法の恐さを知ってもらいたかったからよ」

師匠は真剣な鋭い顔をしてクレーターを指差した。

「師匠、それは良いのですがこれだとスノードラゴンの討伐をしたこと証明できませんよ？」

場の雰囲気壊すようで悪かったのだが気になったので僕は師匠に聞いた。師匠は口をあぐりと開けた。

「しまった、考えてなかった！」

意外と抜けてるなあ。ナルも思わずクスリと吹き出した。すると師匠の顔がどんどん赤くなっていく……！

「笑ったわね……。ふふ、それなら覚悟できてるわよね？ 二つからエベレスの街まで全力ダッシュで帰りなさい！」

師匠は杖の先に炎の球を作った。本気だ、目が冷たい！
僕とナルは師匠に追い立てられるように山を下っていった。

あれから数週間が過ぎた。結果的にスノードラゴンの討伐はス
ペクトルアタッカーでできたクレーターを見せて証明した。その時
組合の人の顔が引き攣っていたのは気にしてはいけなかったと思う。

「何を考えてるの？ 私のことなの？」

考えごとをしていた僕にナルが頬を赤くして聞いてきた。なんだ
か最近、ナルとの間に妙な関係が芽生えつつあるような気がする。
でもスフィアがいるしなあ、ナルは魅力的だけど……。

「何をイチャついてるの……。武道会まで後一週間を切ったのよ？
もっとも、私としてはそういうの好きだけど」

師匠が黒板の前から生暖かい目でこっちを見てきた。僕とナル
は慌てて黒板に視線を戻した。

それから一時間後、座学の時間が終わると師匠は僕らに話を始
めた。

「今日でエベレスでの修行を終えて、明日ダール帝国に行くわ。
それから向こうで最終調整をしたら、いよいよ大陸最強武道会よ！
大陸最強武道会は各地から武術や魔法の達人、いや超人が集まる
大会。でも、今のあなたたちは私の家にきた時とは比べものになら
ないほど強くなったわ。それは保証しておく。だから頑張って優勝
を目指しなさい！」

いよいよか……。もともと博士に強制されて出場を決めた訳だが、もはやそんなことはどうでもいい。勝ちたい、そんな純粋な思いで頭がいっぱいだっただ。

僕がひそかな決意を固めていると、ナルがこっちを見つめてきた。目には炎が燃えている。そうか、ナルも武道会で敵になるのか。何だか感慨深い……。僕はナルに手を伸ばした。ナルは僕の手を掴み、僕らは互いの健闘を祈ってがっしりと握手をした。

「明日は早いわよ。だから今日は早めに寝なさい」

師匠がそういうと僕らはそれぞれの部屋に戻っていった。

「行くわよ」

翌朝、僕ら三人は転移魔法でダータル帝国の首都ハミヴァイへと旅だった。

「白河？ 白河なのか？ 二ヶ月半ぶりだな！」

ハミヴァイに着くと早速目の前にスフィアがいた。タイミング良すぎだ。到着する場所とか時間をあらかじめ予想してたのか？ 精霊さん特有の力とかで。

「あなたは誰？ 白河にずいぶんなれしいの！」

ナルは絶対零度の視線でスフィアを睨む。スフィアも負けずに言い返した。

「私は白河の嫁になる予定の女だ。お前こそなんだ」

「私は白河と一緒に修行した仲間で今の恋人なの。今、白河はあなたより私の方が好きははず」

ナルがそういった途端スフィアの表情が凍る。そして口をしばらくパクパクさせた。

「な、何！ 本当なのか白河？」

スフィアがようやく声を搾り出すと、僕に凄まじい目をして視線を向けてきた。ナルも僕の方を見てくる。た、助けて師匠！
僕が師匠の方を見ると師匠はすでに集まっていた野次馬と同化していた。

「頑張つてね。私は人の修羅場眺めるの趣味だから」

そんな見捨てないでくださいー！
僕は途方にくれた。その間にも二人の争いは激化していく。

「もういい。良く考えたら白河が好きなのは私に決まっているじゃないか。白河は胸の大きい女が好きだからな、お前は守備範囲外だろう」

「そんなことない。私もあなたと同じくらいあるもの」

二人の争いはいつのまにか互いの胸の大きさくらべになっていた。どうしてそうなった。頼むから路上で変なことしないでくれ！

僕は二人の間に割って入り止めようとした。だが、外野、特におじさん連中が二人を煽るのでなかなかやめない。その時通りの向

こつから聞き覚えのある声がした。

「おお、白河。久しぶりだな。どれ、再会記念に景気よく波動銃でも撃ってやろうかの」

もじやもじやの白髪頭に、真っ白なシミ一つない白衣。そして何よりその突拍子もない発言。間違いない、博士だ！

なんとという最悪のタイミングで……。こうしてハミヴァイでの生活は波乱と共に始まった……。

第十四話 大陸最強武道会迫る！（後書き）

感想・評価をお願いします！

第十五話 大陸最強武道会ついに開幕！（前書き）

ついに武道会編に突入です！ 長かった……。

第十五話 大陸最強武道会ついに開幕！

第十五話 大陸最強武道会ついに開幕！

僕らは波乱の再会を終え、ついに武道会の当日を迎えた。

「すごい人出ですね。一万人以上いませんか？」

会場となる競技場は様々な装備に身を包んだ冒険者たちや見物客で賑わっていた。楕円型をした野球場ほどもありそんな競技場の周りが、人で埋めつくされている。

「昔とかわからないわね。私たちも早く受付すませるわよ」

師匠はそういうと僕らの手を引っ張り、冒険者でこった返す受付へと向かった。

受付に着くと受付のおじさんが妙な顔をして僕ら三人を見た。

「三人で出場ですか？」

受付の人は痛い人でも見るような目をする。僕は辺り見回した。ゴツイおじさん連中に怪しい雰囲気たつぷりの魔法使いたちばかりが見える。なるほど……。あまりにも僕たちが弱そうだから疑っているのか。か、悲しくなんかないぞ！

「二人で参加よ。ほら、名前を書き込んで」

僕とナルは受付の人の微妙な視線を無視して出場選手名簿に書き込んだ。

「おっと、すまない」

肩に何かがぶつかった。僕が後ろを振り向くと着物を着た女の人立っていた。長いつややかな黒髪に紅い着物が映えている。その後ろには黒い胴着を着た男たちが控えていた。

「師範、行つてらっしゃいませ！」

男たちは一斉に頭を下げた。女は何かの師範で男たちは門下生のようだ。

「あなたも出場選手なの？」

ナルが女に聞いた。女はナルに気持ちよく答える。

「ああ、私は桜坂　咲。東方で飛天蒼空流という流派の師範をしている。君たちも出場選手なのか？」

ナルは咲に元気良く答える。

「そうなの！　私はナル、こっちは白河よ。よろしく」

咲は師匠の方を見てつぶやいた。

「あなたは出場しないのか？　かなりの腕前に見えるが……」

師匠は咲の質問に笑いながら答えた。

「ははは、私はこの子たちの師匠よ。付き添いでいるだけよ。だか

ら出場は……うぬ？」

不意に師匠はある一人の冒険者を鋭い目つきで睨みつけた。さらに顔を険しくして唸る。僕にはその冒険者はどこにでもいそうな冴えない騎士風の男に見えるのだけど……

「まさか……。気が変わった。出場するわ」

師匠は出場選手名簿に名前をさらさらと書き加える。そんな、師匠には勝てませんよ！

「師匠、どうして？」

ナルが師匠の顔を上目遣いに見る。師匠は目を逸らすと鞆から漆黒のローブと長めの金属の杖を取り出した。

「まあ、気にしないで。それよりも二人にプレゼントがあるわよ！」

師匠は話をうまく逸らすとローブと杖を差し出した。滑らかな質感のローブが肌に心地好い。

「それはドラゴンの皮！ しかも杖はオリハルコニウムでできてるじゃないか！」

咲が僕らの貰ったプレゼントを見て叫ぶ。そんなにすごい物なのか？

「師匠、ありがとうなの！」

ナルも感動した顔をして、師匠を尊敬の眼差しで見つめる。

「ありがとうございます！」

僕も良くわからなかったがすごいことのようなので深々と頭を下げた。

「私にとって見れば、大したことじゃないんだけどね」

師匠はかなり自慢そうに高笑いをする。

「すごい人なんだ……。これは油断できそうにないな。それじゃ、お互い頑張って試合で会おう！」

咲は一言いうと競技場の中に入って行った。僕らもすぐに続いて中に入っていく。

競技場の中心にある舞台の上で背の高いスーツのような服を着た司会者が杖をマイクのような物を手にして大音響で叫んでいる。

「さあー、いよいよこの時がやって参りましたあー！ 大陸最強武道会開幕です！ 今年は五十二人も選手が出場いたしました。みな大陸各地から集まった猛者中の猛者！ まさにこの大陸最強の座と勇者一行に加わる権利を賭けて戦うのにふさわしい大会となりました。それでは出場選手入場です！」

観客たちから大歓声が沸き上がった。競技場が熱気に包まれる。

「白河負けるなあー、優勝しろあー！」

控え室から出て行くと大きな旗を振り回して叫ぶスフィアの姿が見えた。は、恥ずかしい。

「以上五十二人が今回出場する選手であります。それではさーそく記念すべき第一回戦第一試合を始めたいと思います。第一試合はロベルト選手対クレナリオン選手です！」

僕は控え室に戻っていった。僕は第四試合から出場する。まだしばらく時間があつた。その間ナルと出場選手の観察をする。

「誰か有名な人とかいる？」

ナルはしばらく考え込むと一人の男を見た。鈍い銀色の鎧を着た、線の細い男だ。確かに近寄り難いような雰囲気のある男である。

「全員有名だけど強いて言えば彼。彼は確かダータル帝国の騎士団長で優勝候補筆頭と言われているの。何でも音より速い男って呼ばれているんだとか」

音より速いか……。本当だとしたら師匠なみの化け物だな。僕がしばらく思索していると師匠が僕を呼びに来た。

「白河、出番よ！ 頑張つて来なさい」

「はい、行つてきます！」

僕は師匠に気合いを入れて返事をした。

「私と師匠は舞台の脇から応援してるの。頑張つて！」

ナルは僕の目を見て言った。僕は深く頷く。そして舞台に向かってゆつくりと歩き始めた……。

第十五話 大陸最強武道会ついに開幕！（後書き）

感想・評価をお願いします！

第十六話 恐怖！

武道会の怪物（前書き）

主人公の初戦です。

第十六話 恐怖！ 武道会の怪物

第十六話 恐怖！ 武道会の怪物

僕の試合がやって来た。緊張した足取りで舞台上がる。

「頑張つてなの！」

ナルが舞台のしたから応援してくれた。ナルの隣にいる師匠は舞台を見て考え込んでいた。師匠の視線の先には敷かれていた石が剥がれている場所があった。

「舞台の石はジルカニアだからそう簡単には壊れないんだけど……。しまったわね、試合見てれば良かった……」

師匠のつぶやきが聞こえるが気にしている余裕はない。僕は舞台の向かいにいる対戦相手を見た。対戦相手は二メートルはありそうな筋骨隆々の男だった。その男は余裕こいて観客席に手を振っている。観客席から歓声が上がった。僕が勝利するとは身内以外だれも思っていないらしい。

「さて、続きましては第四試合、白河選手対ウルグ選手です！ ウルグ選手は実力派傭兵団アサルトの団長で成績が期待されております。果してどんな戦いを見せてくれるのでしょうか？ それでは試合開始！」

司会者の合図と共に試合開始の鐘が鳴らされた。ウルグは手に持った巨大な剣を構えると僕に挑発してきた。

「坊主、お前見たところ魔法使いのようだが魔法使いは武道会には向いてないぜ。痛い思いする前に棄権したらどうだ？」

観客席からどつと笑いが起きた。鎧を着込んだ男たちが大爆笑していた。いらいらするな……。ダメだ、落ち着かないと！

「そんな奴一撃で倒しなさい！ 負けたら処刑よ！」

魔法使いを馬鹿にされたことが師匠には許し難いようだ。杖を手に暴れている。それをナルが両手で抑えていた。

「愉快的仲間だな坊主。笑いが止まらねえぞ。とまあ遊びは終わりにして……行くぞ！」

ウルグは剣で切り掛かってきた。舞台の端から端までの距離を一瞬で詰めてくる。でも動きが直線的でさらに大振りだ。僕は袈裟切りに放たれた剣をひらりと軽く回避する。ウルグは切る対象が突然いなくなっただのでその場でよろけた。

「何やってるんだウルグー。俺はお前に賭けてるんだ。頼むから勝ってくれよー」

「そうだ、そんなやつさつさと倒しちまえよ」

観客席から大ブーイングがウルグに起きた。ただその中でスフィアだけは歓声を上げていたが。

「い、一撃で終わらせたなら面白くないからな。サービスだよ、サービス。感謝しろよ坊主。」

ウルグは顔から蒸気が出そうなほど赤くなるとさっきよりも勢い良く切り掛かってきた。しかしさっきよりも速くなっているが直線的で大振りな動きは変わっていない。僕はまた剣をなんなくかわす。ウルグはますます赤くなって次々に斬撃を放ってくる。僕もまたその斬撃を次々に回避していった。

「あの人弱い」

ナルがボソツとつぶやいた。その一言でついにウルグがおかしくなった。

「許さん、この俺様をこけにしてくれおって……。許さんぞあ！」

ウルグは猛烈な勢いで剣を振り回しながら突っ込んで来る。なんかこの人かわいそうになってきたな……。そう思った僕はウルグの突撃を回避すると背中に回り込み杖で思い切りついた。ウルグはあっけなく倒れた。あれ、ずいぶん弱いな。この大会の参加者って意外と大したことないのかな？

「こ、これは衝撃の展開です！　なんとウルグ選手がいとも簡単に倒されてしまいましたあー！　今回の大会はひと味違います！　それでは白河選手に拍手をお送りください」

司会者の言葉に会場がどよめいた。賭けに負けたのか頭を抱える男に、逆に儲けて大喜びしている女など会場に混沌とした空気が満ちる。

「白河、頑張ったわね。さすがよ」

師匠は顔をほころばせて微笑んだ。ナルも優しく笑いかけてく

る。

「大したことないですよ。あの人あんまり強くはなかったですから」
気恥ずかしくなった僕は照れながら師匠とナルに言う。

「それもそうね。まあ、準々決勝ぐらいになればあんなたちより強い奴も出てくるけどね」

師匠はそういうと控え室の方へ帰っていった。ナルもそれに続いて行く。僕もすぐに会場を後にした。

その後の試合も順調に勝ち進んだ僕とナルは大きな控え室で他の選手たちとともに休憩していた。師匠は試合を見ると言うて舞台の方に行っていていない。

「白河頑張ってるな！ このまま行けば優勝できそうだぞ」

スフィアが控え室に入ってきた。周りにいた選手がスフィアを見つめる。

「すごい美人だな。君の知り合いなのか？」

近くにいた咲がスフィアに話しかけられた僕を見て話しかけて来た。ちなみに彼女も勝ち残っている。

「そうですよ。大切な友達です」

スフィアが石になった。それを見てナルがニンマリと唇を釣り上げる。

「友達止まりの女なのね」

スフィアからプチッと音がしたような気がした。見てみると全身からオーラを放っている……。

「ナル、今のは？」

怖いよ！ スフィアとナルの間に火花が見えた。

「なんだか知らないが止めた方がいいのか？」

咲が止めに入ってくれようとした所で突然師匠が控え室に飛び込んできた。

「試合がすごいことになってるわよ！」

師匠は僕とナルを強引に引っ張ると舞台の前まで連れてきた。

「何ですかあれ……」

僕は舞台の上の光景に思わず息をのんだ。舞台にはなんとも異様な姿となった選手が立っていたのだ……。

第十六話 恐怖！ 武道会の怪物（後書き）

感想・評価をお願いします！

第十七話 ベスト8！ 戦いはこれから（前書き）

次回から本格的な戦いが始まります。

第十七話 ベスト8！ 戦いはこれから

第十七話 ベスト8！ 戦いはこれから

舞台に立っている選手は大きな怪我を負っていた。小柄な体を巨大な切り傷が縦にはしっている。そこまではまだ普通だ。武道会なら怪我をしていても何の不思議もない。だが傷口が尋常ではなかった。人間が怪我をすると血が出てひどいと骨が見えたりする。しかしその選手の傷口からはコードらしき物体が飛び出し、金属の骨格が覗いていた。

「人じゃない……。ゴーレム？」

ナルが師匠の目を見て言う。師匠は肩をすくめて言った。

「あれだけ人間に近い形のゴーレムを作るのは私でもむずかしいわ。それにもし作れたとしても武道会に出場させるなんてとてもとても……」

師匠でも無理なのか……。僕は改めてその選手を見た。どこにでもいそうな気弱そうな小柄の男にしか見えない。恐ろしいほど良くできている。考えたくないがこんな物を造れるのはあの人しか……。…。

「えー、大陸最強武道会の規定には精霊族や魔族の参加禁止は記されていますが、それ以外の参加については記されておりません。ですのでクレナリオン選手の参加を引き続き認めます。試合を再開して下さい！」

司会者の発言に会場が揺れる。あろうことかクレナリオンとか言う選手はこれからも出場を認められるらしいようだ。

「良かったじゃないか、出場停止にならなくて。でも君はこの試合で退場だよ！ この僕が君を倒すからさ！」

もう一人の対戦選手らしい気障な優男がレイピアでクレナリオンの攻撃を仕掛ける。かなり速い！ 言うだけのことはある。口先だけではないようだ。さらに優男は無駄のない流れるような動きで次々と斬撃を放っていく。

「どうだい？ さっき君を切った時より速いだろう？ これ以上怪我したくないなら降参したまえ」

優男はレイピアで絶え間無く攻撃しながらクレナリオンに降参を迫る。クレナリオンはニヤリと不適な笑みを浮かべた。

「オロカナ……」

クレナリオンは電話越しのような無機質な声で言うと優男のレイピアを掴んだ。優男は顔を赤くして力を込めて引き抜こうとするが引き抜けない。やがてクレナリオンは優男の手からレイピアを強引に取り上げるとその場で直角に曲げてしまった。

「馬鹿な……ミスリルのレイピアを曲げるなんて……」

言葉を失っている優男に、クレナリオンは嫌みったらしい笑みを浮かべて話し始める。

「才前ヲ倒スコトナド簡単ダ。タダ修復機能ノ確認ガシタクテ切ラ

レタダケダ」

そういつとクレナリオンは手に持ったレイピアの残骸を放り投げ、優男に近づいた。

ドンという鈍い音がすると優男が宙を舞う。優男は観客席に叩きつけられた。

「これは……なんとも驚きの試合でしたあー！ 果して今後クレナリオン選手を止められる選手は現れるのでしょうか！」

しばらく会場が沈黙したあと司会者が魔法具片手に思い切り叫ぶ。試合が一応終わったので僕らは重い足取りで控え室に戻った。

「わしは知らん、本当にそんなクレナリオンなんて物は知らんぞ！」

僕はスフィアに博士を呼んで来て貰っていた。無論、尋問するためである。この人がクレナリオンの製作者としか考えられない。

「そんなはずありません！ あんな物を造れるのは博士だけですから」

僕は冷静に嘘をついているであろう博士をさらに問い詰める。

「だから知らんものは知らん！ だいたいわしは巨大ロボット派だ。人間サイズのロボットなんて造らんわ！」

博士は無限巾着の中からロボットのフィギュアを取り出して熱く語り始めた。案外嘘をついてないのか？ だがそうすると一体

誰があんな物を……。

「あれはその老人の造ったロボットとかいう奴じゃなくておそらく古代兵器よ。ああいう兵器を文献で見たことあるから」

師匠が否定し続ける博士を見て言う。古代兵器か。意外にそうかも知れないな。博士が造ったならもつと破滅的な性能だろうし。

「いずれにせよ、私が明日の準決勝で戦えば奴の正体がわかるな」

近くで話を聞いていた咲がトーナメント表を見て言う。うぬ……
…なんかおかしいぞ。

「ちよつと待て。それまでに白河との試合があるじゃないか。準決勝に進出するのは白河に決まっているぞ！」

僕の隣にいたスフィアが咲に噛み付いた。その通りとは言わないが、咲が勝つと決まった訳ではないはずだ。

「私は東方随一の剣士だ。白河に負けるつもりはない」

咲はさも当然という風に言つてのけた。何かが僕の中で切れた。

「そこまで言うなら僕には絶対負けませんよね？」

「もちろん。そうだな、もし負けたら白河に一生仕えてやろうじゃないか」

売り言葉に買い言葉。咲はすごいことを言い出した。よし、絶対勝つて謝らせてやる。

「白河、面白い約束をするのもいいけどそろそろ試合よ。次の試合に勝たないと咲と戦うことすらできないんだから」

師匠がニヤニヤ笑いながら僕に試合の時間を知らせてくれた。僕は改めて気合いを入れ直して舞台に向かう。

武道会二日目になった。今日は準々決勝から行われる。もちろん僕もちゃんと残っていた。

「それでは大陸最強武道会二日目を始めたいと思います。まずは今日まで勝ち残った選手たち八名の入場です。拍手！」

司会者の合図とともに僕らは舞台の上に入った。僕は改めて周りの選手たちの顔を見る。ナル、師匠、咲にクレナリオン、色気たつぷりの女戦士にダタールの騎士団長で音より速いと言う男。あれ一人足りなくないか？

「以上七名って……おやおや一人遅れてますね、お、きたきた。以上八名で戦います」

遅れてきた男は昨日最初に師匠が睨みつけていた男だった。師匠は再び鋭い目をして睨みつける。男は笑みを師匠に返した。なんだろう、得体の知れない男だ。

「皆様、お待たせいたしました。それでは準々決勝第一試合を始めたいと思います。白河選手と咲選手以外は控え室にお戻り下さい」

司会者が言つと僕と咲以外は控え室へと戻つてゆく。師匠とナルだけは舞台の脇から試合を見てくれるようだが。

「頑張つてなの。負けたらダメ」

舞台の下からナルが真剣な目をして言つてきた。僕は大きく首を振る。

「それでは準々決勝第一試合……開始！」

いよいよ僕の運命の試合が始まった……。

第十七話 ベスト8！

戦いはこれから（後書き）

感想・評価をお願いします！

第十八話 激突！ 杖VS刀（前書き）

今回は地の文多めです。

第十八話 激突！ 杖VS刀

第十八話 激突！ 杖VS刀

「頑張つて！」

「負けるな兄ちゃん！」

様々な人の叫びが広い武道会場にこだまする。準々決勝が始まって武道会場の熱気は最高調になっていた。

そんな中で僕は咲は試合開始早々、睨み合っていた。互いに互いの隙を見つめるべく神経を研ぎ澄ます。観客席も一切動かない僕らを見たせいか沈黙し始めた。そんな沈黙を破り、最初に動いたのは咲だった。動き始めた咲の姿が一瞬にして霞んだ。

その次の瞬間、金属同士がぶつかる硬質的な音が会場に響き渡る。緊張の糸の切れた観客席から大歓声が上がった。会場に熱が戻っていく。

「やるな、普通はこの時点で武器が真つ二つになってるはずなのだが」

咲は僕に自慢の刀を杖で防がれたことに感嘆したようだ。心底驚いたような顔をしている。

「どついたりしまして。少しは見直しましたか？」

僕は腕を震えさせながらも聞いた。軽口を叩いて余裕があるように見せてはいるが僕に余裕はまったくない。咲の腕力が細い身体

に見合わないあまりにも大きなものだったからだ。

「そうだな、少しはな！」

咲はそういうと僕から距離を取った。顔からは笑いが見てとれた。咲はその笑みを保ったまま刀を顔の前に構え、目には見えないほどの速度で振るう。

「うつつ！」

「大丈夫なの！」

突然唸りを上げた僕に、ナルが心配そうな声をして聞いてきた。僕は無言で首を振る。体中で鋭い痛みを感じたのだ。咲の刀から放たれた何かが僕の身体を切り裂いたのだろう。見るとロープから露出された腕や足のところどころに深い切り傷が出来ている。もし師匠に貰ったロープを着ていなかったら身体中が切り傷だらけになっていたかもしれない……。想像するだけで僕は背筋がゾツとした。

「私の放つかまいたちは目には見えないぞ。さあどうする？」

咲は高らかに笑う。く、目には見えない攻撃か……。このままでは咲の思うつつばだ。そう思った僕は咲との距離を詰め、杖で攻撃を仕掛ける。

狙いすました僕の杖が咲の脇腹を打つべく振るわれた。咲の刀と僕の杖が真っ正面からぶつかる。

杖と刀は激しく火花を散らし、金属音を掻き鳴らす。

僕の腕はぶつかり合う力の大きさに僕の腕は悲鳴を上げた。一方、咲は余裕のある態度だ。やはり剣士と魔法使いでは地力が違うか……。

修行しているとは言え、僕と超人レベルの剣士の咲との間には超え難い差があった。

しかしよい作戦はない。僕は咲から一度距離をとり鏢ぜり合いをやめる。そして改めて次々と杖を振るう。右、左、正面、……杖が振られる度に刀によって防がれた。その度にキンッと澄んだ音が会場に響き、火花が舞台の上に咲く。

「白河、咲に近接戦で勝つのは無理よ！ 危険を犯してもいいから咲から離れなさい！」

僕の様子を見兼ねた師匠が僕にアドバイスをしてくれた。やはりそうするしかないか……。

僕は師匠の意見に従って、かまいたちを放たれることを覚悟して咲から距離をとる。そして、僕は咲がかまいたちを放つ前になんとか魔法のイメージをして無詠唱で魔法を放つ。

数十ものバスケットボールほどの炎の塊が僕の周りに発生した。それらは咲に向かって炎の弧を舞台の上に描き飛んでいく。当たれば人一人ぐらい簡単に灰になる魔力は込めてある。だが、咲はなんと刀で炎を斬りはじめた。半分にされた炎は舞台を黒く焦がしていく。観客席からわあっと驚きの声上がる。

なんて非常識な……一瞬驚きで僕まで観客たちのように思考が止まりかけた。しかし僕はすぐに思考を再開できた。僕の周りにまだ数十もある炎はしばらくの間とめどなく咲を襲い続けるからだ。

「いいわよ……。勝てる！」

師匠のつぶやきを僕はハッキリと聞くことができた。だが僕にはどうにも嫌な予感がしていた。咲がこのままやられるとは思えなかったのだ。

それからしばらくしていた黙々と炎を斬り続けている咲の額か

ら汗が滴り落ちた。

「白河、私は君を舐めていたようだ。

ここからは本気でやろう。白河、私の流派の名前を覚えているか？」

咲は炎の塊を次から次へと切り裂きながら僕に尋ねてきた。咲は炎の塊に囲まれながらもどこかまだまだゆとりのある顔をしていた。なにかある。そう思った僕はなんで今そんなことを聞くんのだ？ という疑問を心の底にしまい込んだ。そして咲の問いかけに素直に答える。

「飛天蒼空流でしたよね？」

僕の答えに咲は炎を斬りながらも満足そうな顔をした。そして上機嫌で話を始める。

「そうだ。では今、飛天蒼空流がなぜそう呼ばれるようになったのかを教えてやろう……」

咲は不気味な表情をすると唸り始めた。髪の毛が逆立ち身体が揺れ始める。

「嘘……ありえない」

しばらくして、咲のナルが頬をつねりながら呆然とつぶやいた。

「東方にそういう流派があるとは聞いたことあるけど実在したとは……」

師匠も咲の様子を見て啞然としていた。その口は半開きになっ

てしまっている。

「飛ぶとは……」

僕は咲を見て思わずつぶやいた。

信じられないことに咲はその時、空に浮かび上がっていたのだ。魔法でも完全な飛行は難しいのに……。

「さあ、試合はここからだ！」

咲は上空で大声で宣言した……。

第十八話 激突！ 杖VS刀（後書き）

感想・評価をお願いします！

第十九話 空中剣技を打ち破れ！（前書き）

地の文がまた多めです。戦闘描写だとしてもそうなってしまいます……。筆力不足かな？

第十九話 空中剣技を打ち破れ！

第十九話 空中剣技を打ち破れ！

空中に浮かび上がった咲の宣言に会場全体が大きく揺れた。観客たちが次々に空を見て叫ぶ。

大騒ぎとなった会場を見て咲は軽く微笑むと、その高度を上げ始める。咲の身体は上へ上へと空を駆け上がっていく。瞬く間に彼女の身体は雲を突き破り、見えなくなってしまった。

「鳥？」

首を痛くなりそうなほど傾けて上を見ていたナルがつぶやいた。僕の目にも何かが見えた。白い羽根を広げた鳥のような物が空一面に見えた。それらは舞台に向かって急降下してきている。

「まずい！ シールドよ、シールドを張りなさい！」

空を眺めていた僕に師匠が顔を青くして叫んだ。僕は慌てて、舞台の上にあつた炎を消した。そしてその魔力を使いシールドを張る。

直後に鳥のような斬撃が舞台に突っ込んできた。張られたばかりのシールドに凄まじい圧力がかかる。まずい、このままじゃシールドが持たない！ そう思った時、シールドにヒビが入った。雨のように降り注ぐ斬撃によりヒビは少しずつ大きくなっていく。シールドが破れたら終わりだ！僕は杖を舞台に突き立てて踏ん張り、シールドに魔力を注ぐ。膨大な魔力を注いだおかげでシールドのヒビは広がらなくなり、逆にふさがり始めた。

唐突に攻撃が止まった。僕は上を見上げる。青い炎を纏った咲

が刀を構えたまま彗星のような速度で接近してきていた。

「もらったあ！ 彗星剣っ！」

普通に回避したんじゃない！

僕は呪文を使い足元を爆破した。パンつと響く爆発音とともに僕の身体が吹っ飛ぶ。そのすぐ脇を咲が掠めていった。

直後で舞台の上で大爆発が起きた。地面が揺れ、激しい爆発音が轟きわたり、爆風が辺りの物や人を吹き飛ばす。

「うう、なんて威力なんだ……」

咲の彗星剣という技は呆れるほどの破壊力だった。舞台の真ん中が半球状にえぐられてしまっている。

空中から舞台を見回した後で僕はもう一度魔法を使い、背中の辺りで爆発を起こした。観客席を飛び越えそうになっていた僕の身体は急に方向転換して舞台の方へと飛び始めた。そしてそのまま舞台に頭からダイブする。

「大丈夫なの！」

「大丈夫か、白河！」

ナルと師匠がそれぞれ声をかけてくる。心配させたくないの僕が肩をさすりながら手を振った。二人はホッと息をついた。

「爆発を利用して飛ぶとは……。無茶をしてくれるな」

穴の中から出てきた咲が開いた口がふさがらないといった顔をして僕の方を見ていた。埃まみれの着物やあちこちにできた傷が彼

女にもダメージがあつたことを物語っていた。

「咲の方こそ。本気で死ぬかと思いましたよ！」

咲は僕の言葉を聞いて豪快に笑った。割合真面目に言っただけにシヨックだ。

「白河らしいと言うか……。まあいい、では行くぞ！」

咲が地面スレスレを飛んでこちらに切り込んできた。僕は杖でそれを受けとめる。攻撃を止められた咲はそのまま空へと離れて行き、勢いをつけて再び攻撃してきた。僕もまた受け止める。ヒットアンドアウェイ戦法ってわけか。でもそうはいかせないぞ。

そう思つて僕は速度に優れたツララで咲に攻撃をした。無数のツララが咲目掛けて飛んでいく。咲はツララが飛んで来るのを確認すると飛ぶ速度を上げた。ツララは咲がすでに通りすぎた場所に次々と飛ぶ。ツララは一つも咲に当たることなく空の彼方へ飛んで行った。

「そんな魔法じゃ倒せないの！」

ナルが僕を見兼ねて言った。それに対して師匠は微妙な顔をしている。確かに今のままでは拉致があかないだろう。もっと大規模な魔法を使う必要がある。でも咲は僕が大規模な魔法を使おうとしたらきつとどこかに避難してしまう。おそらく師匠もそう考えているから微妙な顔をしているんだろう。なんとか咲に気づかれずに大規模な魔法を使う方法はないものか。

「中々頑張るな。普通はへばってくるものなんだが……」

咲の方も粘る僕に対して決め手がないのか焦ったような顔をしていた。

このまま体力勝負に持ち込んでしまおうか……。僕の頭にふと、そんな考えがよぎる。だがいくら高い山の中で鍛えたといっても咲の方が体力は上だろう。

どうしたものか……。僕は頭から湯気が出そうなほど作戦を考えた。しばらくの間、咲と僕は幾度なく攻撃と防御を繰り返した。その中で僕の頭に一つの作戦が浮かんだ。その作戦はかなり運要素が大きい作戦だが今は賭けるしかない。

「咲、そういえばさっきの彗星剣って言うのは使わないのかな。あれをもう一度使えば僕に勝てると思うけれど」

僕は質問しながらたくさんの炎の球を咲に向かって飛ばして行く。当然それらは咲には当たらず空の彼方へと飛んで行った。

「あれは消費が激しいから使わないんだ」

咲は炎を回避しながらも律儀に答えた。僕はその答えが期待通りだったことにほくそ笑む。そしてさらに炎を咲に飛ばし続けながら咲に言った。

「使わないんじゃないかって使えないんじゃないの？」

咲の表情が固まった。さらに彼女は拳を握りしめ始める。

「言ったな……。それを言ったことを後悔させてやる」

咲はそういうと空高く舞い上がって行った。やがて身体が見えなくなってしまった。

「どうするんだ白河？ もう一度あれをやられたら死ぬぞ？」

「そう、危険なの」

咲が見えなくなったところで師匠とナルが怪訝な顔をして聞いてきた。僕はナルと師匠に笑って答える。

「大丈夫ですよ。作戦考えましたから。師匠ならいままでの僕の行動でわかるんじゃないかなと思いますけど」

師匠は妙な顔をした後で納得したような顔になった。だがまだその顔は心配そうだ。

「考えてることはだいたいわかったけど、その作戦大丈夫なの？ 途中でばれそうだけど」

師匠の問いに僕は吹っ切れた笑みでもって答える。

「その時はその時です。きっとなんとかかりますよ」

師匠は、まあそれもそうかもね、と言うと綺麗に微笑んだ。ナルも釣られてわずかに笑う。

こうして試合の結果は天に任された。

第十九話 空中剣技を打ち破れ！（後書き）

感想・評価をお願いします！

第二十話 決着と咲の決意（前書き）

お気に入りが五十を超えました。読者の皆さんに感謝です。

第二十話 決着と咲の決意

第二十話 決着と咲の決意

空の上から斬撃が降り注いできた。彗星剣の前振りだ。僕は舞台中央の穴の中にある土を利用して頑丈な壁を作る。さっきは硬い石が敷かれていたのでできなかったのだが、この方が魔力が少なくて済む。そして節約した魔力を「作戦」のために使うのだ。

斬撃が土の壁を叩き、爆撃でも受けているような衝撃が僕を襲う。

斬撃が終わった。空の高いところに青い光が見えた。それはこちらに向かって急速に接近してきている。

「これで終わりだあー！」

咲が力の限り叫びを上げた。

それを聞いた僕は「作戦」を開始する。僕は土の壁の中から出てきて杖を振り上げた。空の彼方から炎の球が無数に舞台の上に集まってくる。僕がさっき咲に向けて放った炎の球だ。あらかじめそれらを離れたところに待機させていたのだ。それらの炎の球は次々と融合して巨大な球を形成し始める。

すぐに球は青い輝きを放ち舞台を覆いつくすほどに成長した。猛烈な熱が辺りを支配する。その様子はさながら小さな太陽が生まれたようだった。あまりの熱さに観客席から人が逃げ出していく。師匠とナルもシールドを張って熱に耐えていた。

「いつけええー！」

僕は歯を食いしばり気合いを入れた。太陽がゆっくりと空に向

かつて上がり始めた。

上空の咲の顔が驚愕に歪んでいく。

「く、か、かわせない！」

咲はなんとか回避をしようと試みたものの、彗星の勢いを持った身体は方向転換を許さない。

咲の身体は太陽の中に吸い込まれていった。

一瞬後で鈍い音がした。

咲が舞台の上に落ちたのだ。すぐに僕は魔法を解除する。太陽が掻き消え、辺りに静寂が戻った。僕は横たわったまま動かない咲に駆け寄った。着物が焼け焦げ、肌が煤けている。僕は真っ黒になった咲の顔を見つめた。咲の目がゆっくりと見開かれた。咲の漆黒の瞳が僕の目を見据えてくる。

咲の口が重々しく開かれた。咲の唇が震えながら言葉を紡ぎ始める。

「私の負けだ……。完敗だ……」

会場全体が爆発したような興奮に包まれた。司会者がどこからか現れた。さらに舞台の上に昇って僕の勝利を宣言する。

「準々決勝第一試合の激闘を制したのは白河選手でしたああ！皆さ
ま、彼にどうか盛大な拍手をお送りください！」

観客たちは総立ちになって拍手を始めた。なんだか恥ずかしいな……。僕は観客の視線に気恥ずかしさを感じながらも咲を舞台の端まで引っ張った。師匠とナルが舞台に上がり、咲に駆け寄ってくる。

「aggj m p t……ヒール！」

師匠が咲に治癒魔法をかけた。暖かい光の粒が杖の先から出てきて咲の身体に降り注ぐ。傷が光って少しずつふさがっていった。

「うう……ふう、すごいな。もう楽になって来たぞ」

咲は身体を起こすと手を閉じたり開いたりした。良かった、傷はだいたいふさがったようだ。

「それではただ今から舞台の復旧作業を行います。次の試合までしばらくお待ち下さい」

司会者がそう言うのと黒服を着た魔法使いたちが現れ、舞台の復旧を始めた。その魔法使いたちはこちらにもやって来た。

「そちらの選手の治療をさせていただきます」

黒服の魔法使いが咲の方に来て、彼女を連れて行くとした。それを咲自身が立ち上がって止める。

「私は大丈夫だ。舞台の方を早く復旧してくれ」

咲は黒服の魔法使いを追い返すと僕の方を見た。

「白河、話があるからついて来てくれ」

咲はそう言うのと控え室に戻って行った。僕は咲の後を追う。

「怪しい気配がするの！」

ナルも慌てて僕の後をつけて来た。師匠はニヤリと笑って手を振りながら僕らを見送った。

咲は控え室の端まで来ると足を止めた。そしてゆっくりと話を始める。

「白河、試合の前にした約束を覚えているか？」

咲は顔を赤くして声を震えさせながら僕に聞いてきた。あの約束は半分冗談だったのにな。もしかして咲はあれを本気にしたのか……。

「覚えているけど、あれって場の勢いで出た冗談だったんじゃないの？」

僕の後ろにいたナルも無言で頷いた。

しかし咲は想定外のことを言いはじめた。

「私も試合が始まるまではそうだった。だがな、試合を行っているうちに白河の強さに惚れたというか……と、とにかく、私を白河の家来として仕えさせてくれ！」

なんですとー！ いきなりすぎますよ咲ー！ 僕の頭が混沌の渦に飲み込まれた。様々な考えが脳裏をよぎる。そんな混沌とした僕の頭はすぐに冷やされた。ナルが僕の背後で絶対零度のオーラを放したからだ。

「それはできないわ。だって私が認めないもの」

ナルは冷え冷えした声で言い放った。しかしそんなナルの冷たく響く声にも咲は動じはしなかった。

「どうしてナルに認めてもらわないといけないんだ？」

咲の質問にナルは自信満々に言い切った。

「私が白河の嫁になるからよ」

なんでナルが僕の嫁になるの？ ナルじゃ嫌とかではないけど突然嫁になる宣言は……。

「白河が困った顔をしているじゃないか。まだ嫁になった訳じゃないんだからナルは関係ない。そういうことで白河、今から私は白河の家来だからな。よろしく頼むぞ主殿」

こうして愉快的仲間がまた一人増えました……。

第二十話 決着と咲の決意（後書き）

感想・評価をお願いします！

第二十一話 殺戮マシンは止まらない！（前書き）

敵キャラの強さがうまく表現できたか不安です……。

第二十一話 殺戮マシンは止まらない！

第二十一話 殺戮マシンは止まらない！

あの咲の衝撃発言の後、控え室に師匠や博士たちが来ていた。

「なんだと、お前が白河の家来だと……」

スフィアが咲の発言をナルに聞かされて凍りついていた。一方、咲は勝ち誇ったような表情をしている。その後ろで博士が不思議な顔をしていた。

「別に白河に家来が出来ても良いじゃないか。ただしその白河はわしの助手だからな」

スフィアとナルが同時に顔を赤く染めて博士に力一杯反論をした。

「ダメ！」

博士は二人の剣幕に変な連中だな、と首を捻るとその場から離れていった。

博士が離れると咲が二人に笑いながら話かけた。二人は咲を睨みつける。

「そんな顔をしないでくれ。私はあくまで家来になるのであって、恋人になるわけじゃないんだから。もっとも白河が私と付き合いたいとどうしても言うなら……か、考えてやらんでもないぞ」

咲がこつちを見て頬をほんのり桜色に染めた。スフィアは納得したような顔になったが、ナルはまだ険しい顔をしている。

「怪しい、怪しすぎるの……。でも証拠がないから今、そう今のところは、認めるの」

ナルは今のところはと言う部分を一段と強調して言うと咲を一瞥した。そしてようやく顔を緩める。

「そろそろ試合のようね。観客席に行くわよ」

他の選手の様子を見ていた師匠が言う。その視線の先ではクレナリオンが音もなく立ち上がっていた。

それを見た僕は師匠に続いて観客席に向かった。

「お待たせしました！ 準々決勝第二試合、クレナリオン選手対カーチス選手です！ 先の試合で恐るべき力を見つけたクレナリオン選手。彼を我らがダール帝国騎士団長にして、優勝候補筆頭のカーチス選手は止められるのでしょうかぁー！ それでは試合開始です！」

試合が開始された。隣に座っている師匠が肉食動物のような獰猛な笑みを浮かべてつぶやく。

「さてさて、どんな力を見せてくれるのかしら？」

師匠のつぶやきが終わったところで、カーチスが動いた。カーチスの姿が消え、空気を切る金属的な音が響く。

カーチスはいきなりクレナリオンの目の前に現れた。クレナリオンはカーチスのスピードに対応できていない。カーチスの剣は無防備なクレナリオンの腹に炸裂した。金属同士がぶつかり合う、耳を引くような嫌な音がした。

カーチスが三人、いやもつとたくさんかな？ とにかくたくさんに増えた。たくさんのカーチスはクレナリオンの次々と容赦なく攻撃を叩き込んでいく。機関銃が打ちっぱなしにされたような音が会場を包んだ。

「あのクレナリオンを圧倒してるの……」

後ろにいたナルが思わず言った。他の観客たちや咲にスフィアそれに博士も茫然として見ている。

そんな中、師匠が青ざめた顔をして叫び出す。

「違う、違うわよ！ 良く見なさい、クレナリオンはまったくダメージを受けていないわ！」

師匠の言葉を聞いた博士が、銀色の長い望遠鏡のようなものを取り出した。そして思いきり叫ぶ。

「本当だ。損傷率ゼロとわしの機械に表示されておる！」

損傷率ゼロ？ あんな攻撃を受けているのに？ 博士と師匠の言葉を信じるこのでしなかつた僕らはクレナリオンをさらに注視した。

確かにクレナリオンの着ている薄っぺらい灰色の服は、切れ目一つ入ってはいなかった。博士と師匠の言ったことは本当だったのか……。そう思ったところでカーチスの動きが止まった。カーチスの人数も減っていき、すぐに一人に戻る。

「何故、何故だ！　どうして攻撃が効かないんだ！」

カーチスは舞台に剣をぶつけると天を仰いで叫ぶ。

クレナリオンは嫌みな笑みを浮かべながら、カーチスに向かって高らかに話を始める。

「ハハハ、私ハ自分ノ身体ノ回りニ強力ナバリアヲ張ルコトガデキルノダ。貴様ノ攻撃程度デハ私ニ触レルコトスラデキナイ」

クレナリオンの言葉にカーチスは凍った。だが、すぐに距離を取り剣を上突き上げる。しばらくしてカーチスの剣の周りに魔力が集まってきた。

「あれは魔法剣か？　どうやらカーチスは何か大技を撃つつもりらしいぞ！」

咲が剣士らしくカーチスの行動の目的にいち早く気づいた。そして姿勢を低くして衝撃に備えようとする。僕らもそれに続いて姿勢を低くくした。

「はああ！　サンダーブレイクウー！」

カーチスの剣先から三本の稲妻が飛び出した。三本の稲妻は途中でまとまって渦をまきはじめる。

そして螺旋状になった稲妻はクレナリオンを襲う。クレナリオンから、舞台全体に稲妻が走り抜けた。稲妻は十秒ほども持続すると徐々に小さくなり消え始めた。最後に消えそうになった稲妻は再び激しくスパークした。

そのあまりの光量に僕は目を閉じた……。

目を開けると舞台の上には蜘蛛の巣のように焼け焦げた跡ができていた。クレナリオンはその中心で悠然とたたずんでいる。その身体に傷一つついた様子はない。

それを見たカーチスは剣を放り投げた。

「今のは私の最高の技だ。あれでダメージを与えないなら私に君は倒せない。君の勝ちだ」

クレナリオンは意外そうな表情をすると満足げな表情になった。

「潔イ人間ダ。良イタロウ、降参ヲ認メテヤロウ」

クレナリオンがそういうと司会者がまたどこからか現れ宣言した。

「決まったあー！クレナリオン選手の勝利です！優勝候補筆頭のカーチス選手はまさかの準々決勝敗退となりました！今回の大陸最強武道会は波乱の展開です。誰かがクレナリオン選手を破るのでしょうか？はたまたクレナリオン選手がこのまま優勝してしまうのでしょうか？このあとの展開が非常に気になるところです！」

司会者が叫ぶと会場が熱気に包まれた。だが僕の周りは冷たい空気がただよった……。

第二十一話 殺戮マシンは止まらない！（後書き）

感想・評価をお願いします！

第二十二話 最強……？ 超強運戦士！（前書き）

今回は少しコメディー風味です。

第二十二話 最強……？ 超強運戦士！

第二十二話 最強……？ 超強運戦士！

クレナリオンの試合が終わった後、僕らは次のナルの試合が始める前に、控え室でナルの対戦相手を観察していた。

「うーむ、見れば見るほどただの女だな。ここまで残ったのが不思議だ」

咲が首を捻った。咲の言う通りナルの対戦相手は弱そうに見える。僕が見る限り、ナルの対戦相手の女戦士は戦士と言うより酒場のお姉さんと言った雰囲気的女だ。健康的な褐色の身体にも筋肉はほとんどついておらず、柔らかいラインを描いている。特にスイカのような胸がなんとも……。

「鼻の下を伸ばしちゃダメ！」

後ろから叫び声がした。恐る恐る僕が後ろを振り向くとナルが鬼のような形相で立っていた。

やばいぞ……、ナルは本気だ。身の危険を感じた僕は助けを求めて辺りを見回した。

そして、スフィアと咲の方を見て精一杯するような目をしてみる。

「自業自得だな」

「今のは白河が悪い」

二人は軽蔑したような目をして言った。助けってくれるどころか

ナルと一緒に攻撃してきそうだ。し、仕方ないじゃないか胸の谷間に目を奪われたって……。僕も男なんだから。

最後の手段だ、同じ男の博士なら味方してくれるに違いない！そう思った僕は博士の方を見た。博士は手に持った機械に向かって語りかけていた。ダメだ、どこか異世界に飛んでいる……。

「まあまあ、喧嘩しちゃダメよ。もうすぐ試合なんだから」

し、師匠が助けてくれた。さすが師匠ありがたいです！僕は師匠に心から感謝した。

「むう、それなら仕方ないの。後にする」

ナルは頬を膨らませて納得いかないように言う。でもとりあえず僕は今のところは助かったようだ。

なんとかナルの試合が終わるまでに言い訳を考えておかなきゃな……。僕がそう思っていると急に舞台の方が騒がしくなってきた。スフィアが舞台の方を覗いてくる。

「どうやら準備が終わったようだ。私と博士は観客席から応援するからしっかり頑張って」

舞台の方から戻って来たスフィアはそういうと博士の服を掴んだ。そして観客席まで博士を連行して行く。

博士はその間も機械に向かって語り続けていた。

「私もそろそろ行くの」

ナルも舞台に向かって歩き始める。僕と師匠とスフィアもナル

に続いて歩き出した。

「それでは準々決勝第三試合ナル選手対ジェシカ選手を開始いたします。それでは試合開始！」

毎回おなじみとなった司会者の宣言で試合が始まった。観客席から大歓声上がる。舞台の上からジェシカは観客席に向かって手を振った。おじさん連中の興奮した声が聞こえてくる。

一方、ナルの方は観客たちにほとんど無関心だった。沈黙したままジェシカを見据えている。

沈黙を破り、ナルが先に勝負を仕掛けた。ナルは呪文を唱え始める。大魔法を使ってジェシカを一気に片付けるつもりだ！ 対するジェシカはその場で胸を張って立っているだけだった。大きな胸を張って余裕で立っている。

「a d k m p……いた、いたあ……。舌嚙んだの」

舌嚙んだあ？ ナル、いくらなんでも初歩的すぎるミスだよ！ 師匠もあまりのミスに額に手を当ててうなだれる。咲に至っては呆れて口が半開きだ。

「あらら、そんなんじやお姉さん倒せないぞ」

ジェシカが笑いながら手に持っている鞭でナルに攻撃してきた。あまり速くはない、ナルなら十分回避できる攻撃だ。もちろんナルはそれを素早く回避しようとした。だが……。

「ふああ！」

ナルは何故か足元にあった小石につまずいた。そして頭を硬い舞台にしたたかにぶつける。さらに起き上がろうとして顔を上げたところにジェシカの鞭が直撃した。

「お、おかしいの！」

鼻を赤く腫れさせたナルがジェシカに向かって叫んだ。しかしジェシカは涼しい顔をして答える。

「うーん、お姉さんは何にもしてないよー？　きつとあなたの運が悪いだだけだよ」

ジェシカは色っぽくそういうとまた鞭で攻撃を始めた。先程と変わらず攻撃自体はたいしたことはない。今度はナルも失敗しないように周囲をよく確認してから回避しようとした。しかしそこで風が吹いてきた。

「目にゴミが……。何にも見えない！」

ナルの目にゴミが入った！　視界を奪われてしまったナルはまともや鞭の直撃を受けてしまう。

ナル、運が悪すぎじゃないか？

「何かあるわね、あの女。いくらなんでもつきすぎよ」

師匠がジェシカを見て忌ま忌ましげにつぶやく。咲もジェシカを睨みつけていた。

「ナル、しっかりしろ。そんな色気だけってみたいな奴に負けるな

！ 負けたら承知せんぞ」

咲はナルに向かって声援を送りはじめた。僕と師匠も声を張り上げて応援する。応援に対してナルはVサインをしてこっちを見た。そして杖を振り、魔法を使う。

雷がジェシカに襲いかかった……。

第二十二話 最強……？ 超強運戦士！（後書き）

感想・評価をお願いします！

第二十三話 強運の正体！（前書き）

また次回からシリアスパートに戻ります。

第二十三話 強運の正体！

第二十三話 強運の正体！

ナルの放った雷は一直線にジェシカに向かった。

しかしどこからか盾が飛んで来て雷を防いだ。ナルは唇を噛み締めて唸る。

「ますますおかしいの。何かある」

ナルはジェシカを舐めるように見回した。ナルの鋭い視線にジェシカは身をよじり、いやんいやんと言うポーズをする。

「お姉さんをそんなに見ちゃって……。もしかして私のことが好きなのかしら？」

ナルはジェシカのいつもよりさらに強調された胸にムツとしたが、気を取り直してジェシカの姿を見続ける。

その時、ナルの近くからかすかな物音が聞こえた。しかし、ジェシカの観察に集中しすぎているナルは気がつかない。

「何かいる？」

物音に気づいた師匠はナルの近くのある一点を睨みつけた。そしてそこを指差して叫ぶ。

「ナル、あなたの近くに何かいるわよ！」

ナルは師匠の言葉に従い、氷の魔法を使った。魔法のツララが

複数飛んでいく。

「痛！」

何もないところから悲鳴が聞こえた！
誰がいる、目に見えない誰かが！

「くう、見えないの」

ナルは姿の見えない何者かに苛立ちを隠せない。苛立ったナルは無我夢中で魔法を放ち始める。

「ナル、落ち着くんだ！ 敵の気配を感じる！」

咲はナルにアドバイスをする。咲の必死のアドバイスにナルは魔法を一時中断して神経を集中し始める。だが、それをジェシカが妨害し始めた。

「お姉さんを見殺ししちゃだーめ」

ジェシカはナルに執拗な攻撃を仕掛けてくる。ナルはジェシカの鞭を容易くかわせる実力がある。ただし、目に見えない何者かがジェシカを援護しているため本来容易くかわせる攻撃もかわすことができない。

「見えるようにさえできれば勝ちなのに……」

ナルは見えない敵に舌打ちしながらつぶやいた。
そう、実は見えない敵に見えるようにできればこの戦いは勝ちなのである。

大陸最強武道会は、二人一組での参加など認めていないからだ。ナルは見えない敵に対する対策をジェシカと戦いながらも考える。

しばらくしてナルの足が止まった。

さらにナルは身体の前に杖を突き出す。

さらにナルは杖を振り、水魔法を使った。滝のような雨が舞台の上に降り注いでいく。

舞台が水浸しになったところでナルは風魔法も使う。舞台の近くで砂が巻き上げられた。砂を巻き上げた風はそのまま舞台の上で砂嵐となる。

「見えるようになったぞ！」

咲が叫んだ。咲の視線の先には人の形をした泥の固まりがあった。砂嵐が収まると舞台の上に泥だらけの人型が出現したのだ。

その人型はジェシカの方を向くと申し訳なさそうに頭を下げる。

「姐御、すいやせん！ ばれちまいました」

人型はそういうと足早に舞台の上から逃げ出した。舞台の上には茫然としたジェシカが取り残されている。

「ジェシカ選手、あれはどういうことなのですか？」

舞台の上に現れた司会者はジェシカを問い詰める。観客席の観客たちもジェシカに激しいブーイングを始めた。会場の雰囲気はジェシカは笑ってごまかそうとする。

「あはは、これには深い訳があるの。許してくれない？」

ジェシカは甘ったるい声をだして司会者に懇願する。だが司会者はそれをきつぱりと断った。

「ダメです。規則は規則ですから。どんなに頼んでもダメなものはダメです」

ジェシカは司会者のその言葉を聞くと司会者にしなだれかかり、さらに甘い言葉を投げかける。

「ねえ、もし今のこと許してくれるなら私を好きにしても……いいのよ？」

司会者は顔を赤らめたが再びはつきりと拒絶した。

ジェシカの方も意地なのかまた似たようなことを言う。そして司会者もまた断る。このようなやりとりしばらく続いた。

そしてついに一人取り残されたようになったナルが二人のやりとりで飽きて一人遊びを始めた頃、ジェシカの化けの皮が剥がれた。

「さつきから聞いてればダメの一点張りじゃない。この私が好きにして良いっていつてんのよ。それに応じないなんてあんた男なの？
ありえないでしょ」

ジェシカはそう吐き捨てると舞台の上からさっさといった。会場になんとも表現しがたい沈黙が訪れる。

「白河、あんな女にだけはひっかかったちゃダメなの」

「ああ、いくら見た目が良くてもああいう性格はダメだと私も思うぞ」

ナルと咲がしみじみとした表情で僕の方を見てきた。失礼だな、僕にも人を見る目くらいありますよ！

「二人とも、僕はあんなのにはひっかかりませんよ」

僕は真面目な顔をして言い切った。でも二人は疑わしげな顔をする。

「どうだか。白河は胸さえ大きければどんな女にもついていきそうなの！」

「私もそんな気がするな……」

二人とも僕をどんなエロ男だと思ってるんだ！

僕が心の中で叫んだ時、師匠が僕らに告げた。

「白河のことはいいとして、私はこれから次の試合にそなえて控え室の端で瞑想をするわ。だからしばらくの間は話かけないでね」

僕とナルの間に緊張が走った。瞑想とは集中し、魔力を高めるために行くことだ。そして普通、師匠くらいの魔法使いは使わない。その必要がほとんどの場合ないからだ。よって、師匠が瞑想をすると言っことはそれだけ次の試合の相手が強いと言っことなのだ。

僕らは師匠の対戦相手に対する警戒に対して、気味の悪さを感じたが師匠に続いて控え室へと戻って行った……。

第二十三話 強運の正体！（後書き）

感想・評価をお願いします！

第二十四話 武道会に二つ目の恐怖！（前書き）

忙しくて連日更新できませんでした。作者が忙しくなってきたので、これからは二日から三日に一度の更新となると思います。

第二十四話 武道会に二つ目の恐怖！

第二十四話 武道会に二つ目の恐怖！

控え室の端で師匠は先程から瞑想を続けていた。師匠はあぐらをかき、目を閉じて、呼吸すら抑えている。その師匠の周りには膨大な魔力が渦巻き、時折火花が飛び散っている。魔力によってあぐらをかいたその姿は蜃気楼のように歪んで見えた。あまりにも大きな魔力が空間をわずかにねじ曲げているのだ。

「気持ち悪くなってきたな。私は先に外に出て待っているからな」

咲は蒼白な顔をし、口を抑えた。そしてよたよたと控え室から出て行く。きつと師匠の魔力に酔ったのだろう。巨大すぎる魔力は人を酔わせるのだ。

「私もそろそろ限界。白河は平気？」

ナルも具合が悪そうに顔を俯けながら聞いてきた。息が乱れていて、かなり苦しいように見える。

「僕は大丈夫だよ。ナル、もし気持ち悪くなってきたのなら休んでおいで」

僕がそういうとナルは早速、控え室から駆け出していった。これで控え室には僕と師匠と師匠の対戦相手の男しかいなかった。ちなみにスフィアと博士はいない。なんでも、博士が先程ナルと戦った透明人間に透明になる方法を聞くんだ、とか行って消えたからだそうだ。スフィア、博士の面倒みるのが苦労様。

僕がくだらない考えをしていると、師匠はいきなり呻き始めた。

「うう、むう、はああ！」

師匠の身体から魔力が噴出した。濃密な魔力が火山のように溢れ出す。僕には馬鹿みたいな量の魔力があるが、今の師匠はそれよりもさらに大きい。

控え室に魔力が満たされていった。僕は魔力に飲み込まれそうになる。

「素晴らしい魔力ですねえ。感心に値しますよ」

先程から沈黙を守っていた対戦相手の男が、師匠に話しかけてきた。張り付いたような笑みを保ったままである。

「それはどうもありがとう。でも、あなたならこれぐらいの魔力あるんじゃない？」

師匠もまた微笑んで男に返答する。しかし、その目の奥には黒い物が覗いていた。

「怖いですねえ、そんな目をしないで下さい」

男はおどけたように言うと、控え室を出て行った。

師匠はしばらくして妖艶な笑みを浮かべた。

「ふふ、面白い。久々にやるとしますか。さて白河、舞台に行くわよ。そろそろ準備もできてるだろうから」

師匠はゆっくりと立ち上がると控え室から出て行った。僕も師

匠の後に続いて行く。

舞台に着くと、すでにナルと咲がいた。二人とも顔色は良く、体調は戻っているようだ。

「いよいよなのね、師匠」

「ええ、まあ頑張ってくるわ」

「あなたがどのような人か、私はいまいち知らないが……とにかく頑張ってください」

師匠にナルと咲が話かけてきた。師匠はナルと咲に向かって笑いかける。そして舞台の上上がった。舞台の向こうでは、対戦相手の男がいやみのある笑みを浮かべて立っている。男は一見するとひよろつとした長身で、顔立ちなどは冴えない、至って普通の男に見える。着ている鎧も軽装の物で、せいぜい熟練者が愛用する程度でありふれた物だ。

だが男は舞台の向こうから得体の知れない、それこそ底のない闇のような気配を放っていた。

師匠と男が向かい合うとすぐに舞台の中央に司会者が現れた。

司会者は向かい合う両者の雰囲気圧倒されながらも、大きな声を張り上げた。

「そ、それでは準々決勝第四試合チェリス選手対エントス選手を開始させていただきます！ それでは試合開始です！」

司会者はそういうやいなや舞台から離れていった。会場は試合開始に熱狂し、観客席からは叫び声やら怒鳴り声やらいろいろな叫びが聞こえてくる。

それに対し、師匠とエントスは互いに笑ったまま動こうとしない。

「すごい、両者とも隙がまったくないぞ！」

咲は舞台の上の二人を見て感動したように叫ぶ。咲が叫ぶのも無理はない。師匠とエントスは隙だらけに見えて、隙がまったくないのだ。二人はそのまま一步も動かずに睨み合いを続ける。それは永遠に続くかのようにさえ思われた。

そして師匠とエントスの睨み合いに会場がシラけてしまった頃、ついに動きがあった。

突如として激しい魔法の撃ち合いが始まった。炎、氷、風、土、さらに光に闇。およそ考えうるかぎりの属性の攻撃魔法が舞台上を飛び交い、目を開けていられないほどの光が発生する。僕とナルは全力でシールドを展開して、咲はそのシールドの後ろに避難した。

その間にも戦いは激しさを増しているようで、狙いをそれた魔法が観客席にも当たり、あちこちから炎が上がった。たまらず観客たちは次々と逃げ出した。そしてやがて博士とスフィアらしき人影がその場で頑張っているのみにってしまった。

光に包まれた舞台からお腹に響く地鳴りのような音がしてきた。その音の感覚は次第に狭まり、すぐに絶え間無く聞こえるようになる。

信じられないことだが……師匠とエントスはあれだけたくさんの魔法を使いながら、同時に武器での戦いも行っているらしい。

人間とは思えないな……。

僕と同じことを咲とナルも思ったようで、感心したような呆れたような微妙な顔をしている。

舞台の光が収まった。二人の姿がはっきりと視界戻ってくる。

「あなた一体何者なのかしら。ただの人間とは思えないわよ。そろそろ正体を明かしたらどうなのかしら？」

師匠がエントスに向かって話かけた。口調は軽いが、目つきは矢のように鋭い。

師匠の言葉を聞くとエントスが腹を抱えて笑い始めた。高笑いが大気を揺らす。

「ははは、気づかれていたのか。私としたことが失敗だったよ。良からう、私の正体を教えてやろう……」

エントスはもったいぶって、間を開けた。師匠は固唾を飲んでエントスを見守りつつける。

「私は魔將軍エルストイ、この大会を潰し、さらに勇者を殺すためにきた者だ」

エルストイの背中から闇を纏った漆黒の翼が現れた……。

第二十四話 武道会に二つ目の恐怖！（後書き）

感想・評価をお願いします！

第二十五話 大激戦！ 燃えゆく帝都！（前書き）

あと少しで武道会編が終了です！

第二十五話 大激戦！ 燃えゆく帝都！

第二十五話 大激戦！ 燃えゆく帝都！

「まさか將軍クラスとはね。ずいぶんとまあ大物が来たものだわ……。さっきまでは私があっさりあなたを倒して武道会を続けさせようと思ってたけど、それは無理そうね」

師匠は翼を広げ、空の上から見下ろしているエルストイを睨みつけた。そして苦み走った顔をして唇を噛む。

「雑魚でなくて残念だったな。魔王様は勇者と勇者の持つ聖剣を危険視しておられた。それゆえ、將軍である私みずからここに赴くこととなったのだよ」

エルストイは聞いてもいないのに魔族の事情をペラペラと話した。おそらく余裕があるため口が軽いんだろう。

「本当に魔王は復活していたのね。ダートル帝国お得意の魔王復活援助金詐欺だと思っていたの……」

ナルが信じられないといった顔でつぶやく。それはそうだろう、魔王が復活したなど誰も信じたくはない。……それはいいが魔王復活援助金詐欺って何なのさ。セコい香りがプンプンするんだけど。

僕が微妙な顔をしていると師匠が咲に向かって叫んだ。

「咲、あなた二人を連れて飛べる？」

「もちろん飛べます！」

咲はポンと胸を叩いて答えた。師匠はそれを聞いて頷くと咲に指示を出す。

「それならあなたは白河とナルを連れて城に向かつて。それで城に着いたら勇者を連れてここに帰ってくるのよ。あと、戻って来るときは白河とナルを城に置いてきなさい」

師匠は手早く指示を出すと、エルストイとの戦いを再開した。魔法が飛び交い再び会場は騒然となる。

「さあ、早く行くぞ。ここは危険だ」

魔法が飛んで来る中、咲が空に飛び上がる。ナルは咲のお腹に上手くつかまった。咲はナルの身体をしっかりと抱えると、僕にも早く身体につかまるよう催促してくる。

「白河も早く！」

咲はナルを抱えて不安定になりながらも必死に僕を呼ぶ。だけど僕は会場を離れられない。なぜなら会場にはまだ知り合いが二人残っているのだ。

「待つて、博士とスフィアを何とかしないと！」

僕は博士とスフィアのいる方を指差した。咲はそれを見て顔をうつむけると、また僕の方を見た。

「四人は無理だ！ スフィアたちを助けるのは白河たちを送ってからにしよう！」

咲はそういつと僕の手を掴み、強引に背中の上に載せる。

僕は咲にもう一度博士とスフィアの事を頼もうとしたが、そこで思い出した。

「はーかーせー、今こそ自慢の波動銃でエルストイをやっつけてくださいよー」

そう、博士は超兵器を所持していたのである。どうしてこんなことを忘れていたのだろうか。最初から博士に超兵器を使ってもらえば良かったのだ。

「ダメだ！ 波動銃は今、波動銃EXに改造中で使えん。他も定期点検中だ」

こんな時しか役に立たないのに改造中や点検中とは、なんて使えない兵器たちなんだ……。

「白河、私たちは大丈夫だから城へ急ぐんだ！ このままでは街が大変なことになる！」

スフィアが激しく魔法を撃ち合っている師匠とエルストイを指差した。狙いはずれた魔法があちこちに当たり、周囲は穴だらけになっている。そして二人は徐々に市街地の方へと移動していた。エルストイも師匠に阻まれながら、城に向かっていているのだ！

「まずいな、急ぐぞ」

咲は城に向かって跳び始めた。城は競技場から市街地を越えた山の斜面に建っている。ここからだとなんキロほどの距離があり、白

亜の城は霞んで見えた。

咲は二人を抱えながらフラフラと不安定に低い高度で飛んでいく。その間にも師匠たちは市街戦に突入し始めていた。

建物の屋根を飛ぶように走り抜けながら師匠が次々と魔法を放ち、エルストイもそれに応戦して魔法を使う。石造りの建物は吹き飛ばされていき、人々は当てもなく逃げ惑う。爆発によって一部の木造の建物に火が付いた。それはやがて周囲の建物を飲み込む大火災となっていく。

「うわああ！ 助けて、落ちる落ちる！」

僕らの方にも魔法が容赦なく飛んできた。猛烈な爆風に巻き込まれ、咲の身体が木の葉のように揺らぐ。僕は咲の身体に必死にしがみつきのながら師匠たちの方を見た。

「早い、攻撃が当たらない！」

いつのまにか教会の高い塔の上に陣取っていた師匠が、エルストイに向かって悪態をついていた。その間も攻撃の手は休めない。もはや弾幕のようになった魔法の群れがエルストイに続々と襲いかかる。エルストイはその攻撃を超高速で回避していった。

僕らは激しすぎる師匠たちの戦いに巻き込まれて、思うように城へ向かうことができない。

その時、エルストイが何か人形のような物を出した。遠いので形はよくわからないが、まがまがしい形をしていることだけは認識できた。

「いでよ、我が下僕どもよ！」

人形が大きくなっていく……。すぐに人形は人間ほどの大きさ

の異形となった。

硬そうな石の質感の外皮に、鋭い爪と翼の生えた姿をしている。そんな怪物が二体もあらわれた。

「ガーゴイルか！」

師匠が驚いたように叫んだ。そしてすぐに攻撃を集中させ倒そうとする。しかし、ガーゴイルは巧に攻撃をかい潜り、僕らの方に近づいてきた！

「た、大変なの！」

ナルが怯えて足をばたつかせ始めた。咲は暴れるナルを何とか抑えつけると、全力で飛び始める。

強い風が頬を撫で、景色が加速していく。後ろを振り向くとガーゴイルが追いかけて来ていた。僕らとガーゴイルとの距離はどんどん縮まっていく。

「咲もつとスピード上げて！」

「これ以上は無理だ！二人も人を運んでいるからな、もう限界だ！」

「でも、それじゃ追いつかれますよ！」

「任せておけ、振り切って見せる！」

咲は急旋回を始めた。つかまっている僕とナルに遠心力が襲いかかってくる。続いて咲は急降下した。地面ぎりぎりを滑るように飛んでいく。ぶ、ぶつかるー！咲が家にぶつかりそうになる。だが家にぶつかる直前で垂直上昇してなんとか回避した。心臓止まる

かと思つたよ、咲！

「まだ追いかけてくるの！」

ガーゴイルは依然として僕らを追いかけてきていた。やばい、やばいよ！

「くそ、ダメだったか！ ではもう一度するまでだ！」

咲が再び加速しようとした時、目の前にガーゴイルが回り込んできた。そして鈍く輝く爪を振り上げる……。

「ほわああ！」

「いああ！」

「はよはやああ！」

僕らは三者三様の悲鳴を上げた！ 爪が僕らを切り裂く……
そう思った時、ガーゴイルが飛び散った。

「感謝シテオケ。私ガ人ヲ助ケタノハ初メテダ」

後ろからあまりにも聞き覚えのある機械的な音声が出た……。

第二十五話 大激戦！ 燃えゆく帝都！（後書き）

感想・評価をお願いします！

第二十六話 殺戮マシンと魔族と勇者

第二十六話 殺戮マシンと魔族と勇者

僕はゆつくりと顔を後ろに向けた。

仮面のような無表情の男がいた。重厚な黒光りする鎧を着ていて、背中から青い炎が噴き出している。この間見た時とは格好が違うが間違いない、こいつはクレナリオンだ！

「クレナリオン！」

僕ら三人は声の限りの叫んだ。声が騒然としている帝都に響き渡る。

クレナリオンは叫び声に眉をひそめると、思わぬことを言った。

「貴様ラニ用ハナイ早く城ニ行ケ。最モ勇者ヲ呼ンダトコロデ奴ハ私ガ倒シテイルダロウガナ」

何でそれを知っているんだ！ 僕は思考が一瞬停止した。他の二人も同じように顔が凍っている。しばらく時間が止まった。

そこからナルが真っ先に回復した。そしてクレナリオンに疑問をぶつける。

「どうしてそれを知ってるの……」

クレナリオンは何を言っているんだ、とばかりに首を捻った。

「アレダケ大声デ話シテイタノダカラ聞コエテ当然ダロウ。私ハア

ノ時競技場ニイタノダカラナ」

あの時いたのか！ 気配がなかったからまったく気づかなかったぞ。

「分カツタナラ早く行ケ。アノ女ガ待ッテイルゾ」

クレナリオンはそういうと師匠たちの方へ向かって飛んで行くとした。それを咲が止める。

「待ってくれ！ クレナリオン、お前は一体……」

咲の叫びにクレナリオンは動きを止めた。そして首をゆっくりゆっくりこちらに向ける。

「私ハ奴ヲ倒スタメニ開発サレ、コノ大陸最強武道会ニ送り込まレタ。タダソレダケダ」

クレナリオンは無表情で言うと、爆風の吹き荒れる中を、激しい戦いの真っ只中へ向かって飛び立って行った。

「さあ、行くぞ。早く勇者を連れて私達も加勢するんだ！」

クレナリオンを見送ったあとで、咲は城に向かって一気に加速した。僕とナルは咲の身体から振り落とされないようにしっかりとしがみついた。

少しして、僕らはようやく城の上空までやって来た。白亜の城

は峻厳な山の中腹から山頂に向かってそびえており、さながら帝都を見下ろしているようだ。さらに空を突くいくつもの塔が周囲を威圧している。

僕らはその城の高く頑丈そうな塀にある巨大な鉄張りの門の前に降り立った。

門の前に立っていた兵士が、怖々と僕らに近づいてくる。

「お、お前たち何しに来た！」

二人の兵士は手に持っていた槍を僕らに向けて来た。怖いのか腰が引けているが。

「私達に敵意はない。この城には勇者様に用があつてきたの」

ナルが先頭に立って兵士たちに事情を説明し始めた。兵士はかわいい少女が前に来たからか、少し態度を柔らかくして答えた。

「勇者様？ 一体何があつたのですか？」

兵士たちは実に呑気に聞いてきた。この人たち平和ボケしてないか？

「街で魔族が暴れてるのだ！ 早く勇者を呼んで来てくれ！」

兵士たちの態度に業を煮やした咲が怒鳴った。兵士たちは街の方を見る。街の中心部から一筋の煙りが上がっている。それを見た兵士たちは一瞬で固まった。

「あの火事はまさか……魔族……？」

兵士たちは無表情でつぶやくと、顔を青くした。そしていきなり慌てふためき出す。

「こんな時に！」

「皆に知らせなければ！」

「早くしないと帝都が！」

兵士たちは門の隣にある小さな扉からワタワタと城の中に入っていく。すると、僕らに向かって手招きをした。

「さつき勇者様を呼んでくれと言っていたな？」

門の内側に入ったところで兵士が聞いてきた。僕がすぐに答える。

「はい、早くお願いします！」

僕がそういうと兵士たちは顔を見合わせ、そして歪めた。

「勇者様は今、神殿で洗礼を受けるためノースウェルまで出かけているんだ！」

なんだって！　勇者がいない！？

僕は顔から血の気が引いて行くのを感じた。他の二人も動きが止まる。

「今すぐ魔法で連絡するが、戻って来られるのはおそらく二、三時間後だ。それまでは城に避難しているといい」

一人の兵士が他の兵士を呼び、事態の説明を始める。もう一人は僕らを避難場所に案内しようと呼んだ。

「僕らは街に戻ります！ 師匠が戦ってるんです。師匠を一人にできません！」

僕は兵士の誘いを断った。兵士は驚いたような顔をしたが、すぐにキリリとした表情になる。

「そうか、なら今から勇者様がお戻りになるまで何とか持たせてくれ！ 勇者様さえ戻ってくれば何とかなるんだ。すまないが頼んだぞ、情けないことだが、我々では魔族は手に負えん！」

僕は兵士に向かって敬礼をした。兵士は戸惑ったものの敬礼を返してくれた。

僕とナルは兵士に向かって手を振ると、咲につかまって飛び立った。

街の方へ戻って来るとクレナリオンとエルストイが熾烈な戦いを繰り広げていた。衝撃波が広がり、辺りの建物にヒビが入る。クレナリオンの方がやや押されていた。エルストイの顔に喜悦が見て取れる。戦いを楽しんでいるかようだ。

エルストイが笑いながらクレナリオンを振り落とした。しかしすぐに猛烈な密度の魔法がエルストイに殺到する。間違いない、師匠の魔法だ。

師匠は少し離れた広場から魔法でクレナリオンを援護していた。額に汗をかきながら、目を凝らして空を見つめている。

「遅かったわね、勇者は！ 勇者はどこなの？」

師匠は目の前に降り立った僕らの中に勇者がいない事に困惑した。すかさずナルが説明する。

「勇者は今出かけているそうなの。戻ってくるには二、三時間かかるそうよ……」

師匠は舌打ちすると、クレナリオンとエルストイの方を見た。そして額にシワを寄せ、顔を陰しくする。

「あの魔族の強さははつきり言って異常すぎよ。勇者の聖剣があればあんなでも簡単に倒せると思ったのだけど……。四人で何とかなるかしら……」

師匠はしばらくエルストイの方を見てしばらく考え込む。

そして気合いの入った叫びを上げた。

「もう考えても仕方ない！ 四人でエルストイを倒すわよ！」

師匠に続いて僕ら三人も気合いを入れる。

僕らの長い戦いが今、始まるうとしていた。

第二十六話 殺戮マシンと魔族と勇者（後書き）

感想・評価をお願いします！

第二十七話 完全無欠の魔將軍！（前書き）

総合評価が200ポイントを超えておりました。
皆様ご愛読ありがとうございます。

第二十七話 完全無欠の魔將軍！

第二十七話 完全無欠の魔將軍！

帝都ハミヴァイの上空でエルストイとクレナリオンは激しく火花を散らせていた。

「想像以上ノパワーダナ。推定値ヲ大キク超エテイル」

クレナリオンはエルストイの腕を受け止めながら言う。彼の腕はキシキシと軋みを上げていた。

一方押しているエルストイはニヤニヤとクレナリオンを挑発する。

「所詮お前などがらくた人形に過ぎないのだ。この私に勝てるわけなからう？」

エルストイはさらに腕に力を込める。

クレナリオンの腕はよりいっそう大きく軋み始めた。

「やばいわね、このままではクレナリオンが……」

僕の前で様子を見ていた師匠が眉をひそめる。そこへ咲が何もしない師匠に詰め寄った。

「魔法で何とかできないのか！」

師匠は所在なげに首を横に振った。

「二人の距離が近すぎるのよ。あれではクレナリオンまで巻き込むわ」

師匠の言う通りである。エルストイに通用するような魔法を使えば、もれなくクレナリオンまで巻き込んでしまう。

師匠に言われて改めてそれを理解したらしい咲は黙り込む。だが、しばらくして咲は想定外の行動をした。

「クレナリオンに加勢してくる！」

「待つて、無謀すぎるの！　咲とエルストイでは力に差がありすぎる！」

咲の後ろにいたナルが咲を懸命に止めようとした。でも咲は耳を貸さずに飛んで行ってしまった！

「無茶するわね！　こうなったらしょうがないわ。ナル、白河、咲が頑張ってるうちに拘束魔法を全力で準備しなさい。それを使ってエルストイの動きを止めたら私が奴にスペクトル・アタッカーを打ち込むわ！」

なるほど、あの最強魔法ならエルストイを倒せる。希望が出て来たぞ！

僕とナルは高速で呪文を唱え始めた。辺りに魔力が立ち込める。

「小賢しい奴らだ。何をするつもりだ」

エルストイは無防備な僕とナルに向かって魔法を放ってきた。師匠がシールドを展開して襲いくる魔法の嵐を防ぐ。

魔法が次々とぶつかり、シールドの全体から溶接作業の時のような

青白い火花が飛び散る。やがてシールドが不気味に揺らぎ始めた。

「ちっ、なんて馬鹿魔力よ。シールドが持たないわ！」

師匠が魔力の大量に込められた魔法に思わず叫ぶ。

このままではやばい、逃げなきゃ！　そう思った僕とナルは呪文を唱えたままで後ろに走り出した。師匠との修行の成果だ。

僕らが後ろに避難を始めたところでついにシールドが破られた。師匠は身を屈めて建物の陰に逃げる。路上に取り残された僕とナルに暴風のように魔法が襲ってきた。極彩色の魔法たちが僕らのいる路上を隙間なく埋め尽くした。だれか助けてー！　死んじゃうよ！

僕は心の中で悲鳴を上げた。ただし、口では呪文を唱えたままだ。ナルも目を極限まで見開いているが、口は細かく動いている。悲鳴すら上げられずに死ぬのか……。そう思った時、女神が降り立った。

「はぁありやりやりやあー！」

僕とナルの目の前救いの女神こと咲が現れた。咲は奇声を上げながら魔法を刀で片っ端から斬っていく。すごい！　どんどん魔法が斬られていく……。ほどなく路上は焦げ跡や氷の残骸、風でえぐられた跡などでいっぱいになった。

咲はあらかた魔法を斬ったことを確認すると、再び空へと帰って行く。

僕とナルは咲に向かって手を振った。

「邪魔してくれたな。まあいい、死ぬのが少し遅くなったただけだ」

エルストイはそう言うとき咲に向かって攻撃を仕掛ける。爪が長く伸び、咲を切り裂かんとした。咲は爪を刀で受け止めるが、エルストイの圧倒的な力に押され始める。咲の額から冷や汗が流れ

た。

その時、エルストイの背中爆発が起った。

「私モイルゾ」

クレナリオンが腕を突き出していた。手の平に丸い穴が開いている。その穴からは煙りが一筋出ていた。

「がらくた人形があ！もう許さんぞ！」

エルストイは憤怒の形相となり、クレナリオンの襲いかかる。クレナリオンは手からエネルギー弾を乱射し始めた。光が幾筋もの直線を空に描く。エルストイの身体が爆発に包み込まれた。爆発は大きくなり、夕方になった帝都を照らす。

「エネルギーハ長クハ持タナイ。早く何トカシロ！」

クレナリオンは咲に向かって怒鳴った。咲はそれを聞いて僕らの方を見て声を張り上げる。

「魔法の準備はまだか！もうそろそろ限界だぞ！」

まだだ、まだ呪文は唱え終わらない！

僕らはしゃべれないので、ジェスチャーでそのことを知らせようとした。僕とナルはアイコンタクトをするとそれぞれポーズをとった。僕が手で×印を作り、ナルは手の平を向かい合わせて少しだけ隙間を作る。それぞれダメ、後もう少し、ということの意味している。それを見た咲は僕らの言いたいことを正確に理解してくれた。

「後もう少し、時間がかかるそうだ」

咲の言葉を聞いたクレナリオンは焦ったような声を出した。

「クソ、モウエネルギーが持タン。後ハ才前ガ何トカシロ」

クレナリオンの叫びに咲は刀を構え、攻撃態勢を取る。それと同時に砲撃が終了し、エルストイが姿を現す。なんてことだろう……。傷一つない……。僕らがそう思っているうちに、咲が斬撃を放った。斬撃がエルストイを覆い尽くすように飛ぶ。しかしエルストイは涼しい顔をしている。

「遊びは終わりにしよう」

エルストイは呪文を唱え始めた。大魔法でけりを付けるつもりだがこちらの呪文も佳境に入っている。頼む、間に合ってくれ！僕とナルはより早く唱えようと限界を超えた高速詠唱をする。だが、エルストイの方ももうすぐ唱え終わってしまいそうになってきた……。

「ad jga t……セフィロト！」

僕とナルの声が重なり、魔法陣が現れた。間一髪、僕らの呪文の方が早く唱え終わったのだ！

魔法陣から黄金に輝く樹が生えてきた。その樹は急速に成長していき、空を貫くかのように伸びていく。

「aggj pmd……ダーぐふおお！」

エルストイが樹に飲み込まれた。悪しき敵を飲み込む大樹を生み出す呪文。それが先程唱えたセフィロトの呪文だ。その主な効果

は拘束だけだが、その効果は絶大でエルストイでも抜け出すことは不可能だろう。

帝都に魔將軍を取り込んだ大樹がそびえ立った。その大樹は夕陽を反射し黄金色に輝いていた……。

第二十七話 完全無欠の魔將軍！（後書き）

感想・評価をお願いします。

第二十八話 散り行く戦士！（前書き）

ネタバレをしないタイトルは難しいですね……。

第二十八話 散り行く戦士！

第二十八話 散り行く戦士！

エルストイをその幹の中に封じた大樹がそびえ立った。今のところ、エルストイが出てくる気配はない。拘束は完璧になされたのだ。

「師匠、魔法を！」

僕は魔法陣に魔力を注ぎながら、師匠に向かって呼びかける。

師匠が建物の陰から出てきた。師匠はもうすでに呪文を唱えている。

しばらくして師匠の前に光り輝く七つの魔法陣が現れた。魔法陣は次第に輝きを増し、まばゆい金色の燐光を投げかけた。師匠の髪も膨大な魔力を孕んで逆立ち、揺れる。

しかし、師匠は呪文を唐突に止めた。

「し、師匠！ どうしたんですか！」

師匠！ どうしたんだ！僕は師匠の行動に啞然として叫ぶ。隣にいたナルも驚きを隠せない。

「魔力ノ不足力！」

上空のクレナリオンが僕らに向かって叫んだ。そうか、魔力不足か！師匠はずっと魔法を使いつばなしだったから……。無理もないだろう。

その間にも師匠は顔を青白く染めながら、魔力を魔法陣に込めていく。体内に残された魔力を全て搾り出しているかのようだ。再

び師匠は呪文を唱え始めた。それが佳境に向かうにつれて、魔力はわずかずつだが着実に増していく。その姿は夕陽に照らされて神々しいほどだ。

「まずい！ 日が暮れてきたの！ 夜になる前に何とかしなきゃ！」

沈みゆく太陽を見て、ナルが慌て始めた。普段無表情なナルが困ったような顔をしている。夜になるとよっぽど何か大変なんだろうか？

「ナル、夜になると何か大変なことになるのか？」

ナルが何も知らない僕に向かって怒鳴る。その顔は興奮しているのか真っ赤に染まっていた。

「魔族は夜になると魔力が跳ね上がるの！一説では五倍とも言われるわ！」

五倍！ インフレし過ぎだぞ！

僕が驚いている間にも太陽は着々と沈んで行く。辺りが薄暗くなってきた。師匠の魔法はまだ完成しない！ 間に合うか？

「ウギヤアアア！ ウオオオオ！」

大樹の中から魂を掻き消すような身の毛もよだつ雄叫びが響いた。ま、まさか……！

「エ、エルストイが！ この樹は本当に大丈夫なのか！」

咲が焦燥に駆られたような顔をして叫ぶ。大丈夫だ、と言いた

いところだが、今の状況では耐えられるとはいいがたい。

そう考える間にも闇はその深さを増していく。夜になったらやばいぞ！

「グウオオ！　グアアア！」

エルストイが再びおぞましい咆哮を上げた。樹の幹にわずかにヒビが入る。黄金の光でできた幹からどす黒い障気が噴出した。

「師匠早く！　もう樹が持たないの！」

ナルが魔力を注いでいる師匠をせかした。師匠は首を横に振り、指を三本出した。

「三十秒ですか？」

僕が師匠に希望を込めた確認をした。もし三分を意味していたら終わりだ。

師匠は首を縦に力強く振った。

あと三十秒なら持たせられる、そう思ったところで太陽がついに沈んだ。

「エルストイノパワーが増大シテイル。危険ダ」

クレナリオンが危険を知らせるや否や樹が大きく揺れた。百米ートル近くもあるような大樹が、嵐の日の小枝のように揺れ動く樹の幹からより一層激しく障気が噴き出し始めた。辺り一帯に黒いもやのような障気が満ちる。

「く、まともに息がでん！」

咲が口を抑えて顔をしかめる。咲のいる樹の上付近では障気の濃さは尋常ではないようだ。
もともと樹の根元のこの場所でも障気のせいで息苦しい。

「キシヤアア！　　ハアアア！」

ついにエルストイの上半身が樹から姿を現した！　顔に紫と黒からなるまだら模様が浮かべ、白目を剥いている。樹から抜け出ようと咆哮を上げながらもがくその姿に理性は全く感じられない。まさに怪物と言う感じだろうか……。

「全ク、獣ノヨウダ。世話ガ焼ケル」

クレナリオンはそういうとエルストイの元へと飛んだ。そして、その身体を力任せに樹に抑えつける。エルストイがめちゃくちゃに腕を振り回して抵抗する。鋭い爪がクレナリオンの鎧を紙のように切り裂く。切り裂かれた鎧から油が漏れ出した。

「離れるんだ！　魔法の巻き添えになるぞ！」

咲がその凄惨な様子にたまらず叫ぶ。

クレナリオンが咲の方に振り向いた。そしてゆっくり尋ねる。

「私ハ所詮殺戮マシンニ過ギナイ。コウナッタノハ運命ダロウ。ソレデモ、才前ハ私ガ”壊レル”ノガ嫌力？」

咲は悲しそうな顔をするとう感情を爆発させた。

「ああ嫌だ！　だから私たちと一緒に起こう……」

クレナリオンは顔を俯けると、悲しげに叫んだ。

「行キタイトコロダガナ、私ハコイツヲ抑エナケレバ。感謝ハシテ
オクガナ」

クレナリオンはそう言い放つとエルストイと格闘を再開した。咲
はその様子を見て、何も言わなかった……。

突如としてぞわり、とした感覚が僕の身体を襲った。膨大な魔力
の感覚だ。

「魔法の準備が完了したの！」

師匠の方をずっと見ていたナルが叫んだ。僕も師匠の方を向い
た。魔力が渦巻き、蜃気楼の様に空間が揺らいでいる。師匠の身体
は魔力を帯びてぼんやり青く輝いていた。

「咲、師匠が魔法を撃つよ！ 逃げて！」

僕は力の限り叫んだ。できるだけ早く逃げてもらわないと命の
保証さえできない。そう思えるだけの魔力が師匠の魔法には込めら
れていたのだ。

「さらばだ”戦士”よ……」

咲は感慨深げにつぶやくとこちらに飛んで来た。師匠は咲が飛
んで来たのを確認する。そして、すぐに魔法を使うべく杖を地面に
突き立てた。

「スペクトル・アタツカアアアー！」

師匠の杖から透明な水の塊のような魔力弾が放たれた。それは瞬く間に七つの魔法陣をくぐり抜け、七色に輝く光の弾となる。七色の弾は夜空に流れ星のような軌道を描いた。そして一直線にエルストイに直撃する。

直後に大地を揺さぶるほどの爆発が巻き起こり、周囲のなにもかもが光に飲み込まれた。

第二十八話 散り行く戦士！（後書き）

感想・評価をお願いします。

第二十九話 恐怖の叫びと魔族の笑み（前書き）

今回は残酷なシーンがあります

第二十九話 恐怖の叫びと魔族の笑み

第二十九話 恐怖の叫びと魔族の笑み

「ふおおお！」

僕の身体は爆風で吹き飛ばされ、宙を舞う。街の建物もみな薙ぎ倒されていった。

僕の背中に激痛が走った。石畳の地面に叩き付けられたのだ。

「いたたあ……。みんなー大丈夫？」

僕は身体を起こすと辺りを見回した。街は瓦礫だらけで、原形を留めた建物は遠くにしか見ることができない。

「大丈夫なの……」

ナルが瓦礫の中から現れる。その身体は誇りだらけになっていた。

「私も大丈夫だ」

咲はもうすでに立っていた。そして樹のあったところを見据えている。その目はどこか空虚であった。

「あれ、師匠は？」

ナルが不安げに言い出した。確かに師匠がいない。まさか……。いやそんなはずはない。師匠は最強の魔法使いなんだからあれぐら

いで……。

「ここよ。ほらここよ、よく見なさい!」

師匠の声が聞こえた。僕は慌てて声のした方へと向かう。数百メートルはあるつかというクレーターの中で師匠が叫んでいた。

「助けて、出られないのよ!」

深いクレーターに師匠の声が響く。その声は元気そうだ。

ナルが光の魔法を使い、クレーターの底を照らす。師匠の姿が煌々と照らし出された。ローブが破れ、顔にも切り傷が出来ているが、大きな怪我などはしていないようだ。

「今すぐ助けに行きますよー。少し待ってて下さい」

咲はそう言って暗い闇の底へと潜って行く。

「やれやれ、まさか私が自分の魔法の巻き添えを喰らう日が来るとはね……」

咲に支えられてクレーターから出てきた師匠は、そういうと横たわった。魔力を使い過ぎてつらいのだろう。

「師匠、今僕の魔力を分けますからね」

僕は師匠の手を握り魔力を注ぐ。師匠の息はかなり荒かった。さっき叫んでいたのもかなり無理をしていたようだ。

「私も手伝うの」

ナルも反対側の手を握った。魔力が師匠の身体を満たしていく。少し回復した師匠は立ち上がった。さらにローブの埃をパタツと払う。

「ふう、ありがとね。少し良くなったわ」

師匠はそういうとクレーターの中心を睨んだ。その顔は猛禽のように鋭い。

「エルストイ……。本当に恐ろしい敵だったわね」

感慨深げにつぶやく師匠にみんな同感だった。師匠はしばらく黙り込む。

ゆったりと長い時が流れていく。

「さて、行くわよ。ここにいつまでいてもかわらないわ」

師匠はそういうと颯爽と歩き出した。僕らもその後に続いて歩き始める。

クレーターの姿が夜の闇に消えた頃だった。背中に殺気を感じた。冷たく、刺すようで極めて邪悪な殺気。僕らは恐怖で足を止める。

「お、おい白河……。この殺気は……」

咲が顔を硬直させて言う。ありえないと僕も思った。だが……。

「ふふふ……。我々魔族は不死身なのだよ。ましてやこのエルストイはな……」

地獄の底から聞こえてくるような声がした。僕らは絶望に包まれる。そしてゆっくりと後ろを向いた。

そこには変わり果てたエルストイが立っていた。その黒い翼は羽根が無くなり、骨だけ。身体も焼け焦げ、皮膚はケロイド状になっている。さらに全身から紫色の血液がとめどなく溢れて、彼が歩く度地面を濡らす。

しかし、そのような姿に成り果てても異様な存在感と確かな力を感じられた。

「ま、魔力もう残ってないの……！」

ナルが涙目でこっちを見てきた。鮮明な恐怖の表情だ。

「僕も師匠に分けたからあんまり残ってないよ……」

僕がそういったところで師匠が吐き捨てるように言った。

「なんて生命力よ！ もう魔力も残ってないしおしまいね！」

師匠はそう言うと言ったようにその場で杖を置いた。

そんな中、戦闘意欲を燃やすものがいた。咲だ。

「貴様あ！ 私が倒してやる」

咲が半ば狂ってしまったかのような勢いでエルストイに斬りかかった。だが刀の振りは大振りで隙だらけだ。それをエルストイは爪でいとも簡単に受け止めてしまった。

「死にたいらしいな。だったら、一番最後に殺してやろう。せいぜ

い死の恐怖に震えているのだな」

エルストイは気合いを入れ、爪に力を込める。咲は弾き飛ばされ、瓦礫の山に突っ込んだ。

「咲い！」

僕の叫びに咲は力無く頷く。まだ生きているようだ。

そうホツとしたのも束の間、エルストイはこちらに向かってその歩を進めていた。

「まずはロープの娘からだ。喜べ、ゆつくり死なせてやろう」

エルストイはまず最初にナルに狙いを定めた。ナルは逃げようとするが、腰が抜けてしまつて動けない。師匠がナルを庇つてエルストイの前に立ちはだかる。だが、エルストイは師匠を軽く払いのけた。そしてまたナルに向かって悠然と歩く。

「そう逃げるでない」

エルストイは逃げようとするナルのロープの端を掴み、さらに杖を取り上げた。エルストイの顔が歪んだ笑みを浮かべる。

「さて、どこから斬るとしようか。手かな、足かなそれとも腹からかな？」

ナルは恐怖で涙を流しながら叫び続けた。しかし、この魔族に對してはそんな叫びなど喜ばせるだけのものだった。

「恐怖の叫びと言うのは実に良い。心が満たされるようだ。さあも

つと叫べ！」

エルストイは爪を振り上げる。僕はようやく恐怖ですくんだ身体を動かし、ナルを助けに向かった。

「なっ！」

僕がエルストイの後ろから放った杖の一撃はあろうことが、骨だけの翼で止められた。そして攻撃を受け止めたエルストイは、つまらなさそうに腕で僕を投げ飛ばす。

「ナル、ごめんよ……。助けられそうにない……」

僕に力があればエルストイを倒してナルを助けられるのに……。悔しい、ただただ悔しい。薄れゆく意識の中で僕はそのことだけを考えていた。

遠くから暖かい力を感じた。そこで、僕の意識は途絶えてしまった。

第二十九話 恐怖の叫びと魔族の笑み（後書き）

感想・評価をお願いします！

第三十話 新たな旅！ 目的地は伝説の地（前書き）

ようやく一区切りです。長かった……。

第三十話 新たな旅！ 目的地は伝説の地

第三十話 新たな旅！ 目的地は伝説の地

「うう……」

目に白い天井が飛び込んだ。どこだ……。僕はまだはつきりしない意識を、無理矢理に覚醒させて起きる。僕はベッドに寝かせられていたようだ。

あれ、確か僕はエルストイに倒されたんじゃ……。僕は疑問に思い、周囲を見回す。僕のいる部屋は白を基調とした造りで、そこに落ち着いた色合いの高そうな調度品が置かれていた。ここは病院だろうか？ だが病院にしては調度品がずいぶん豪華だ。それにだいたいこの世界に病院があるのだろうか？

僕の疑問が深まったところでドアが開かれた。スフィアが部屋に入ってくる。

「白河、目が覚めたのか！ 心配したんだぞ！」

そういつてスフィアは僕に抱き着いてきた。僕はスフィアをしっかり抱き留める。そしてスフィアに疑問に思ったことを質問した。

「スフィア、ここはどこ？ エルストイはどうなったのさ？」

僕の質問にスフィアは知らないんだっとな、というと答えてくれた。

「ここは城の中だ。そして……エルストイは勇者に倒された」

そうか、勇者が倒したのか……。僕は悔しいような、ほつとしたような感情に包まれた。もし、もっと僕に力があつたら……。力が欲しい、もっと強くなりたい、そしてみんなを守りたい！ まったく子供のような考えだが、僕は純粋にそう思った。

「ど、どうした？ 急に叫んだりして。まさかおかしくなつたんじやないよな！」

「大丈夫、大丈夫！ 気にしないで」

感情が高ぶるあまり叫んでしまったようだ。なんて恥ずかしいんだ……。

僕が顔を赤面させていると、部屋に他の仲間たちも入ってきた。ナル、咲、師匠、博士だ。みんな一応元気そうだ。

「やっと目覚めたようね。よしよし、大分回復してるようだし明日には動けるようになりそうね」

師匠は僕の様子を見て言った。どれくらい寝ていたのかは知らないが、目覚めた翌日に動けるとはさすが魔法だ。回復がなんとも早い。

「これお見舞いな。たくさん食べて」

「この果物はナルと一緒に街の市場で買って来たんだ。全部食べるんだぞ。白河には健康でいてもらわないといけないからな」

ナルと咲がメロンのような果物を一緒にベッドの脇のテーブルに置いた。メロンのような色と形をしているが、大きさがスイカ並だ。食べられるかな……？

「そうか、それなら私がこれを白河に食べさせてあげよう」

スフィアがスイカメロン？ を切り分けて、僕に差し出した。まさにあーんという感じだ。嫌ではない、嫌ではないんだけど、恥ずかしいよ！ 僕がスフィアに自分で食べると言おうとしたら、スフィアがナルと咲に睨みつけられていた。

「抜けがけはダメ」

「そうだ、そういうのは白河の家来の私の仕事だ」

三人は競うようにスイカメロンを僕に差し出してくる。そんなに食べられないよ！ 僕は助けを求めて師匠を見た。

「モテる男はつらいわねえ」

やっぱりそう来るか！ 師匠はこういう時あてにならないんだから！ しかたない、多分ダメだろうけど博士に頼みますか。

「なんだ、助けて欲しいそうな目をして。その果物が嫌なのか？でも好き嫌いはいかんぞ。たくさん食べんと強くはなれんからな」

たくさん食べて強くなるってグ○コじゃないんだから。やはり博士に空気を読んでもらうのは無理だったか……。

「どうしたの？ 早く食べる」

「そうだ、そうだ。これが腐ったらどうする」

「まったく……早く食べなさい」

三人が一気に迫ってきた。もうやけど、全部まとめて食べてやる！

その後、無理に全部食べた僕は腹痛を起こしたことは言うまでもない。

翌朝、僕らは城の食堂で朝食を取っていた。王様の利用する食堂ではなく、兵士などの使う食堂でだ。ちょうど、食事どきのためか、その広い食堂は混み合っていた。

「白河も動けるようになったし、勇者と王様に挨拶を済ませたら今日うちに城を出てもらうわ」

出てもらう？ 僕は師匠の言葉に違和感を覚えた。

「出てもらうってまるで城の人が言うようですね」

となりにいたスフィアが師匠に言う。師匠は苦みばしった顔をする話を始めた。

「実は私ね、勇者一行に加わることになったの。だから城に残るのよ。本当は断るつもりだったんだけどね……」

師匠は沈黙した。弟子をほったらかし出すようなことなので心苦しいのだろう。僕もできることなら別れたくはない……。

「師匠、お別れは嫌なの！」

ナルが師匠にしがみついた。師匠はナルの頭を優しく撫でる。

「ごめんなさい、でももう会えないって訳じゃないわ。魔王を倒したらまたいくらでも会えるから」

師匠の言葉に咲が不安げな顔をした。そして師匠に弱々しい声で尋ねる。

「しかし、魔族の強さは異常です。勇者とあなたが一緒とは言え、本当に魔王を倒せるんですか？」

師匠はまっすぐな目で咲を見た。咲は思わず息を飲む。そして師匠は質問に答えた。

「魔族の強さも異常なら勇者の強さも異常だったわ。みんなより一足先に会ったんだけど、本当に気迫がすごかった。彼だけでも魔王を倒せそうなほどだったわ。ただね……」

師匠はそう言って言葉に詰まった。僕は師匠の顔を覗き込む。師匠は言葉をぼつりぼつりと話を再開した。

「なんて言ったら良いのかしら……。違和感と言つか拒否感と言つか……。とにかくの気配がおかしいのよ。どうにも」

師匠はそこで深呼吸をした。そして大きな声で僕らの名前を呼ぶ。

「だから白河、ナル、咲、スフィア！ あなたたち四人にはあるお方のもとで修行を積んでもらうわよ。今のままの強さでは何かあった時に困ってしまうから」

師匠の宣言にスフィアが困惑したような顔をした。

「もう気づいていると思うけれど……。私は精霊よ。だから修行しても……」

スフィアの指摘に師匠はチツチと指を振った。問題ないということだろうか？

「大丈夫、あのお方、オルガ様なら精霊の力も引き出せるから」

オルガ様という言葉が出た途端、博士と僕以外の場の空気が凍った。

「どうした、寒いのか？」

博士にツツコミをする者すらない。なんだろうオルガ様って。そんなにすごいのかな？

「オルガ様ってあの空中に住んでおられるというあのオルガ様なの？」

ナルが師匠に向かって言った。不思議な緊張感が僕らの周りを包んでいく。

「ええそつよ」

「そんな、あれは伝説ではないのか？」

何事もないかのように師匠は言っただけだ。それに咲が驚きの

声を上げる。驚きのあまり敬語も崩れていた。

「伝説じゃないわ。私は実際にオルガ様の元で修行したんだから」

「えええええー！」

師匠の言葉に咲たち三人は凄まじい叫びを上げた。周りにいた他の食堂の利用者たちもこちらを見てくる。

「うるさいのう。そのオルガとか言うやつはそんなにすごいのか？」

いつのまにか話題を掴んでいた博士が耳を抑えながら聞いた。博士と同じく知らない僕も聞き耳を立てる。

「オルガ様というのは神様にこの地上を任された仙人様だ。この世界で神様の次に偉いとされているんだぞ！」

咲がかなりの剣幕で博士に怒鳴った。博士も咲のあまりの迫力にたじろぐ。

「しかしオルガ様はどこにいらっしゃるのだ？ 精霊の私でも会いたことがないのだが」

師匠はスフィアの質問に唸った。あれ、わからないの？

「わからないわ。オルガ様のおられる浮島は常にあちこち漂っているのだもの。だから世界中を探し回る必要があるわ。そうとわかつたら勇者に挨拶してさっさと出発なさい！ 時間はないのよ！」

「ふむ、ならわしはクレナリオンの残骸を分析することにしよう。」

ほれ、これを持っていけ。通信機だ。これさえあれば世界中どこに居ても連絡を取れるぞ」

博士は携帯のような物をみんなに手渡した。説明書のような物もついている。みんなに対する配慮だろう。なかなか博士にしては気がきいている。

「それじゃあ、勇者と王様に挨拶をしてきますね。行ってきます！」

僕はそういつて師匠と博士に手を振った。師匠たちも振り返してくる。

こうしてオルガ様の浮島を目指した僕らの長い旅が始まろうとしていた……。

第三十話 新たな旅！ 目的地は伝説の地（後書き）

実は今回が過去最長です。読んでくださってありがとうございます！

第三十一話 勇者と聖剣（前書き）

今回は会話文やや多めです

第三十一話 勇者と聖剣

第三十一話 勇者と聖剣

「こちらがわが王と勇者様のおられる玉座の間です。くれぐれ王の前で粗相のないようお願いします。それでは準備はよろしいですね？」

僕は近衛兵に案内されて玉座の間の前に来ていた。重厚で大きな扉や深紅の絨毯が敷き詰められた廊下にはいかにもといった風格があつた。僕はその雰囲気にもれそうになりながらも近衛兵に頷いた。扉が重々しい音を立てて開かれていく。

「おお……」

僕は思わず息を飲んだ。贅を凝らした室内は広々としており、金に輝く装飾品があちらこちらで輝いている。だが決して成金趣味というようなけばしさはなく、むしろ気品に溢れていた。さすがは王様の城といったところか。なんともはや芸術的なその室内の奥に燦然と輝く玉座があつた。その上に王様と思わせる壮年の男性が腰掛けている。さらに、その脇には勇者と思しき青年と大臣らしき中年の男の姿もあつた。

「そなたたちがこの間の戦士たちか。苦しゅうない、ちこうよれ」

王様は立派な髭を撫でながらそう言った。全身から武人とはまた違った覇気が発せられている。指導者のオーラとはまさしくこういうものを指すのだろう。

僕は緊張に身体を硬くしながらゆっくり王様の方に歩いて行

った。

「ふむ、余がこのダタールの王、カイザルである。そなたたちのこの度の働き、まことに大儀であった」

エルストイにとどめを刺したのとかほとんどそっちの勇者ですからね……。僕は王様のお褒めの言葉に少しだけ戸惑った。

「いえいえ、そちらにいらっしゃる勇者様のおかげです」

僕がそういつと勇者がこちらを見てきた。なんだ、この見透かされるような感覚は……。そして無理矢理何かを隠しているように見えるその瞳は一体……。白銀の甲冑を纏い、聖剣を背負うその勇ましい姿はまさに勇者そのもの。なのにどうして気配が……。あのエルストイに似ているんだ……？

勇者はそんな僕の渦巻く感情を無視するかのように王様と話を始めた。

「王よ、あのエルストイとか言う魔族を倒せたのは彼らのおかげさ。何か褒美をあげたらどうだい？」

「そうか。ならば何か与えるでしょう。ほれ、何か望みのものがあるならば言ってみよ」

王様に言われて、ようやく僕は思考を回復した。それから褒美にもらう物を考えるがすぐに思いつかない。やっぱりこういうことは話し合った方が良さだろう。そう思った僕はみんなに意見を求めることにした。王様に許可を取るとみんなで話し合う。

「みんな何か欲しい物ある？」

「うーん、私は特にないな。まあ強いて言うなら刀だ」

「私も特にない。白河の好きな物をもらえばいいと思うな」

「そうね、旅に出るための馬車をもらうといいと思うの。これから買わなくて済むもの」

ナルの馬車を採用だな。咲の刀もいいけれど、この国にあるのかわからないからね。

「王様、馬車を頂きたいと思います。それで良いでしょうか」

「良かるう。その大臣に手配させるゆえ、どのような物が良いか大臣と話し合うと良い」

「ありがとうございます、王様」

「いやいや、王として街を救った者にたいする最低限の礼をしたまでだ。では達者で旅をするが良い」

王様が話を終えると大臣が僕らの方に来た。そして扉の方に移動して手招きをする。ついてこいと言うことなのだろうか。僕らは大臣に続いて玉座の間を後にした。

「ねえナル、さっきの勇者ってエルストイみたいな気配がなかった？」

僕は城の廊下を歩いている途中、小声で隣を歩くナルに聞いた。
ナルは僕により近づいて言う。

「確かに似ていたの。でも勇者が魔族というのはありえない」

「どうして？」

僕はすぐ、ナルにオウムのように聞き返した。ナルは小さな声で僕に耳打ちする。

「勇者は聖剣を背中に背負っていた。あんなこと魔族にはできないもの」

聖剣つてエルストイと戦ったときにも良く出てきたけどそんなにすごいのか？

「聖剣つてどんな剣なの？僕は知らないんだけど」

「聖剣とは初代ダータル皇帝にして初代勇者のプレスデンが手に入れた神の力を分け与えられた剣。魔族に対して絶対的な力を持つ。だから魔族は剣に近づくことすら避けるわ。ましてそれを背中に背負うなんてありえないの」

なるほど、そうだったのか。なら勇者は白かな……。あれれ、ナルのセリフ今おかしかったような？

「今初代皇帝って言わなかった？」

「ええ言ったの」

「ならなんでさっきの王様は王様なんだ？ 帝国なんだし皇帝じゃないのか？」

「それはね初代しか皇帝と名乗ることを許されていないからなの。だから他の人は王と名乗るの」

なるほどなるほど、そういうことだったのか。僕がそう納得したところで、僕らは城の庭まで着いた。大臣が庭の端にある馬小屋の前に立つ。

「好きな馬を二頭選びなさい。私はその間に車の方の手配をして来よう」

大臣はそういうと居なくなってしまった。僕らは馬を選び出すことにする。

「この馬なんて良さそうだな。大きいし毛並みもいいぞ」

咲が一頭の馬に目をつけた。咲の言うように黒々とした毛並みの美しい大きな馬だ。

「私はこの馬がいいと思うぞ。生き生きしている」

スフィアも一頭選び出してきた。こちら黒い大きな馬だった。この二頭で決定かな。僕は一応ナルにも聞いてみたが、ナルは馬には興味がないということだった。そうしている間に、大臣が兵士と車を伴って庭に現れる。

「ほほう、良い馬を選びましたな。私も乗馬はしますがこれはなかなかですぞ。長旅も大丈夫でしょうな。さて、車の方を用意して

きたがこれでよろしいかな？ 確かめて欲しいのだが」

大臣はそういうと車を指し示す。幌の張られた丈夫そうな車だった。実用性を重視したのだろう。僕は言われたように車を隅々まで確認をしたがどこにも問題はなかった。

「大丈夫です。ありがとうございました！」

僕がそういうとみんなも頭を下げる。大臣は照れ臭そうに顔を赤くした。

そのあと、僕は車に馬をつけて、いよいよ城から旅立っていく。

「さてと、まずはどこに行こうか？」

「そうだな……。まずは竜の山なんてどうだろう？ 浮島に行くためには空を飛ぶ乗り物があるだろうからな」

城の門をくぐったところで僕は目的地をみんなに聞いた。その質問に咲が地図を見て答える。咲の意見にみんな賛成のようだった。竜の山……。どんなところだろうか。僕らの旅は今、始まったばかりであった……。

第三十一話 勇者と聖剣（後書き）

感想・評価をお願いします！

第三十二話 リンドン再び！

第三十二話 リンドン再び！

僕は竜の山を目指して一路、帝都ハミヴァイから南に向かっていた。草原に囲まれた街道を馬車で駆け抜ける。

「そろそろ補給が必要だな。でも路銀が少々心許ないし……うむむ……」

咲がそろばん片手に帳簿とにらめっこしている。そろばんが得意だ、と言った彼女が今のパーティーの家計を担っているのだ。

「ずいぶん早くないか？ この前街によってから一週間も経ってないよ」

僕は咲の言葉に疑問を感じて質問した。確か街によった時に、二週間分ぐらいの食料を買ったと言ってたような気がする。ならまだ大丈夫じゃないのか？

「そこで本読んでるのがたくさん食べたからな。もう残り少ないんだ」

咲は魔導書を読み耽っていたナルをじいつと睨む。ナルは睨む咲を無視するかのように本を読み続けた。どうやら本に夢中のだ。

「ナルは育ち盛りなんじゃないのかな？」

僕はナルを見て、食事の度に皿の山を作る姿を思い出した。でもそれは大きくなるためなんだろうから仕方ないんじゃないのかな。

「そういうレベルじゃないと思うのだが……。それにナルは十七才だからもう成長期じゃないぞ」

えっ……ナルってそんな歳だったの？ 今日初めて知ったよ！
てつきり十五才ぐらいだと思ってたのに……。
そいして僕が驚いていると外から声が聞こえた。

「おーい、街が見えて来たぞー！」

御者席で馬を操っていたスフィアの声だ。彼女は精霊さんであるためか動物を扱うのが上手かったのだ。そんなスフィアの叫びによって僕らは馬車から身を乗り出す。僕の目の前には懐かしい街があった。森と草原の間ぐらにある壁に囲まれた美しい街。そう、僕がこの世界で最初に来た街、リンドンである。

「もうすぐ街に着くから荷物をまとめなさいよ」

スフィアが外からお姉さんぶって言った。実際彼女が一番年上なんだけどね。その言葉を聞いた咲が手早く荷物をまとめ始める。

「まだ途中なの！」

いきなり咲がナルの本を取り上げてかばんにしまった。ナルは頬をぷつと膨らませて咲を見る。咲は見事にそれをスルーすると荷造りを終えた。そしてみんなに話を始める。

「さて、荷造りも出来たし、これからどうする？ 買い出しに行く

ことは決定しているが」

「なら僕はみんなが買い物している間に冒険組合に依頼を受けに行こう。路銀も少なくなってきたことだし」

女の子の買い物は長いから。暇なその間に僕は稼いでおいた方が良いでしょう。

「一人だけでは危ないな。家来の私もついて行くぞ」

「咲だけはダメ。私も行くの」

「それなら私も行かせてもらおうかな」

僕に誰がついていくのかで三人は睨み合いを始めた。眼光の鋭さが異常だ。いつ喧嘩に発展してもおかしくない。僕はとりあえず三人を仲裁することにした。

「まあまあ、みんなで一緒に行けばいいんだよ。ね、そうしようよ」

三人はしばし考えたがそれぞれ答えを返して来てくれた。

「白河がそういうのなら従おう……」

「しかたないの。一時休戦」

「私もそうしようか」

三人は何とか納得したようだ。こうして僕ら四人で依頼を受けに出かけることになった。

「こんにちは。久しぶりだね」

僕は冒険組合の建物に入ると、さつそく受付のリーナに挨拶をした。リーナは僕らの方を見るとすぐに笑顔になる。

「白河さん！ 心配してましたよ！ ダタールで大変な事件があったそうですね！ 巻き込まれませんでしたか？」

僕らはむしろ巻き込む側でした……。そう思ったが黙っておこう。もし前みたいに気絶されたりしたら困るから。

「大丈夫だったよ。はは……。それより依頼ないかな？ 今旅をしてるのだけど、路銀があと少ししかないんだ」

リーナは僕がさういうと後ろにいるナルと睨を見た。

「依頼ですか？ それはもちろんありますけど……。そんなことよりさつきから気になってたのですけど、もしかして後ろの人は白河さんの仲間ですか？」

リーナに尋ねられた二人は自己紹介を始めた。

「私はナル。白河の嫁よ」

「い、今のナルの嫁発言は嘘だからな！ 私は咲、白河に仕える家来だ。これは本当だぞ！」

リーナは二人の自己紹介を聞くと急ににやけだした。近所のおばあちゃんみたいな顔だ。

「白河さん、モテますねえ。うらやましいですよ。ふふふ」

リーナさんの目が僕を全力でからかうといていた。これは早く何とかしないとややこしいことになるぞ！

「それはいいから……。依頼を見せてくれないかな？」

「ノリが悪いですよ。でもそれが白河さんらしいですね。ちょっと待っててくださいね。すぐ依頼書持ってきますから」

リーナはカウンターの中から紙の束を取り出した。それをざっと広げて目を通していく。そしてある依頼書を取り出した。

「これなんてどうですか？ 最近入った依頼なんですけど、引き受けてくれる冒険者の人がいなくて困ってたんです。Cランクの依頼ですけど、割はいいですよ。どうですか？」

訳ありの依頼なのだろうか。気になったので読んで見ることにする。

「見せてみて。読むだけ読んでみるから」

「あれ、白河さん文字読めましたっけ？」

リーナが疑問を口にした。そういえばそうだった。博士の発明で読み書きできるようになったから忘れてたよ。

「練習して読めるようになったんだ」

無難な嘘をついておくことにした。リーナは何の疑いもなく信用してくれた。

「そうですか。ならどうぞ」

僕はリーナから渡された依頼書を読んだ。

『森に現れる怪しい団体を調査してください。報酬は二十万ルーツ』
よくわからないことの多い依頼だ。怪しい団体って何なんだ。わからないから調査依頼が来るのだろうけど……。僕一人では決めかねたので、みんなにも見せた。

「私はこう見えてSランクの冒険者だ。問題ない！」

咲が任せておけと言わんばかりに胸を張る。咲ってSランクだったんだ。咲ぐらい強いなら当然かもしれないけど。だがそれにナルがつつこんだ。

「Cランクの白河に負けたけどね」

ナルのつつこみに咲は言い返すことができない。咲の顔がくやしのか赤くなる。

「むう……。そんなことナルに関係ない！ 白河、その依頼受けるぞ。スフィアもそれでいいな？」

スフィアは咲の迫力に押されて無言で何度も頷いた。その顔は

微妙に引き攣っている。咲の前であの試合の話題は禁止しなきゃいけないようだ……。

「じ、じゃあ受けることにするよ」

僕はリーナに依頼書を返した。リーナは苦笑いしながら依頼書を受け取る。依頼成立だ。こうして僕らは森で”怪しい団体”とやらいつのを調査することになったのだった。

第三十二話 リンドン再び！（後書き）

感想・評価をお願いします。

第三十三話 謎の集団来襲！（前書き）

ようやく主人公が主人公らしくなってきたような気がします……。

第三十三話 謎の集団来襲！

第三十三話 謎の集団来襲！

僕らは”怪しい団体”を調査するためリンドン南の森に来ていた。森の中は薄暗く、じっとりしている。僕は辺りを魔力使って探索していたがそれらしき反応はない。

「とりあえず今はこのあたりに誰もいないようだ……。ふう、疲れた。一旦休まないか？ 神経を張り詰めているから疲れてかなわん」

咲が疲れたのかみんなに提案した。咲は魔力がない代わりに気というものを使える。その気を使って咲は森を探索しているのだが、それは魔力を使うより疲れるらしい。

「わかった。なら開けたところで休もうか」

僕の言葉にみんな賛成のようで、僕らは移動を始めた。この森に詳しいスフィアの案内で少し歩いていく。視界が急に開けた。巨木の群れがなくなり、小さな広場になっている。

「ここって……」

「どうしたの？ 気分が悪いの？」

ナルが言葉を失っている僕を見て声をかけてくる。僕は当たり前障りのない返事をする、また物思いに耽った。僕はこの広場に見覚えがあった。僕がこの世界に降り立った場所だったのだ。

「まったく懐かしいなあ、白河」

スフィアが僕の耳元で囁いた。僕は無言で頷く。その様子を咲とナルは奇妙な目で見ていたが、何も言わなかった。

「そろそろお昼。休憩するついでにお弁当食べたいの」

「もうそんな時間か？　ならお昼にするとするか」

「そうだね。食べましょうか」

咲とスフィアもナルに賛成した。咲が背中の風呂敷からお弁当箱を出した。僕らはなごやかな雰囲気になる。僕は弁当箱の中からサンドイッチのような物を取り出して頬張る。うーん、おいしい！ スフィアの作った物だが最高！　フワフワな卵が絶妙だ。僕はほとんど手を伸ばして食べる。弁当箱はあっという間にからっぽになった。

「おいしかったー！　スフィアありがとう」

僕は腹をさすりながらスフィアを褒める。スフィアは頬を赤くした。

「練習したからな、当然だ」

スフィアは照れ臭いのか、小声で言った。その様子を見ていたナルと咲が膨れる。

「料理なら私も……たぶんできるの」

「私だってそれなりには……」

二人はそう言ったところで沈黙する。それを勝ち誇るような顔でスフィアが見ていた。やれやれ、喧嘩はダメだと言ってるのに。

「三人とも喧嘩しちゃダメだよ。ちゃんと仲良くしなくちゃ……うぬ？」

僕は殺気に気がついた。みんなも気づいたようで、急いで僕らは探索する。気配が十、こっちに向かってくる。かなりの速さ。隊列を組んだその動きは間違いなく人間だった。

僕らはそれぞれ武器を構える。僕とナルが杖、咲が刀、スフィアが大剣だ。

ガサガサと木の枝が揺れた。十の人影が僕らを取り囲むように地面に降りる。人影は黒づくめの格好をしている。地球の特殊部隊が着るような装甲だ。どう見てもまともな連中じゃない……。

「ついに見つけたぞ！ さあ無の精霊よ、我々と来るのだ！」

先頭の黒装甲の男が興奮したように叫んだ。さらにスフィアに向かって手を伸ばす。

「何をするんだ！ 貴様ら何者だ！」

スフィアは黒装甲の手を払い退けると苛立ちをあらわにして言い放つ。黒装甲は後ろに下がったがスフィアに向かって殺気を放つ。

「興奮するな。我々はお前の価値の理解者だ。さあ来い、来るのだ！」

黒装甲はスフィアの言葉に聞く耳をもたない。さらに強引にスフィアの手を掴みとる。くそ、見てられない

「やめろ！ 離せ！」

僕は黒装甲たちの前に立ちはだかる。そして黒装甲の手を強くはたきつけた。よろけた黒装甲は後ろに下がる。

「白河……」

スフィアが潤んだ瞳で僕を見てくる。何だかとても照れ臭いや……。

「スフィアは大切な友達だからね。あんな得体の知れない連中には渡さないよ」

「友達というのが気になるけど……ありがとう」

柄にもなく格好つけたことを言ってしまった。スフィアがさらに赤くなっていく。そこで黒装甲が馬鹿笑いを始めた。

「あはははあ！ 笑わせてくれるなあ。エネルギーレベル10程度の一般人のくせに邪魔するつもりか？」

エネルギーレベル？ 強さを表すのだろうか。それにしても一般人か。一応それなりには僕も強くなったと思うのだけだね……。

「もちろん！」

僕は黒装甲を睨みつけて言い切る。それに続いて僕の後ろからも声がした。

「私たちも忘れるなよ！」

「スフィアは行かせない。彼女を倒すのは私だけだもの」

ナルと咲が力強く言う。そして、二人は魔力や気を高め始めた。僕も負けじと魔力を高める。膨大な魔力が全身を満たしていく。溢れんばかりの力が森の木々を揺らした。

「た、隊長！ そいつらのエナジーレベルが急上昇していきます！ 何てことだ信じられない！ 12000を突破しました！」

腕時計のような物を見ていた黒装甲が悲鳴を上げた。ほかの黒装甲も後ろに向かって後ずさる。

「うろたえるな！ ドクターソノラ様は無の精霊を待ち焦がれておられる。何がなんでも連れていくんだ！ 行くぞ！」

こうして謎の集団と僕らの戦いの火蓋が切って落とされたのだ。……。

第三十三話 謎の集団来襲！（後書き）

感想・評価を待ってます！

第三十四話 新たなる敵、その名はアルカデ！

第三十四話 新たなる敵、その名はアルカデ！

森の広場で僕らは謎の集団と睨み合っていた。敵はかなりの熟練者のようで、なかなか攻撃をしてこない。シンッと静まりかえった空気が辺りを包んだ。互いの息遣いさえ聞こえる。その静寂はしばらく続いたあと、黒い装甲を着た敵によって破られた。

「そりゃあ！」

気合いと共に敵は一斉に攻撃を仕掛けてきた。怪しく光る剣が二振り、僕に向かって振り落ろされる。僕はその剣を杖で受け止めた。激しい火花が飛び散り、ギィっと言う耳障りな金属音がした。さらに手に微妙な振動が伝わってくる。嫌な気がした僕は魔力を腕に集めて、強引に剣を弾き返す。後ろから気配を感じた。杖を後ろに向かって突き出す。杖は後ろに回り込んでいた敵に命中した。敵の硬い装甲の隙間に杖が入る。

「うがぁ！」

敵は聞くに堪えない呻き声を出した。そして、その身体は地面に崩れ落ちていく。

「ちっ、やはりエナジーレベルが高いただけあって強いな！」

僕の前にはいた敵が倒された仲間を見て舌打ちをした。さらにそいつは周りを見回して後ろに数歩下がる。僕も周りを見てみると、咲たちはすでに残りの敵を倒していた。

「残りは二人だけ。さあどうする？」

僕は目の前にいる隊長とか呼ばれていた奴に聞いてみた。もしここで降伏するなら痛み付けるつもりはない。

「仕方あるまい。撤退だ！」

隊長らしき奴は味方一人を引き連れてその場からすばやく逃げ出した。僕は魔法を使い、二人の足を凍らせる。二人は派手に転倒する。だが、二人は手を上手く使いほく前進で逃げていく。でも当然ゆっくりなので僕らはすぐに追いついた。

「逃げられないぞ。お前たちは一体何者なんだ？」

咲が刀を突き付けて二人を問いただした。しかし二人は沈黙して何も話そうとはしない。

「魔法を使えばあなたたちを自白させることは簡単。ただし、それをするとは精神は確実に壊れる。それでも話したくないの？」

今度はナルが凄みを効かせて言う。二人は若干動揺し始めた。顔色が悪くなり、小刻みに震える。

「わかった。話してやる」

ナルの脅しに堪えかねた隊長の方がそう言った。そしてぽつぽつと長い話を始める。

「我々はドクターソノラ様の率いる結社アルカデに所属している特

殊部隊だ。ちなみに俺が隊長。そして今回は任務でそこにいる精霊をさらにこの森に来た」

「アルカデ……。古代の国の名前か」

僕はアルカデという名前に聞き覚えがあった。確か、数万年前に滅びた伝説の古代国家だとか座学の時間に師匠が言っていた。

「そうだ。よく知っているな。我々の目的は古代国家の復活。それを成し遂げるために日夜様々な活動を水面下でしているのだ」

男は誇らしげに言う。自分たちの理想が正しいと思っているからだろう。まったく良い迷惑な連中だ。

「そうだとして、なぜ私を捕まえる必要があった？ 私はそれほど強い精霊でもないし……」

スフィアが男に向かって尋ねる。まったくにその通りだ。スフィアをさらうより貴族の令嬢でもさらった方が利益になるだろう。

「それに関しては俺は良く知らん。何でも魔族に対抗する兵器の鍵になる存在だから連れて来いと命令されただけだ」

「なるほど。ではさっき言ってた無の精霊というのは何なのだ？ よくわからないのだが」

咲が男に向かって問い掛ける。すると何故かスフィアが顔を赤くして答えた。

「それは私が答える。その、すごく恥ずかしいことだが……私は属

性なしの精霊。だから無の精霊なんだ」

無属性だから無の精霊なのか。なるほど結構単純だ。僕がのんきにそう思っていると、咲とナルが目我真ん丸にして驚いていた。

「無属性の精霊なんているんだな。初めて聞いた」

「私も。やたら力持ちだから地属性だとずっと思ってたの」

ふむふむ、無属性というのは珍しいようだ。そう思った僕はスフィアの顔を覗き込む。

「や、やめてくれ。そんなに見られると恥ずかしい」

スフィアが慌てて後ろに飛びのく。それを咲とナルは呆れたように見た。

「はあ、今はそんな場合じゃないぞ。おい、他には知らないのか？」

咲が再び男への尋問を再開する。すると男は狂ったように笑い始めた。おかしくなってしまったのか……？ 僕らがそう思ったところで男は笑うのをやめて話しはじめる。

「ははは、もう知っていることなどほとんどない。我々など下っ端も良いところなんだからな。ふふ、お前たちと楽しく話している間に本部に通信が取れた。おめでとう、晴れてお前たちはアルカデの敵になった。せいぜい気をつけることだな。幹部や精鋭、さらにドクターソノラ様は恐ろしいぞ。ふはははあ！」

隊長の男とその後ろにいた奴は装甲の隙間から試験管のような

ものを取り出した。なかには蠱惑的な緑色の液体が入っている。それを男たちは一気に飲み干した。男たちの身体から湯気が溢れでて、その口からは割れんばかりの叫びが漏れる。装甲から僅かに見える皮膚は赤く爛れて、焼かれたようになってしまった。そして信じられないことに男たちの身体が溶けていく……。

「い、いやあああ！」

ナルが衝撃的な光景に泣き叫ぶ。咲とスフィアも泣きはしないが茫然自失として、言葉を失っていた。その額からは嫌な汗が噴き出している。

「なんて死にかただ……。信じられん、こんなことあって良いのか……」

しばらくして、咲は液体と化した人間だったものを見て小声でつぶやいた。

なぜ、男たちはこんな残酷極まりない死にかたをしなければならなかったのだろう……。他にも死にかたぐらいあるだろうに。

「……多分、魔法使いが死体を調べるのを恐れたから。そうしか考えられないの……」

恐慌状態から回復したナルがそう言った。その通りなのだろう。だがそれにしてもあんまりだ。

長い沈黙の後で、僕らは気絶していた他の敵を魔法で完全に拘束すると、リンドンまで連行していった。そして組合に身柄を預ける。疲れきった僕らはあらゆることを後回しにしてその日は眠りについたのだった。

第三十四話 新たなる敵、その名はアルカデ！（後書き）

感想・評価をお願いします。

第三十五話 渦巻く陰謀（前書き）

今回は悪役サイドの話です。

第三十五話 渦巻く陰謀

第三十五話 渦巻く陰謀

何処とも知れぬ山の中、あらゆるものが凍りつく場所。吹き荒れる吹雪の中、巨大な要塞が佇んでいた。その要塞は山にそうようにして建られていて、高い壁と塔がそびえている。そのいずれも黒くて滑らかな石のような材質で、かなり年月を経ているようだが、傷一つとしてついていない。

その要塞の地下深いところに一人の女がいた。女のいる地下室はほの暗く、中央に水槽がある。水槽には人型の機械が入っていた。西洋甲冑のような形をしたその機械からはコードが無数に伸び、胸部に緑色のクリスタルが嵌めこまれている。クリスタルは怪しく揺らめく光を放っていた。その微かな明かりを女は恍惚とした表情で見ている。長く艶やかな紫の髪を横に流し、潤んだ赤い瞳は穏やかに水槽を見つめる。

「ほう……。後少しだわ……」

すうつとしたの良い唇から吐息が漏れる。官能的なそれは聞くものを魅了する魔力があった。

空気が漏れるような音がした。さらに暗い室内に光が差し込む。女がけだるそうな動きで扉の方を見ると三人の男が立っていた。それぞれ黒い学生服のような軍服とマントを着用している。

「失礼いたします、ドクターソノラ様。緊急事態が発生しましたのでご報告に参りました」

真ん中に立っていた男が恐縮したように話す。女は苛立たしげに

髪をかきあげた。

「報告？ なんなのそれは。早く言いなさい」

ソノラは良く通る高い声で言う。その声には機嫌の悪さがありありと表れていた。男は小さくなりながら報告をする。

「無の精霊の回収に向かっていた第七小隊が壊滅しました」

ソノラの目が細まった。そしてその鋭い眼差しで男を睨みつける。

「全滅ですって？ 原因は？」

「無の精霊を発見した際にその仲間と思われる三人と無の精霊の合戦で四人と交戦。その結果敗北し全滅しました」

ソノラの瞳の色が変わった。赤い瞳が金色に染まる。その髪はにわかに逆立ち、黒紫色の稲妻がスパークした。

「負けた？ 十分な戦力は与えてあるはずだけど」

「は、それが敵の戦力が想定外なほど高くてですね……」

男は言葉に詰まった。さらに男は顔色を悪くする。それをソノラは見逃さなかった。

「言い訳は良い。見苦しいわ」

男の身体が宙に浮かび上がった。男は衿元を苦しげにつかみ、

足をばたつかせる。顔から血の気が引いていき、身体の動きも緩慢になっていった。

「もう良い」

男の身体が解放された。男は床に向かって盛大に尻餅をつく。脇にいた男たちがすぐに彼に駆け寄った。

「ワグナ、アルカデが出来てから何年になる？」

「はあはあ、今年で十五年になります」

ワグナと呼ばれた男は部下に支えられながらもすぐに答えた。息は切れ、顔面蒼白としている。

「そうだワグナ。正確には十五年と二ヶ月と三日だ。これが何を意味するかわかるか？」

ソノラは子供に問い掛けるような口調で尋ねた。聞かれたワグナは答えが分からずに戸惑うものの分からないものは分からない。彼はやむを得ず分からないと答えることにした。

「い、いえ」

「我々がいかに貴重な時間を無駄に使ったかだ！ 我々に与えられている時間は限られている。今しか機会はないのだ、今しかな。それなのに……」

ソノラの顔が憎悪に歪んだ。瞳が再び金を帯びる。

「我々は何の目的も達成できてはいない！　そう何の目的もだ。分かるかワグナ！　私は長い長い冷凍睡眠から目覚めて五十年後、満を待ってこのアルカデを設立した。だがこの様はなんだ。あんな簡単なお使いすらできないとは。私は馬鹿と愚か者は大嫌いだ。……そうだなもし次に私を失望させたら……」

ソノラがワグナの方をキツと睨む。ワグナは心臓をソノラに掴まれたような心地がした。背筋を冷や汗が流れる。

ソノラが黒いエナメル質の手袋をした手を振った。バシャリと水が飛び散るような音がした。

「ぬわああああ！」

ワグナは目に写った衝撃的な”物”に驚愕した。さらに彼は血まみれになっていた自分の身体を見て喉が裂けるほどの悲鳴を上げる。

「そうなるわ。死にたくなかったらせいぜいしっかり働くことね」

ソノラは首から上が消失したワグナの部下とそれを見て狂ったように叫び続けるワグナの姿を見てささやいた。そして妖艶に微笑む。

「ふふ、良い感じよ。もっと見ていたいぐらいだわ。でもそろそろ働いてもらわなくちゃ」

ソノラは手を上に向けた。それに合わせてワグナの身体が直立不動の姿勢を取る。

「ドラグナー王国への侵攻時期を早める。準備しなさい」

ソノラはそつけない態度でそう言った。それを聞いたワグナの顔が露骨に引き攣る。

「む、無理です。あそこは古代竜が守護しております。今の戦力では……」

ワグナは恐怖に怯えながらもソノラの命令を拒否した。しかしそんなことなどソノラには想定済みだ。彼女はワグナに近づき、彼を指差して言う。

「飛行戦艦を使えば良いわ。戦力はこれで足りるはずよ」

「飛行戦艦ですか？ あれは発掘は出来たのですが復旧に手間取っております。使うには後一ヶ月は見ていただかないといけません」

「なら一週間でなんとかしなさい。完璧でなくてもいいから一週間よ。最近魔族も騒がしくなってきたし、いよいよ時間がないから」

ソノラはそういうと部屋の中央に戻った。そしてさらにワグナに告げる。

「もし、死にたくないのなら確実に一週間でやることね。そうでなければ死あるのみよ」

そういうとソノラはワグナを自由にした。ワグナは任務を遂行するべく、廊下を血相を変えて飛んで行く。ソノラは彼がいなくなったところで扉をしめ、再び水槽の中を見つめはじめる。

「やれやれ。使えない部下を持つと苦労するわ。でもそれもあとわずかだけだね。ふふ、ふふふ、あーははは！」

他に誰もいなくなった部屋に、ソノラの高笑いだけが響きわたった……。

第三十五話 渦巻く陰謀（後書き）

感想・評価をお待ちしております。

第三十六話 今明かされし伝説！（前書き）

後書きにお知らせがあります。更新停止のお知らせなどではないですがお読み下さい。

第三十六話 今明かされし伝説！

第三十六話 今明かされし伝説！

街に帰ってきた僕らは気絶させたアルカデのメンバーたちを冒険組合に預けると、とりあえず宿屋へ向かった。もう夜になりかけていたからである。そして宿屋で夕食を取るため食堂へと二階から降りていく。

「ふう、今日は疲れたな。まったくあいつらは一体なんだっただん？ アルカデなんて組織は聞いたことがないぞ」

咲がぐったりして言った。その身体はテーブルに寄り掛かっていてお行儀が悪い。

「咲、疲れたのは分かるけどその姿勢はダメだよ」

「さすがに田舎侍だけのことはあるの」

僕が注意すると、さらにナルが少し厭味つたらしく言う。咲は背筋を伸ばすとナルの食事の様子を食い入るように見はじめた。しかしナルは皿の山を作っではいたが、咲の期待するようなマナー違反はしていなかった。

「くっ、文句がつけられない！」

咲が思わず漏らした。ナルは勝ち誇ったような視線を咲に送る。咲の額に血管が浮かんだ。しかしそもそも咲が悪いことだったので怒れない。ナルは咲が怒らないのでさらに調子に乗る。

それがしばらく続いた後、ついに咲が爆発しそうになったところでスフィアが二人の間に割って入った。

「二人とも子供みたいだぞ。それくらいで喧嘩しない」

スフィアはそういつて二人に水を飲ませて落ち着かせる。だが、ナルの方がふと思うところがあつたのかこうつぶやいた。

「……私は子供じゃないの。それに私が子供だったらスフィアは大年増になる」

スフィアは耳が良い。よってナルのつぶやきは一言一句彼女の耳に入った。

「……僕は師匠や博士に報告するから先に部屋に戻るよ」

「わ、私も疲れたから戻るぞ」

僕と咲はスフィアのただならぬ気配を察知した。そして、その背筋がゾクリとする感覚に冷や汗をかきながらもその場から後退していく。そうして僕と咲は階段の前たどり着くと全速力で駆け上がり、二階の部屋に避難した。

「なんだとナルウ！ もう一度言いなさい！」

「聞こえてたの！」

ついにスフィアが爆発したようだ。しかしナルも負けてはいないらしい。口喧嘩をする声はつきりと一階からしてきた。

「な、なあ白河、今日はここで眠らせてくれないか。私にはあの二人の相手は無理だ！」

咲が強張った表情で僕に頼んできた。女の子を部屋に泊めるのはちよつと……でもあの二人と一緒に嫌だろうし……というか危険だ。

「分かった。だけど今夜だけだからね？」

「ありがとう。世話になるぞ」

やれやれ。僕はため息を一つつくと、かばんから博士から貰った通信機を取り出した。そして、師匠と博士に回線を繋ぐ。この通信機は同時に二つの回線を繋げるのだ。その様子を咲は後ろから覗き込んでいる。

『おお白河。わしの方は分析作業は順調だぞ』

『私の方も特に何もないわ。順調に旅を続けてる。勇者は相変わらず不気味だけどね』

二人は元気そうな様子だった。むしろ博士の方に至っては少し声が大きすぎるくらいだ。

『二人とも元気そうで良かった。実はこっちでちよつと困ったことがあつて……』

僕は二人に昼間に起きたことを説明した。二人は僕の説明に頷いていたが、その声色もやがて険しいものとなっていた。

『なるほどのう。おそらくクレナリオンを開発したのもそ奴らの作業だな。本当にやつかいなことだ』

『ただでさえ魔王がいるのに……この先どうしたらいいんだらう』

弱気な僕は頭を抱えて唸る。そこで師匠が話に入ってきた。

『魔王に関してはこちらでなんとかするから、白河はそのアルカデとか言う連中をなんとかしなさい。放っておくともなくでもないことをするわよ』

魔王は何とかするって……。まあそれはいいとし、て師匠が何やら意味ありげに、ろくでもないことをすると言ったように思えた。まるで何かやらかすと分かっていてるかのようなくちぶりだ。何かアルカデのことを知っているのだろうか？

『師匠、どうして何かやらかすと分かるんですか？』

僕がそう聞くと、師匠は一瞬間をおいて勿体振る。

『アルカデとか名乗ってるからよ。アルカデって言うのは今から遙か昔に滅びた国だってことは確か教えたわよね？』

『ええ、はい』

『そうよね。でも確か何故アルカデが滅びたまでは教えなかったはずだわ。それを今から話してあげる』

ここから師匠の長い話が始まった。僕は後ろにいた咲を横に座らせると、一緒に静かに話を聞く。

『アルカデというのは非常に文明の発達した国で当時の魔王を滅ぼし、地上に大帝国を築いていたわ。でもそんな国が滅びる原因となったのは一人の科学者のせいなの。名前は確か……ソノ……なんだったつけ？ まあいいわ。話を続け』

『ちよつと待ったその科学者の名前はソノラというんじゃないのか！』

咲が突如として師匠の話を遮った。そういえばあいつらドクターソノラ様とか言ってたような気がする。

『そうそうソノラよ。どうして知っているのかしら？』

『いや、連中を率いている奴がそう名乗っているんだ』

咲の言葉に師匠が呆然とした。しかしさすがは師匠と言うべきかすぐに精神を立て直す。

『うーんまさか本人？ ……さすがにそれはないわね。話を続けるわよ。そのソノラという科学者は若くして天才と呼ばれ、名声を欲しいままにしていたわ。だけどそんな彼女にも越えられない存在がたった一つあった。何かわかる？』

たった一つの越えられない存在？ 僕にはさっぱりわからないな。そう思っていると博士が小さくつぶやいた。

『神か』

まさか。それはないだろう。僕がそう思っていると、師匠が僕に

とって意外なことを言った。

『ご名答。その通りよ。彼女は神という存在を超えようとして、神に敗れた』

当たり前だ。そんなことできるはずがないだろう。だが天才が当てもなく無謀なことをするだろうか？ 僕の頭に嫌な想像が生まれる。

『その結果アルカデは滅びたわ。ただいろいろな話があつてね、中にはソノラはまだ生きてるなんて学説もある。もっとも今ソノラとか名乗ってる敵の親玉は偽物だろうと私は思っけどね。話はこれでおしまい。そろそろ遅いし通信切るわよ？』

師匠はそこまで言うと言通信をやめようとした。それを僕が止める。

『待ってください。師匠、そのソノラとか言う科学者はどうやって神に挑んだんですか？』

僕がそう尋ねると、師匠は僕の質問に歯切れが悪そうながらも答えてくれた。

『その方法はよく分かっていないわ。資料もほとんどないし、数少ない資料は全部教会が厳重に封印しているもの。ただ私が知っているのは精霊を利用した強力な兵器を造ったということぐらいかしらね。それ以上は知らないわ』

なるほど。もしかしてその兵器とやらを復活させるためにスフィアをさらおうとしたのか？ やつらはスフィアを魔族に対抗するた

めの兵器の鍵と言っていたが、実は神を倒すための兵器の鍵なんじゃない……。

僕はしばし思考の海に沈む。部屋の中が何とも言えない重苦しい空気になった。

『そろそろ通信切るわ。お休みなさい』

『わしもまた調査をせねば。何か分かったら連絡するから待っておれ』

師匠と博士はともに通信を切った。咲はまだ考え込んでいる僕を見て、話しかけてくる。

「白河、そんなに考えても仕方がないぞ。今日はもう寝てまた明日にしよう」

疲れていた僕は咲の提案を受け入れて、身体を洗うとベッドに潜り込んだ。咲もその後が続く。こうして僕らはひとまず眠りについた。ちなみに僕と咲を見て、翌日スフィアとナルが大騒ぎしたのは想定外だった。

第三十六話 今明かされし伝説！（後書き）

まずは読んでくれてありがとうございます！

お知らせのことについてなのですが、実はこの小説のタイトルを変えようかと思っているのです。改めて読んでみるとやはり、特徴がなさすぎるので……。

それについても新しいタイトルに関して意見などがある読者様は感想やメッセージで作者までお知らせください。参考にさせていただきます。

第三十七話 ある日森の中で!?(前書き)

今回は短いです

第三十七話 ある日森の中で！？

第三十七話 ある日森の中で！？

「本当に何もなかったって」

翌朝、ナルとスフィアに睨まれながら、僕と咲は朝食を取っていた。ベッドで一緒に寝ていたのはさすがにやばかったようで、ナルとスフィアはカンカンだ。

「そうは思えないの」

ナルが冷ややかに言い放つ。その視線はあたかも凍りついていくかのようだ。

「まあまあ。白河はそんなことしないぞ。なあ白河？」

スフィアが優しい顔で僕を見据えてきた。しかし目が異様に鋭い。

怖い、怖いよ咲い！

僕は咲の顔を見て助けを求める。咲は穏やかに微笑んだ。

「白河と私は二人が喧嘩していたから一緒に寝ただけだ。あ、あんなことやそんなことなんて……まったくしてないぞ」

咲！ そんな言い方したら逆に疑われるよ！ 僕は近い未来に起こる出来事を想像して椅子に座ったまま後ろに下がり始める。

だが案の定、僕が心配したように二人は下がる僕を恐ろしい目つきで睨みつけてきた。僕はもうただ笑うしかない。そうしている

うちに二人は僕に詰め寄ってきた。

「人間だもの。過ちはある。だから今回は許してあげるの。でも次は……」

僕に顔を近づけていたナルが首を手刀で切る動作をした。僕は恐さのあまり無言で何度も頷く。スフィアは何も言わずに咲の方をまっすぐ見ていた。咲はスフィアの威圧感に圧倒されている。

「そ、そろそろ時間も遅いし出発しないか。次はドラグナー王国だぞ。長旅になるから早く行こう」

咲は声を絞り出して言った。ナルとスフィアもそれに賛成した。こうしてようやく今回の騒動は収まったのだった。

あれから様々な準備を済ませて僕らは大きな森を抜ける小さな道を馬車で走っていた。周りはすべて森に囲まれている景色だ。これを見て、さつきから思っていたのだがこの辺りはほんとに森ばかりだ。ただ、この大陸は砂漠や雪山、草原など以外はほとんど森林らしいけど。そんな景色を見る事に飽きてしまった僕は馬車の中を見回す。馬車のなかではいつものナルが本を読み、咲が地図を見ていた。

「咲、地図見せて」

「ああ、もちろん良いぞ」

咲に許可を貰った僕は地図を覗き込む。地図には山やら森やら

様々な絵が描かれていて、等高線と記号で表された日本の地図とはかなり異なっていた。

「ここが今いる位置だぞ。そして、この大森林を抜けたらいいよドラグナー王国だ。ただこの大森林を抜けるのに丸三日はかかる」

咲が地図を指差して解説をしてくれた。ほうほう、後少しで新しい国に着くのか。楽しみだな。

「ドラグナー王国は魔法と竜で有名。その王国の首都のすぐそばに目的地の竜の山があるの」

ナルがにわかに話しに入ってきた。そして脅かすように怖い話を始める。

「ただドラグナー王国までつながっているこの大森林は別名霧の森。すぐ霧が出やすく危険なの。さらにその霧に乗じて山賊が襲ってきたりもするとても怖い森よ。森の奥に入ったら最後、ほとんど出られない」

ナルは凄みを効かせて言った。咲と僕は互いに身を寄せる。すると、馬車の外から声がした。

「おーい、霧が出てきたぞ。もう遅いし今日はこの辺りで泊まることにしよう」

このタイミングでかよ！ 僕は心の中で激しいツツコミを入れた。しかし天候が変わるはずもない。仕方なく僕らは馬車を道の端に止め、泊まる準備をする。薪を集め、火を起こし、夕食の準備が終わった頃には辺りは霧で白

く染まっていた。

「ずいぶん濃い霧だな。止まって正解だった」

スフィアが雲の中にいるような状態になった森の様子に思わずそう言った。ほんとに、スフィアの言ったように止まっていなかったら今頃遭難していたかもしれない。

「ご飯ができたぞー！ さあさつさと食べよう」

今日の食事当番の咲が出来上がった料理を運んできた。おお、今日のおかずは魚の干物のようだ。咲は見かけ通り和食が好きなようだ。

「いただきます」

僕は挨拶をしてから魚を食べる。他のみんなもそれぞれ違った挨拶を済ませてから食べ始めた。

「この魚おいしい。なんて魚？」

「アイジって魚だ。私の故郷の方で良く捕れる魚でな、懐かしくてたくさん干物を買ってしまった」

咲は少し遠い目をした。きっと故郷のことを思い出したのだろう。僕も咲に釣られて日本のことを思い出す。うーんなんか懐かしいなあ……。

「お代わりなの！」

僕と咲が感傷的になっているとナルが皿を突き出してきた。

皿の中を見ると魚の骨だけが綺麗に残され、他はなくなっていた。慣れない魚料理を良くもこれだけ綺麗に食べれるものだ。ナルは食事に関する才能でもあるのかもしれない。ちなみにスフィアはナルの横で魚の骨と戦っていた。

「さすがというのかこれは。まあいい、好きなだけ食べれば良い。食糧にはまだゆとりがあるからな」

咲は慣れた様子でナルの皿の上に魚を送ると、自身は食事の後片付けをしはじめた。

「片付けたら寝袋を用意しよう。今日は疲れた」

僕はそういつて馬車の中へ戻り、寝袋を敷く。この世界の夜は早い。照明があまりないからだ。

「そうだな、今日は早めに眠ろう」

スフィアや咲もそういつて馬車に戻ってくる。その後が続いて、ナルがお腹をさすりながら戻ってきた。かなりたくさん食べたようだ。

「今日はもう寝る」

スフィアが寝袋に潜ろうとしたその時、遠くから甲高い悲鳴が聞こえてきた……。

第三十七話 ある日森の中で!?(後書き)

感想・評価お願いします!

第三十八話 世間は意外と狭い？（前書き）

最近忙しくて投稿遅めました。すいません。

第三十八話 世間は意外と狭い？

第三十八話 世間は意外と狭い？

森の中で悲鳴を聞いた僕らは、すぐに悲鳴の聞こえた方へと向かった。霧が立ち込める夕闇の森の中を走り抜ける。そうして少し走ったところで男に取り囲まれた女の子を見つけた。男たちは五人で武器をそれぞれ手にしている。ほぼ間違いなく山賊だ。

「まず……」

「どうかしたの？」

その光景を見たナルが、何故か具合悪そうにして後ろに引つ込んだ。そしてスフィアが心配そうにナルを見る。

「確かに気分が悪くなる光景だな。あの山賊たちは私が何とかするからナルは休んでいるといい」

咲がそういうと先陣を切って森の中から山賊たちの方へと出て行った。山賊たちの視線が突如現れた咲に集中する。僕もいかなくでは！ そう思って僕が出て行こうとするとスフィアの手が僕を遮った。

「スフィア？ どうして」

僕が止めた理由を聞くとスフィアは咲を一瞥して言った。

「咲にやらせてあげよう。咲は正義感の塊のような奴だから。ああ

「いう輩は自分でやらないと気がすまないだろう」

そう言われて僕は改めて咲の顔を見た。いつもと同じような穏やかな表情をしているが、目に鋭い光が宿っている。

ああ、咲はあいつらみたいなのがよっぽど許せないんだろうな……。そう思った僕は咲の様子を木陰から見守ることにした。

「ほう、こりやまた美人だぜ！」

「今日はついてらあ！かわいい娘を二人も抱けるぞ」

咲の顔を見た山賊たちは口々に汚い言葉を言いながら彼女に近寄っていく。それに対して咲の視線は冷やかだ。

「さあお嬢ちゃん、俺達と楽しもうぜ。気持ちいいからよ」

一人の山賊が咲に手を伸ばした。咲はただ黙って山賊を睨みつけている。

次の瞬間だった。

「ふぎや……」

山賊は超高速で後ろに回り込んだ咲に首筋を叩かれ、あっさりと気絶させられた。それを見た周りの山賊たちは動揺して後ろに下がる。

「ち、ちつとあやるじゃねえか。ただそいつは俺達の中じゃ一番弱いんだぜ。悪いことは言わねえからおとなしくしてな」

一人の山賊が震えた声でそういうと、山賊たちは全員で咲の周

りを取り囲んだ。すると咲の周りをぐるりと四人がかりで囲ったおかげで、山賊たちに余裕が戻った。

「四人まとめて相手じゃ手も足も出ないのか？ 腰のもんが本物なら俺達を斬って見ろよ」

げらげら笑いながら山賊たちが咲を囓し立て始めた。咲はうつとうしそうな顔を見ると、ただ一言だけ言った。

「お前らなど斬ったら刀が錆びる」

この一言は気の短い山賊たちを怒らせるのに十分だった。すっかり猿のように顔を赤くした山賊たちが咲を罵る。

「このくそアマア！ 許しちゃ置けねえ」

山賊たちは一斉に咲に飛び掛かかる。剣に斧にナイフにメリケンサック。様々な武器の軌道を咲は瞬時に見切ると、滑らかな無駄の一切ない動きでそれらを回避した。そしてまたたく間に盗賊たちの腹や鳩尾に拳を決めていく。ものの数秒で盗賊たちは全員地面に寝転ぶこととなった。

「咲！」

僕はすぐに咲の元へ駆け寄る。咲はそれを満面の笑みで迎えてくれた。

「心配してくれたのか？ 私があんなのに負けるわけないだろうに」

咲はいつもの調子でそういうと、縄でぐるぐる巻きにされてい

た女の子の方に向かった。

「大丈夫だったか？ 今解放してやるからな」

咲の刀がひらりと一閃した。縄とさるぐつわが切られ、女の子は自由になる。

「助かりましたわ。感謝しておきます。私の名前はアメリ。あなたたちの名前はなんですか？」

女の子は僕らの名前を聞いてきた。しゃべり方がなんか凄くお嬢様だ。髪の毛金色でカールしている。まったくどうしてこんな森の中にいたんだろう。

「私は桜坂 咲、そっちにいる男が白河 輝彦。あとあっちにいるのがスフィアで、それから……あれナルはどこだ？」

咲がみんなを紹介しようとする、ナルがいなくなっていた。さっきまでいたはずだけど……おかしいな。

「すまない。仲間を探してくるから待っていてくれないか？」

「ええ、いいですよ。ただ一人では不安ですわ。できれば誰が残って欲しいですわね」

アメリは不安げな顔をして言った。僕ら三人は顔を見合わせる。

「それなら男の僕が行こう。女の子が残った方が良さそうしね」

「それもそうだな。じゃあしっかりナルを見つけてきて」

スフィアがそういうと咲も頷く。僕はそれを確認すると、森の中へと入って行った。そしてしばらく辺りを散策したところで霧の中でも目立つ銀色の頭を見つけた。

「おいナルウ！ どうしてそんなところにいるんだよ！」

僕が呼び掛けるとナルはこちらをチラリと見た。そして言う。

「私は今、名前を他人に知られちゃいけない病にかかっているの。だから無理」

なんなのさそりゃ。僕は呆れながらもナルに言った。

「何を言ってるんだよ。ほら、行くよ」

僕は少々強引だが、ナルの手を掴んだ。そしてナルをみんなのいる方に引っ張っていく。

「あら、あなたもしかしてナルさん？」

意外なことにアメリカがナルを見て真っ先に声を上げた。さらに興味津々といった顔でナルを執拗に見る。ナルは顔を俯け、アメリカから目をそらした。

「どうして目をそらしますの！ まさか私のことを忘れてしまいましたがの？ ほら、学園で同じ組だったアメリカですよ」

目を逸らされたことに少し怒ったらしいアメリカは大声でナルに言う。それを聞いたナルはさらに露骨に目を逸らして言った。

「知らないの。アーリーと同じ組になったことなんてない……あ……」

ナルはしまったとばかりに口を押さえた。だがもう遅い。

「アーリーなんてあだ名、知っているのは同じ組の人だけですわ。やっぱりあなたはナルでしたのね」

アメリはしてやったりという顔になり、ナルを見る。ナルも、もう観念したのか目を逸らすのをやめてアメリの顔を見た。

「どうしてこんなところにいたの？ それにアーリーは出かける時はいつも付き添いがいたはず。一人でいるのはおかしいの」

ナルが苦い顔をしながらアメリに尋ねた。アメリはため息をつくと話し出す。

「それが、ハイランドに用があつて出掛けたのですけれど、帰りに先程の山賊に襲われまして。その時護衛たちは私をおいて逃げてしまいましたわ。あの、それよりもナル、あなたの方こそどうしてましたの？ 突然学園を辞めたりして」

アメリの問い掛けにナルは口ごもる。なるほど、これがいやだったのか。

「答えたくないんですの？ ならもう良いですわ。私、話したくない人から無理矢理に聞こうとするような不躰な真似はいたしませんの」

アメリカはそう言うてにこやかに微笑んだ。それにつられてナルの方も表情が緩む。

「何だかわからないがうまく行ったようだな。それなら今日はもう遅いし休むことにしよう。アメリカも一緒にどうだ？」

二人をずっと見ていた咲がそう言うときアメリカは頷いた。こうして僕らの旅に同行者が増えたのだった……。

第三十八話 世間は意外と狭い？（後書き）

感想・評価をお待ちしております。

第三十九話 森を抜けたら魔法の都（前書き）

今回は短めです。

第三十九話 森を抜けたら魔法の都

第三十九話 森を抜けたら魔法の都

五人に増えた僕らの一行は、森の中をひたすら南に向かって移動していた。

「へえ、あなたたちそんな目的で旅をしていらしたんですね。私にはすこし信じがたいですわ」

馬車の中での退屈しのぎにと僕に旅の話聞いていたアメリカが驚いたような顔をする。

「やっぱり普通はそういう反応だよなあ……。僕がアメリカの様子を見て何か複雑な感覚になっていると、アメリカが予想外の事を言ってきた。」

「あれ、でもたしか竜の山は登るのに管理している学園の許可が要りますわよ。あなたたちもう許可はお取りになりました?」

許可? そんなものいるのか。そんなの誰も取ってない気がするぞ。

「登るのに学園の許可なんていらなかったはずなの」

ナルが読んでいた本をパタリと閉じてアメリカに反論する。その声はわずかに上擦っていた。

「昔はそうでしたわ。でも最近ダールで大変な事件がありましたでしょう? それを受けて制度が変わりましたの」

アメリカはさも当然のように言った。それを聞いてナルが呆然とする。そりゃそうだ。ダートルでの事件の時すでにナルは僕らと一緒ににいたんだから。

「アメリカさん、その許可は条件がきつかったりするのか？」

二人の前に座っていた咲が困惑したようにアメリカに尋ねた。するとアメリカは肩を落として首を縦に振る。

「あなたたちは外国の方ですから難しいかもしれませんがね」

アメリカは険しい顔をした。みんなも困ったような顔をして押し黙る。そうして馬車の中が陰鬱な雰囲気になったところで、急に外から光が差し込んできた。あの暗い森を抜けたのだ！

「あれがドラグナー王国の誇る魔法都市ルーフィアですわ！」

御者台に身を乗り出したアメリカが興奮したように叫ぶ。アメリカの視線の先には 大きな街があった。湖の隣にある小高い丘に沿うように建物が立ち並び、その丘の頂上には赤い城のような建物が建っている。そして一番特徴的なのはその城のような建物の中心に聳える高い塔だ。赤い煉瓦の建物とは対照的に真っ白なその塔は青い空に映えて美しい。

「あの塔はいったい何なの？」

僕は気になったのでアメリカの方を見て聞いて見た。するとアメリカは困ったような顔をする。

「あれはシースライトタワーですわ。この街の象徴ですの。私はこれぐらいしか知りませんわ」

アメリカはそう言うとなルの方を見た。後はナルに任せるということらしい。

「もっと詳しいことでしたらナルさんの方が知っていますわ。そうですね？」

ナルはくたびれたような顔をした後で、アメリカの言葉に頷いた。さらに彼女は手に持っていた本から視線を搭に移すと説明を始める。

「シースライトタワーは古代の時代から建っている搭で材質は不明。その地下には古代の遺産が封じられてるそうよ。何でもエレメントを司る機械だとか何とか……。その古代の遺産を後の時代の魔法使いたちが守るために搭の周りに集まった。それが今のルーフィア魔法学園の原形となったの」

魔法学園なんて響き、それを聞いただけでも格好良いよな。僕も一週間ぐらい在学したいものだ。

「その魔法学園ってどんな所なの？ 僕も一応魔法使いだから興味あるんだけど」

好奇心が抑えられなかった僕はナルに質問する。ナルはそんな僕の質問に丁寧に答えてくれた。

「ルーフィア魔法学園はドラグナー王国が設立している学校よ。魔法使いの素質のある十三才から十八才までの子供が通うわ。でも学校というよりは研究機関としての側面が強くて、実用的な魔法とい

うより学問としての魔法を学ぶところよ」

面白そうだなあ。ホ ワーツの親戚みたいな感じなのか？
そうやって僕が想像を膨らませていると、咲が話しかけてきた。

「ところで許可についてはどうするのだ？ あそこに見える竜の山に住むという古代竜。その力を借りねばオルガ様の浮島には辿り着けないぞ」

咲はそう言つて丘の後ろにある黒い山を指差す。僕はその山を注意深く見た。その雲を貫く山は岩で覆いつくされ、不気味な紫の靄がかかっている。まさに魔境といった雰囲気だ。

「許可に関しては私とアーリーでどうにかしようと思う。だから心配しないで大丈夫」

ナルはアメリを見た。アメリは任せておけと言わんばかりの笑顔でナルを見つめ返した。僕らは少しほっとするとまた竜の山を見る。それだけ人を引き付ける不思議な魅力が竜の山にはあった。

「あれが竜の山か。なるほど強大な魔力を感じる。それに精霊もたくさん住んでいるようだ」

スフィアが馬を操りながら山の山頂の辺りを見て言う。精霊さん同士わかるようだ。

そうこうしているうちに馬車はルーフィアの前まできた。スフィアは道の端で馬車を止める。

「ありがとうございます。私はここからは歩いて学園まで帰りますわ。あなたたちも一緒に学園に来ます？」

アメリカが馬車から降り立つと、魔法学園の方へと続く道をさして言う。

「とりあえず僕らは馬車を置いてからにするかな。それじゃまた学園でね!」

僕らはこうしてひとまずルーフィアの街中へと向かったのだ。……。

第三十九話 森を抜けたら魔法の都（後書き）

感想・評価をお願いします！

第四十話 学園長と怪しい依頼（前書き）

祝日ですので連日投稿です。

第四十話 学園長と怪しい依頼

第四十話 学園長と怪しい依頼

僕は街の端にあつた馬を預かる業者に馬車を預けると、魔法学園に向かった。街を歩くローブをきた魔法使いらしき人々とすれ違いながら坂を登る。すると、魔法学園の威容がはつきりと見えてくる。その赤い煉瓦で構成された外観はどこか古い日本の大学のように見えなくもないが、雰囲気が異なっていた。ましてその奥に聳える高い高い塔などはさらに独特の雰囲気だ。

その魔法学園に僕はナルの案内で入っていく。

「とりあえず職員棟へいくわ。事務的なことはそこで行っているはず」

先頭を歩いていたナルはそう言って、真正面にある一際大きな建物に入って行った。それに僕らも慌てて続いていく。ここは常時かなりの人数が出入りしているらしく、その人々に紛れて僕らはすんなりと中に入る事ができた。中に入って見ると、大きなエントランスになっていた。豪華なシャンデリアが照らすその中を人が盛んに行き来している。

「へえ、結構騒がしいところなんだね」

イメージとは違う様子に、僕はナルに率直な感想を言う。ナルは聞き慣れた感想なのかなめらかに返事をした。

「職員棟は出入りしている業者さんとかが良く来るもの。それ以外にも今の私たちのように学園に用がある人が来たりするし。だけど

教室棟や宿舎は静かなの」

「そうなんだ。なるほど」

僕はそういつとまた歩き出したナルに続く。ナルは長い階段を三階まで登り、廊下を歩く。両端に小さな石像の飾られた廊下はいかにもと言った感じだ。

「遅かったですわね。待ってましたわよ」

木製の扉の前にアメリカが立っていた。彼女は盛んに手招きしている。扉には事務室と書かれていた。

僕らは素直にアメリカの手招きに従い、扉に近づく。

「それじゃ入りますわよ」

アメリカは扉を開けた。中では背の低い老婆が書類と格闘していた。僕らには気がついていないようだ。

「おばあさん、おばあさん！ こっち見てくださいますし。私たちあなたに用がありますのよ」

アメリカがおばあさんを何度も呼ぶ。するとようやく僕らに気がついたようでこっちを見てきた。

「おやおや何のようだい……ってあんたナルかい？ 久しぶりだねえ。わたしや懐かしいくらいだよ」

おばあさんは驚いた様子でそう言つと両手を広げた。ナルもそれに応じて、おばあさんの胸に飛び込む。どうやら二人は知り合いら

しい。

「私も会えてうれしいの。でも今日は言わなきゃいけない用がある」

ナルはおばあさんから離れると、事情を説明し始めた。するとおばあさんは険しい顔になる。

「困ったねえ。竜の山に登るには学園長先生の許可がいるんだよ。それが無いことには手続きできないねえ。ごめんよナルちゃん」

ナルが説明を終えたとおばあさんはそう言った。その言葉にアメリカが噛み付く。

「ちょっとぐらいどうにかありませんの？ あんなに大きな山なのですから何人が隠れて登ったところではれませんわよ」

それはいけない気がするな。そう僕が思うと案の定思った通りの答えが帰ってきた。

「それはダメだよ。規則があるからね。どうしても登りたいのなら、学園長先生の許可を得てきておくれ」

「そうですわね。そう致しますわ」

アメリカはそう言って扉を開け、部屋を出て行った。僕らもすぐに後を追う。

事務室からさらに階段を登った廊下の先でアメリカが腰に腕を当ててイライラしたように僕らを待っていた。

「まったく気の利かない人でしたわ。少しぐらい良いでしょうに」

アメリカはおばあさんの対応にいらついているようだった。それをスフィアが年長者らしくなだめる。

「まあまあ、そう怒らない。怒ると身体に悪いぞ。それよりここが学園長の部屋なの？」

スフィアは何も書かれていない扉を見てなだめるついでに質問をした。アメリカは深呼吸すると、気分を落ち着かせたのかゆっくりと質問に答える。

「ええそうですわ。ここが学園長先生の部屋ですわよ。何も書かれてませんからわかりにくいかもしれませんが」

スフィアはアメリカの答えに納得したように首を振る。

それを確認したところでアメリカは扉についていた金色の呼び鈴を鳴らした。カランカランと澄んだ音がする。すると中から老人の声がした。

「誰じゃ？ 用があるのなら入りなさい」

「失礼します」

威厳のある声に僕らはみんな緊張しながら返事をした。そして部屋に入る。部屋の真ん中に大きな机があった。そこに白い髭を蓄え、大きな黒い三角帽子をかぶった老人が座っていた。

「ほう、これはまた珍しいお客様じゃの。して、わしに何の用かな

「？」

学園長は僕らを見ると興味深そうな笑みを浮かべた。そこでナルが代表して事情を説明する。その話が進むにつれて学園長の顔は陰しくなっていた。

「ふうむ……。どうやら大変なことが起きとるようじゃ。よろしい、許可を出そう。ただし一つやって欲しいことがある。頼まれてくれるかの？」

学園長はそう言っ僕らの顔を見回した。何を頼もうと言っのだろう。厄介な気配しかない。しかし、これは引き受けるべきだろう。

「わかりました。引き受けます」

ナルも引き受けるしかないことがわかったのかそう言った。それを聞いて学園長は顔をほころばせる。

「おお、頼まれてくれるか。その依頼の内容なんじゃがの、最近この学園で黒い影のような物が目撃されておるようなのじゃ。先程まではさほど気に留めておらなんだがの、お前さんたちの話を聞いたらどうにも気になっての。これの調査をして欲しい。情けない話だが、学園の教師よりお前さんたちの方が実力はあるそうじゃからの」

学園長はそういうと机の上に置かれた小さな鈴を鳴らした。するとしばらくして、廊下からバタバタと音がしてくる。そして扉が勢い良く開かれる。

「お呼びですかあ学園長先生」

扉を開け部屋に入ってきた女性は舌足らずな高い声で言った。
たぶん大人なんだろうけど……中学生くらいにしか見えない。

「フィー先生、実はの……」

学園長はフィー先生を呼ぶと説明を始めた。フィー先生の感嘆の声が漏れ聞こえてくる。

「わかりましたあ！ 私が皆さんのお世話をすれば良いんですね！」

そう言ってフィー先生は学園長にビシッと敬礼した。学園長は生暖かい目でそれを見ると、こっちに視線を移す。

「心配じゃのう……。でも仕事がない先生は他におらんしの。お前さんたち、これから先のことはこちらのフィー先生に頼んだからの」

「よろしくですう！」

フィーは先生はニコニコして挨拶をした。不安だ、すごく不安だ……。この場にいるほぼ全員がそう思った。スフィアだけは違っているように見えたが。

「よ、よろしくお願いします」

僕がみんなの代わりに振るえ気味の声で言った。するとフィー先生は手を出してきた。なので僕はがっちりフィー先生と握手をするのだった。いつになく不安になりながら……。

第四十話 学園長と怪しい依頼（後書き）

感想・評価をお待ちしております。

第四十一話 怪しすぎ？ 陰険魔法教師

第四十一話 怪しすぎ？ 陰険魔法教師

「調査は夜に行きますう。それまであなたたちはこの部屋で休んでいて下さい」

フィー先生は建物の端の小さな部屋に僕らを案内すると、そういつて部屋を出て行った。とりあえず僕は部屋に置かれていたソファーに腰掛ける。うん、なかなか坐り心地の良いソファーだ。

「私もそろそろ部屋に帰りますわね。でもまた夜になったら来ますから、調査に連れて行って下さいましね」

アメリカはそのまま部屋から出て行こうとしたので慌てて僕は声をかける。

「ねえ、ちょっと！ 調査に連れて行くのは無理だよ。危ないから」

「平気ですわ。学園長先生はああ言っていましたけど、この学園に強い魔族が侵入することなんて不可能ですもの。だから大丈夫ですよ。それに私、治療魔法が使えますから何かあった時でもきつとお役に立ちましてよ」

アメリカはどこからか金色の扇を取り出して、高笑いを始める。

…… 大丈夫かなこの人。

「大丈夫。アメリカは馬鹿っぽいけど、見た目ほどは馬鹿じゃないわ」

ナルが僕に耳打ちをした。いつのまにナルは読心術をマスターしていたんだ？

「ナルさん？ 今遠回しに私を馬鹿にしましたわね！」

アメリが額にシワを浮かべて叫ぶ。ナルはその大声に耳を押さえた。

「うるさいの。それはあなたの被害妄想」

ナルのきつい言葉にアメリが固まった。危険を感じた僕は二人から距離を取る。

「ムキィー！ も、もう帰りますわ！ それではご機嫌よう！」

アメリはドアを勢い良く閉め、足音を響かせながら部屋から出て行った。

「ナル、あれはやり過ぎ」

「私もあれはどうかと思うぞ」

スフィアと咲が口々にナルを非難する。しかし、ナルは無表情なままこう言った。

「ああ見えてアメリはいじめられて喜ぶタイプ。だから問題ないわ。むしろあれくらいしないと本人が満足しないの」

衝撃のカミングアウトに部屋の空気が凍りついた。どこからか寒い風が吹き抜けた気がする。

「……そうなのか」

「しゅ、趣味は人それぞれだからな!」

スフィアと咲はそう言ったきり黙り込む。そんな微妙な空気のまま時間が過ぎて行った。

「さて出発しますですよ、ってあれ、何なのですかこの空気」

日が暮れてフィー先生がやって来た。しかし彼女は部屋の中の妙な空気に驚く。するとナルがボソツと言った。

「私の冗談をみんなが間に受けたの」

何……冗談だと。

「ナ、ナル……騙したなあ!」

スフィアが真っ赤になって怒る。ナルは立ち上がり、広い部屋の中を逃げる。

「だ、大丈夫だぞ白河。あの悪魔からは私が守ってやる」

どさくさに紛れて咲が僕の身体を抱き寄せ、がっちりとガードする。

「一時休戦なの!」

「くっ、やむを得ないか！」

咲と僕の様子を見たナルとスフィアは、手を取り合って接近してきた。咲は僕をさらに強く抱き寄せる。

「咲？ 抜けがけはダメだぞ？」

「そうなの。その手を白河から離して」

黒いオーラを放ちながら二人は仁王立ちする。咲は二人をキリと睨み返した。一触即発。やばい空気だ。
こっという時はどうしたらいいんだ？

「こらっ喧嘩しちゃダメなのですよ」

フィー先生が教師らしく一喝した。まったく迫力はなかった。でも、三人はおとなしくなる。

「それでは行きますよ。まずは庭園からですう」

フィー先生はドアを開けて僕らを廊下と呼ぶ。僕らはすぐに廊下に出た。

廊下は魔法の光で薄ぼんやりと照らされていて、飾られている彫刻が不気味さを醸し出している。

「私がお邪魔する前に勝手に出掛けないでくださいまし！」

「うわあっ！」

後ろからアメリカが話し掛けてきた。僕はびっくりして飛び上がる。

「人をお化けみたいに扱わないでくださるかしら」

アメリカは不機嫌そうにそう言うと言いついて来る。フィー先生は何か言いたそうだったが、アメリカの気迫に押されたのか黙っていた。

そうしているうちに僕は庭園の入口に着いた。

「この庭園にあるシースライトタワーの周辺で黒い影はよく見られるそうですよう。だから注意してくださいですう」

シースライトタワーは月明かりを反射して淡い輝きを放っていた。僕らはその根元に広がる庭園をゆっくりと歩き、辺りを見回す。庭園には様々な花が咲き乱れ、植えられている樹木と合わせて幻想的な雰囲気だ。

「気だ。誰か来るぞ」

咲が鞘から刀を抜き放つ。白銀の刃が煌めいた。僕も杖を構えて魔法の用意をする。スフィアやナル、フィー先生も戦闘準備をする。ちなみに戦えないアメリカはみんなの後ろに逃げ込んだ。

木々の間から怪しい人影が見えた。紫色の長髪に、病的に白い顔彫りが深くてギョロリとした目が気味悪い。

「誰だ！ ただものではないな！」

咲が不振な男に刀を突き付けた。それに男は驚いたような声を出す。

「一体何の真似だ。フィー先生、事情を説明してくれたまえ」

男はフィー先生の姿を見つけると、鋭い目で睨む。フィー先生は素っ頓狂な声を出した。

「ふえ、クレイブ先生ですか？ どうしてこんなところに？」

先生だつて？ こんな警察がみたら間違いなく職務質問しそうな人なのにな？

「見回りだ。フィー先生の方こそどうしているのだ？ 生徒たちまで引き連れて」

クレイブ先生は僕らを見回した。僕らはひとまず武器を仕舞う。

「学園長先生からの命令で黒い影の調査をしていたんです。こちらの人たちは学園長先生が頼んでくれた助っ人の人たちで、アメリカ人以外は生徒じゃないですよ」

フィー先生がそういうと、クレイブ先生は僕らを値踏みするような目で見てきた。そしてしばらくの間見続ける。

「ふうむ。頼りにはならなさそうだな。まあ気をつけて調査するがいい」

僕らから目を逸らしたクレイブ先生はそれだけ言い残して足早に歩き去って行った。

「ふう、やっといなくなった。それでは調査を続けるですよ」

フィー先生はクレイブ先生が苦手らしく、彼が見えなくなったのを確認すると一息ついた。そしてまた調査を開始する。黒い影の調査はまだ始まったばかりだ。

第四十一話 怪しすぎ？ 陰険魔法教師（後書き）

感想・評価をお願いします。

第四十二話 謎の影と秘密の話

第四十二話 謎の影と秘密の話

魔法学園の庭園で僕らは影の調査を続けていた。木々の間や噴水の陰、あらゆるところをくまなく調べる。

「何も見つからないですわね。もう遅いですし、私は帰りますわ」

アメリはもう飽きてしまったのか、そういつと宿舎に向かって歩き始めた。彼女は夜の庭園を一人でずんずん歩いていく。

「一人で行動したら危ないですよ。あともう少しですから待って下さる」

フィー先生がアメリを追いかけて、庭園の奥へと消えて行った。その場に残された僕らは互いに顔を見合わせる。

「僕らも後を追いかけた方が良いのか？」

僕がみんなに意見を求めると、咲とナルが首を横に振った。

「いや、気は感じないから敵は多分いない。大丈夫だろう」

「一応、魔法学園の教師はそれなりには強いはずなの。だから大丈夫」

大丈夫そうだな。安心した僕はこの場に残ることを提案する。

「それなら僕たちは調査を続けようと思うけど、スフィアもそれの良い？」

「私はみんなの考えに従おう」

意見を言わなかったスフィアも賛成したので、僕らは調査を再開する。だが、しばらくしてもフィー先生とアメリカは戻って来ない。

「遅いなあ、様子を見に行こうか。咲、二人のいる場所は分かる？」

さすがに心配になってきた僕は咲に聞いて見た。その問い掛けに咲はすぐに答える。

「えーと、ここから少し南に行つたところに二人そろっているぞ」

「よし、行ってみよう」

僕はみんなを連れて、咲の案内で二人のいる場所に向かった。早足で庭園を歩くと、噴水を中央に配した広場が目飛び込んだ。それと同時に何かが倒れているのも見えた。僕は恐る恐るそれに近づいてみる。それはなんと幼く見える女性と金髪カールの少女だった！

「大丈夫か！」

咲はすぐさま二人に駆け寄った。僕らもすぐに駆け寄り、二人の状況を確認する。

「大丈夫なの。命に別状はない」

脈を計ったナルが安心したような声で言った。僕らは少しホツとする。すると、フィー先生が頭をさすりながら起き上がった。

「いたたあ。頭が痛いのですよう」

「フィー先生、大丈夫ですか！」

「頭が痛いですけど他はたぶん大丈夫なのですよ」

フィー先生は僕の問いにそう答えると、辺りを見回した。そして杖を使って立ち上がる。

「影はもうどこかに逃げてしまったようですね……」

フィー先生はさっきまでと違って真剣な眼差しでそう言った。僕らを緊迫した空気が包む。

「フィー先生、襲われたのはいつ頃？」

ナルが剣のような目つきをしてフィー先生に尋ねる。尋ねられたフィーはすぐさま答えた。

「ここに着いたらすぐに何かで殴られたのですよ」

「なるほど。咲、それぐらいの時間に変な気は感じなかったの？」

「感じてないな。もし感じたならみんなにすぐに知らせたぞ」

咲の返答にナルは黙り込む。そして何かぶつぶつぶやき出した。

「……おかしい、おかしいの。私も何の魔力も感じなかった。犯人は何者……」

ナルがそうやってつぶやいていると、広場の端に明かりが見えた。ぼんやりと見える姿からしてクレイブ先生だろう。

「うぬ……フィー先生これはどういうことですか？」

クレイブ先生は倒れているアメリに気がつく、青い顔をした。さらにフィー先生を問い詰める。

「私は何もしてないですよ。影に、影に襲われたんです」

「影？ まさか本当に影に襲われたとかおっしゃるつもりですか？」

クレイブ先生は疑わしげに頬をさすりながらフィー先生を見た。その態度にフィー先生は顔を赤くする。

「本当なのですよ！ 私は嘘はつきません！」

「ふうむ、とりあえず先生達を集めよう。話はそれから良いですからな」

クレイブ先生は学園長室で見たのと同じ鈴を取り出し、チリンチリンと鳴らす。それから五分とたたないうちに先生達が三々五々集まってきた。

「クレイブ先生これは一体何事ですか？」

一人の先生が困惑したように尋ねる。それにクレイブ先生は至極冷静に答えた。

「フイー先生とこちらの生徒一名が噂の影に襲われたそうだ」

先生達の間には動揺が広がった。動揺した先生は隣近所の先生と口々にヒソヒソ話を始める。さらに誰それが犯人だとか騒ぎ立てる先生まで現れた。

「皆の者、落ち着くのだ！」

杖をつきながら遅れてやってきた学園長が怒鳴った。先生達は水をうつたように静かになり学園長の方を見る。

「まずは犯人探しよりも生徒達の安全を確保するのじゃ。フイー先生、クレイブ先生以外の先生方は宿舎に向かい生徒達が全員揃っておるか確認してまいれ。それが終わったら職員室で会議じゃ。それでは行け！」

学園長が力強く言うと、先生達は宿舎に向かって一斉に駆け出して行く。そうして先生達がいなくなったところで学園長が僕らに話し掛けてきた。

「どうやら恐れていたことになってしまったようじゃ。君達はアメリカ君を保健室へ連れて行ってくれ。その後のことは明日また話そう」

「わかりました、学園長先生」

「うむ。アメリカ君のことは頼んだぞ」

学園長はそう言って僕らの元を離れると、フィー先生の近くへ移動した。

「事情を聞きたいのでわしの部屋まで来てくれ。事が一段落してからでかまわんからの」

「わかりましたです」

「よし。クレイブ先生、ちとこっちへ来てくれ」

学園長はフィー先生が了解したのを確認すると、クレイブ先生を近くに呼び寄せた。そして共に広場の端へ移動し、小声で話をする。僕は話の内容が気になったので、アメリカには悪いがこっそり近くで話を聞いていくことにした。

「クレイブ先生、鍵は大丈夫か？」

「もちろんです。私が肌身離さず持つておりますゆえ」

「よろしい。明日の午後一度”あれ”がきちんとあるか確認したい。鍵を開けてくれ」

「承知しました」

クレイブ先生がそういうと二人は何事もなかったように職員棟へと戻っていった。僕は二人のことが気になったが、アメリカを放っておくわけにもいかなないので、保健室へと移動を開始する。

「鍵とか”あれ”って何だろう？ ナル何か知ってる？」

「知らないの」

保健室へと向かう途中でナルにも聞いてみたが、やっぱり何も知らなかった。気になるなあ……。そう思いながら、僕は保健室にアメリを預けた。そして部屋へと戻り、眠りに着く。このとき怖いからみんなで寝よう、とかナルが言っただ戦争が起きたのは思い出したくない。

第四十二話 謎の影と秘密の話（後書き）

感想・評価をお待ちします。

第四十三話 先生の怪しい噂（前書き）

戦闘が最近なくてすみません。

第四十三話 先生の怪しい噂

第四十三話 先生の怪しい噂

翌朝、僕はアメリカの様子を見るべく保健室へと来ていた。アメリカは白い服を着せられ、ベッドに寝かせられている。

「ふああ、あれ、ここはどこですか？」

「気がついたね！ アメリカは影に襲われて倒れてたんだよ。だから僕らが保健室に運んだんだ」

「そういえば確かに頭を後ろから殴られたような気が……」

目を覚ましたアメリカは後頭部を押さえると、そのままの姿勢で考え込む。

「どうしたの？」

考え込むアメリカを心配そうにナルが覗き込む。アメリカは弱々しい目でナルを見つめ返した。

「いえ、いま襲われた時のことを思い出そうとしたら何も思い出せないんです……。まるで何かかったようで……」

「無理に思い出さなくてもいい。ゆっくり思い出せばいいの」

「仕方ありません、そうさせていただきますわ」

ナルはアメリカに布団をゆつくりとかけてあげようとした。するとアメリカはいきなり布団をガバツと押しのける。

「ナルさんちよつと待ってくださいな。私はもう大丈夫ですわよ。だから休むのはもう止めて皆さんについて行きますわ」

「危ないの！　ここで寝ていた方がいい」

「私は襲われたまま黙っているような女ではありませんのよ？　犯人を捕まえてキイキイ言わせてやりますわ」

アメリカは首を絞めるような動作をした。どうやら犯人にかなりご立腹のようだ……。

「むう……言っても聞かなさそう。みんな、アメリカを連れていっていい？」

「私は構わんが」

「私も別に良いわ」

咲とスフィアは諦めたようにアメリカの同行を許した。

うーん……。他のみんなは許可したし……。どうしたものか。僕は深く悩む。僕がそうして額にシワを寄せていると、アメリカが僕の顔をうるうるした目で、しかも上目遣いで見てきた。

うう、そんな顔されて逆らえるわけじゃないじゃないか。

「まあ迷惑かけないなら」

僕が渋々許可を出すと、アメリカの顔がどんどん明るくなって行く。

「ありがとうございますわ。それでは早速調査に出発しますわよ！」

アメリカはベッドから降りて高らかに宣言した。そして腰に手を当てて、指を虚空に突き刺す。

「おおー!!」

なんだかんだでノリの良いみんなはアメリカに合わせ、気合いを入れたのだった……。

「まずは聞き込みですわ！　とりあえず影の噂について他の生徒たち聞いて見ますわよ！」

アメリカが廊下を踏み鳴らしながらどこかの刑事のようなことを言っている。いつのまにか彼女がリーダーのようになってるのはなんだろう……？

「アメリカ、いまさただけと授業は？」

ナルが思い出したように言った。そういえばそうだ。みんながアメリカの方に注目する。

「私は優秀ですよ。一日ぐらい大丈夫ですわ」

サボるのかよ……。みんな呆れたように生暖かい目でアメリカを見る。

「な、何ですのその目は！ ほ、ほらあそこにいる生徒に聞き込みをしますわよ」

アメリカは話題を無理に逸らすと、廊下を歩いていた女の子に声をかけた。

「そのあなた！ 調査に協力してくださいまし！」

アメリカはいつそ清々しいほど高圧的な態度で言い切ると、女の子をこっちに引っ張ってくる。

「あの、何ですか？ 私、忙しいんですけど」

眼鏡をかけた女の子はアメリカの強引な態度に戸惑ったようにオロオロとしていた。そして、僕らにすぎるような目を向けてくる。

「私たち影の噂について調べていますの。ほら、昨日騒ぎになったでしょう？」

「あれについてですか？ 私は何も知らないですけど」

女の子はいかにも興味なさそうに答えた。まあ普通はそうだよなあ。

「そうですか。なら仕方ありませんわね。失礼しましたわ」

アメリカはそれ以上聞いても無駄だと感じたのか女の子から歩き去って行く。僕らもそれに続いて立ち去ろうとした。

「ちょっと待ってください！ あの、あなたはもしかしてナル先輩

ですか？」

女の子はナルの姿を見つけると、さっきまでとは打って変わってナルに積極的に話しかけてきた。話しかけられたナルはキョトンとして立ち止まる。

「そうだけど、どうして？」

「私、先輩のファンなんです！ サインください！」

「え、それは別にいいけど……何故に私のファンなの？」

「先輩はとっても有名なんですよ！ 成績は常にトップでしたし、めっちゃくちやかわいい！ そして何より突然学園を辞めるっていうミステリアスな行動！ そのすべてに痺れるからです！」

「は、はあ……」

「というわけでここにサインを！」

女の子は持っていた本を差し出した。ナルは訝しげな顔をしながらもスラスラとサインをする。

「やったあ、ありがとうございます！ お礼と言ってはなんですけど、耳寄りな情報がありますよ」

女の子はナルから返してもらった本を大事そうに抱き抱えると、そう切り出した。その時、前を歩いていたアメリカがピクツと動いた。

「それは聞き捨てなりませんわ！ どうしてさっき言ってはくださ

「らなかったんですの！」

アメリカが眉間にシワを寄せて、凄い剣幕で女の子を怒鳴る。女の子はアメリカが怖かったのか早口で話した。

「話します、話しますから落ち着いて！ えーと、昨日襲われた現場の近くにいたっていうクレイブ先生には怪しい噂があるんですよ」

「へえ、どんなんですの？」

「それはですね……」

その後、女の子が話してくれた内容をまとめるところだ。クレイブ先生はフィー先生と同時に国の研究所の推薦でこの学園に入ったそうだが、良く姿が見えなくなるらしい。さらに彼がいなくなっている時と重なるように例の影が目撃されているそうだ。ちなみにこのことはあまり知られてはいないらしい。何でも、先生たちにすらあまり好かれてはいないクレイブ先生の行動を観察しているような人など、ほとんどいないからだそうだ。

「いよいよ本格的に怪しいですわね。まったくあの陰険教師は前々から何かやらかしそうだと思っていましたわ！」

女の子の話聞き終わったアメリカは顔を真っ赤にした。そして廊下を一目散にかけてゆく。

「どこ行くんだよー？」

「クレイブのところに決まってますわ！ あの陰険教師をとっちめてやるんですから！」

腹が立つてしかたない様子のアメリカは僕の質問に苛立たしげに答えると廊下をドタドタと走り、職員棟へと移動する。そして職員棟の廊下の端にある、クレイブと書かれたドアを勢い良く開け放った……。

第四十三話 先生の怪しい噂（後書き）

感想・評価をお願いします。

第四十四話 飛翔！ 飛行戦艦「シリウス」(前書き)

また悪役サイドの話です。本編進まなくてすいません！

第四十四話 飛翔！ 飛行戦艦「シリウス」

第四十四話 飛翔！ 飛行戦艦「シリウス」

極寒の山奥にあるアルカデの要塞。その最下層にあるソノラの研究室に、ワグナが報告をしにやって来ていた。

「ソノラ様、飛行戦艦の復旧が完了いたしました」

「あれからまだ五日だわ。ずいぶん早かったわね。褒めてあげる」

ソノラは飲み差しのコーヒーをテーブルに置くと、珍しくいい仕事をした部下に機嫌を良くする。褒められたワグナはホッと胸を撫で下ろした。

「それで飛行戦艦はもう出撃できるのかしら？」

「もちろん。命令があればいつでも出撃可能です！」

「よし、ならば予定より早いが早速出撃！ 目的地はドラグナーのシースライトタワー！」

「はっ！」

ソノラがそういうや否やワグナとその取り巻きは命令を要塞中に伝えるべく司令室へと向かった。ソノラ自身も飛行戦艦の格納庫へと移動を開始することにする。

「行ってくるわね」

ソノラは研究室の中央にある水槽に手を振ると、扉を閉じて部屋を後にする。水槽の中にある機械の目が怪しく揺らめいた。

「『竜の瞳作戦』開始！ 総員、一号格納庫の飛行戦艦に乗船せよ！」

金属のプレートが張られたトンネルのような通路にけたたましいサイレンが鳴り響く。その大音響の中をソノラは悠々と専用の道を使って飛行戦艦へと歩く。

数百メートルほど歩いたところでソノラの前に扉が現れた。扉には大きく「一号格納庫」と書かれている。

「暗証番号をご入力下さい」

ソノラは扉の脇に備えられた端末をチャカチャカといじった。すると端末から赤い光が延び、ソノラの瞳に当たる。

「個人データ認識完了。暗証番号、個人データ共に異常なし」

扉はプシュという音をさせると、滑らかにスライドした。ソノラはカツカツと足音を立てながら扉の奥に入っていく。

「これは素晴らしい。『昔見た時』と変わらないわ」

ドームのような部分から、三本に分かれた船体が伸びる独特のフォルム。長年地底に埋まっていたにも関わらず鈍い輝きを放つ鉛色の装甲。そして装甲の合間から垣間見える無数の砲塔が異様なまで

の存在感を発している。その飛行戦艦の中央付近には「シリウス」という文字と獅子をあしらったエンブレムが刻まれていた。

ソノラはかつて見た時と同じそれらを見て、愉悦の表情を浮かべた。そしてタラップを揺らし、戦艦「シリウス」に乗り込む。そしてソノラは長い通路を抜けて司令室に到着した。

「ソノラ様！」

「ご苦労。準備は完了したか？」

「もう間もなく完了いたします」

「そうか、ならば急ぎなさい」

「はっ！」

大学の講堂のようなすり鉢型をしている司令室にソノラが入ると、オペレーターたちが敬礼を決める。ソノラはそれを確認すると作業の続行を指示した。しばらくして全天モニターに光が点り、グラフやシリウスの船体が三次元的に表示される。

「メインジェネレーター起動。虚数空間展開。魔力抽出開始」

「メインコンピュータ起動。システムオールグリーン」

「魔力注入開始。メインエンジン起動。出力30%」

シリウスの船体が微かに震えた。司令室の下からわずかだがエンジンの駆動音が響いてくる。

「エンジン出力50%に上昇。反重力システム起動」

「全乗組員の乗船を確認。隔壁を封鎖。タラップ収納します」

金属同士がぶつかる嫌な音を奏でながら、次々と隔壁が下ろされてゆく。タラップも船内へと収納され、シリウスは周囲から切り離されたようになった。

「ソノラ様。格納庫の扉を開けます」

ワグナが要塞の方から無線で連絡してきた。オペレーターたちは無言で頷き、まだまだたくさんある作業を続行する。

「エンジン出力定格値に到達。安定化作業へ移ります」

「シリウス、浮上します」

軋むような音がして船体が大きく揺れた。ソノラは思わずバランスを崩してよろける。しかし、トップの醜態など無視するかのよう
にオペレーターたちは慌ただしくキーボードを叩き続けた。

しばらくして、ガクンと言う音がして格納庫の天井が開き始めた。いよいよ山々が揺れ動き、格納庫の天井が降り積もった雪を吹き飛ばしながら開いていく。

シリウスの船体が地下から浮上し、空高く舞い上がっていった。鉛色の船体が弱い陽光を反射して威風堂々とした様だ。

「位相空間シールド展開。シールドシステムオールグリーン」

「目的地設定。ドラグナー王国、シースライトタワー」

モニターの左側に世界地図が表示され、その上で赤い点が二つ点滅する。大陸の北にある点が現在地で、南にある点がシースライトタワーを示しているようだ。

「全システムオールグリーン。ソノラ様、出発のご命令を！」

「よし、それでは飛行戦艦『シリウス』……発進！」

オペレーターの要請にソノラは腰に手を当てて、空中ビシッと指差した。紫の髪が靡き、瞳が金色を帯びる。その口から放たれた勇ましい号令は司令室に轟き渡った。オペレーターたちもそれに呼応し、司令室に歓声がこだまする。

シリウスの後方から青白い炎が激しく噴き出す。シリウスは急加速し、シースライトタワーに向かって飛んで行った。

第四十四話 飛翔！ 飛行戦艦「シリウス」（後書き）

飛行戦艦がSF的すぎるかも……。
感想・評価をお願いします。

ひとまず打ち切りのお知らせ（前書き）

大変重要なお知らせでありますのでお読みください。

ひとまず打ち切りのお知らせ

このたびなのですが、この小説をひとまず打ち切りをすることを決めました。

気分が乗らずほかの小説が増えてしまい、そちらがメインとなってしまうからです。

ですのでそちらが片付くまでこちらのほうを更新停止とさせていただきます。

楽しみにしてくださっていた読者の皆様には申し訳ありませんが、ご了承のほどなにとぞお願いします。

#####

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3083n/>

科学な異世界記録

2011年5月31日14時34分発行